プルタルコス（伊太利）

モンテスキュー（佛國）

●タキツス（タシタス）（伊太利）

西暦五四年―一二〇年
日本垂仁帝八三年―景行帝五〇年

ガイウス、コルネリウス、タキツスはプルタルコスに次ぐ古代の史家なり。其幼時に就ては歴史の知るべきものなし。ヴエスパシアン皇帝の知る所となりて重用せられ、ドミチアン皇帝の代には法官たり、ネルヴ帝に歴仕して九十七年執政官となる。雄辯を以て名を博す。プリニーの記す所によれば當時の羅馬に於て彼と拮抗すべき雄辯家は一人だも之れ有らざりしといふ。されど彼の名聲を不朽に傳へたるものは實にその歴史にして、其拉丁文の巧妙と莊美は、描寫の妙と相俟て古代歴史書中の寶典たり。最初タシタスの歴史はガルバ帝の即位よりトミチアン帝の死までを記したりと雖、大部分は紛失して現存せるは僅少の部分に過ぎず。中に就て年表は後世史家の最尊ぶ所、ゲルマニアス人の風俗、アグリコラ傳の二篇は缺損せず。チベリアス治世史は斷片なりとす。

●ボルテール（佛國）

西暦一六九四年―一七七八年
日本元祿七年―安永六年

佛國革命の間接の指導者と稱すべかりしボルテールは巴里に生る。幼にして穎悟、ジエスキット派の學校に入りしが其文章並に辯舌の才は屢、其師を驚かしたり。十七歳にして法律學校に入りしが、常に作詩を事とし放縱不拘なりしかば父は之を白痴なりとし、各種の職業に從事せしめしも一として成功せざりき。しかも此間に在て彼は熱心作詩の從ひしが、其詩常に當時の政治を譏刺せしかば、彼は屢、執政官の怒に觸れ、遂に禁錮の刑を受くるに至れり。一七一七年戲曲「オイディパス」を著し其の演せらるゝや巴里を逐はれたり。次で劇場戲曲「ヘンリアデ」「アルテミス」等を著し、一七二二年和蘭に漫遊し、一七二六年再び禁錮せられたるが一箇月にして釋され直に英國に渡り「チャールス七世傳」を著はせり。其死は佛國大革命に先つ僅に十年なりき。ボルテールの作各種の方面に於て其數甚多し。いづれも文章の妙を極め、當時の治及宗教の弊を罵りて冷嘲骨に徹し、革命的思想の流布に就て最も力ありき。

●プルタルコス（プルターク）（伊太利）

西暦四八年――
日本垂仁帝七七年――年

希臘のベーオーシアに生る。デルフイに於てアムモニウスの教を受け若くして國人の尊敬を受け、鄕國の政治に携はりてよく其任を盡し國勢を進むるに努めたり。後希臘の各地拜に埃及に漫遊し、其イシス傳及びオシリス傳の材を得たり。尙傳ふるところによれば羅馬に於てトラヤヌス帝より厚遇せられ、執政官に任せられ、イルアの地を治むといふ。羅馬に在住せしは事實なるが如く、茲に彼は哲學を講じ、又ルカン、プリニー、マルチャル等と交を結べり。後故鄕に歸りて其地に死すといふ。其著はす所の偉人傳は東方諸國の偉人を傳へたるものにして公正偏せず、よく人情の機微を穿ち、古代の歴史を知るに於て最貴重なる寶典たるのみならず、興趣甚多く、各國の語に飜譯せられ、長く後世人に愛讀せらる。其道德論また有名なりとす。死亡の年月は詳ならず、歴史家間に定說なし。

●モンテスキュー（佛國）

西暦一六八九年―一七五五年
日本元祿二年―寶暦五年

佛の文豪モンテスキューは、ボルドーに生る。其家は貴族なり。幼にして讀書を好むこと人に超ゆ。最好んで歴史及道德書を涉獵す。一七二一年始めて其著書波斯書簡」を公にするや、奇警なる觀察と透徹せる眼光とは、甚く當時の讀書社會を驚かし忽ちにして文名一世に喧傳せり。一七二八年佛國學士會院に列せらる。それより歐洲各地を漫遊し著はす所甚多し。一七三四年羅馬興亡論」の一著を公にす。爾來專心「法律の精神」の大著に身を委ね、刻苦すること十四年、一七四八年稿成りて上梓するや、讀書界空前の大歡迎を受け、僅々十八箇月間に二十餘版を重ぬるに至れり。これより學界の耆宿として世人の尊敬を受けしが、遂に巴里に死せり。

●ランケ（獨逸）

西暦一七九五年—一八八六年
日本寛政七年—明治一九年

古今獨歩の史學大家ランケはゴーイに近きウィーベに生る。ライプチヒ大學に於て古典學及び神學を學び、二十二歳にして、フランクフルトの一學校に教鞭を執り、古典學及び史學を教授し、其間古代中世の歴史を研究して、「羅馬獨逸民族史」を著はせり。一八二五年ベルリン大學教授に拔擢せられ、爾來五十年間學生の教育に從事し、傍らベルリン圖書館に入りて古書を渉獵し、宗教改革時代に關する研究に就いて一書を公にし、史家從來の誤謬を正せり。後政府の命によりて、ウイーン及びイタリアに旅行して史料を蒐集し、科學的研究法を史學に應用する基礎を造り、名著頗多くして、盛名嘖々一世を風靡し、一八六五年遂に貴族に列せらたり。しかも氏の篤學にして精力の偉大なる、其大著「世界史」に着手せしは實に八十一歳の高齢に達せし時にして一八八六年之を脱稿せり、氏は史學に科學的研究法を應用し、力めて偏見に陷ることを避け、該博なる學識を以て冷靜に批判し、穩健なる斷案を下したれば其議論確實不偏、文章又平易流暢、實に讀者をして、賞讃を禁せざらしむるものあり。其門下には彬々たる學者輩出し、獨逸の史學界に異彩を放ちたり。

●ギッボン（英國）

西暦一七三七年—一七九四年
日本元文二年—寛政六年

歴史を學んで羅馬衰亡史の名を知らざるものは莫かるべし。エドワード、ギッボンは實に其著者なり。ギッボンは英京倫敦に生る。幼にして病弱なり。オックスフォードに學びしも轉じて羅馬教會に入らんとせしかば、其父之を遮りて佛國なるカルビン派の僧に其教育を托したり。一七五八年彼は英國に歸り佛文を以て文學に關する論文を著はせり。一七六三年より佛蘭西、瑞西、伊太利等に漫遊して翌年に至り、其間に羅馬衰亡史の著述を思ひ立ち、爾來暇あるごとにこれが筆を執れり。一七七〇年選ばれて民選議員となり、職に在ること八年後佛國に住し一七八八年其羅馬衰亡史を完成せしが、佛國革命の起るに及び故國に歸り、一七九四年其の大著を遺して長逝せり。

●マコーレー（英國）

西暦一八〇〇年—一八五九年
日本寛政一二年—安政六年

トーマス、バビングトン、マコーレーは奴隷廢止運動の主導者ザカリー、マコーレーの子なり。英國ライセスターシャイアに生る。早くケムブリッヂに學び、クオータリー、レヴユーの寄書家となりしが、一八二五年ミルトン論を公にするや聲名嘖々として直に大家の列に入れり。一八三四年任に印度に赴き、一八三八年歸國し、エヂンバラより選出せられて議員となれり。印度の滯在は二大論文を彼に齎せり。普く本邦學生の間に傳誦せらるゝ「クライブ傳」及び「ワーレン、ヘスチングス傳」は即是なり。爾來彼は各種の批評的論文を草して、エヂンバラ、レヴユーに寄書せしが、一八四二年「古羅馬歌」を著し、次で公生涯を退いて專ら著述に身を委ね、有名なる英國史五卷を著せり。一八五七年其文學上の功績によりて貴族に列せられ、男爵を授けられ、一八五九年溘焉として歿せり。

●カーライル（英國）

西暦一七九五年—一八八一年
日本寛政七年—明治一四年

トーマス、カーライルは蘇格蘭ダムフレーシャイアに生る。十四歳エヂンバラ大學に入り業を卒ふるの後教師となれり。爾來專心獨逸語の研鑽に身を委ね、また歴史の研究に努むること年あり、造詣最深し。一八二一年、「シルレル」傳を草してロンドンマガジンに投じ、一八二四年ゲーテの「ウイルヘルム、マイステル」を譯し、次で獨逸小說通觀「ジャン、パウル、リヒテル及獨逸文學論」を出だし文名漸く高し、一八三四年有名なる「サーター、シサータス」を著し居をチエルシーにトして玆に住す。一八三七年「佛國革命史」を著はし、一八四三年英雄崇拜論」を著はす。觀察奇警識見高邁、加ふるに文辭の妙を極め、文名一世に高馳す。「過去と現在」「オリヴァー、クロムウエル」「ジョン、スターリング」「フレデリキ大王傳」其他の諸篇相次いで出づ。一八六五年選ばれてエヂンバラ大學總長となる。其就職演說は著名なる演說なりとす。一八八一年一代の聲譽を負ふて長逝せり。

（獨逸）ランケ

（佛國）ギッボン

爾イレシ、次ジ來彼傳及ビ、ツ、ク本邦學ン、ヘ、ス生印度ン、ヘ、ス論文ラ彼ら、レ、ル、ジョンソンタ、リ、ン、グ、フレデリキ大王傳王ヂ

八功績る英國史五卷を退いしが、一八四三年吉羅馬歌を著述に身を委ね有名
五九年に よ國公生涯を退いて專ら著述に身を委ね有名
滋馬とし生に各種の批評的論文を草し、一八四二年吉羅馬歌を著
て貴族に書せし書せしが、一八四三年傳記を草し、一八四五年
殁列せら せら。

八五七年に英國史を著はし、一八四四年に出づ。一八六六年に出づ。一八六五年に選ばれてエヂンバラ大學總長となる。其就職演說は著名なる演說なりとす。一八七一年代の榮譽を負ふて長逝せり。

（佛國）ギッボン（史家、羅馬衰亡史著者）

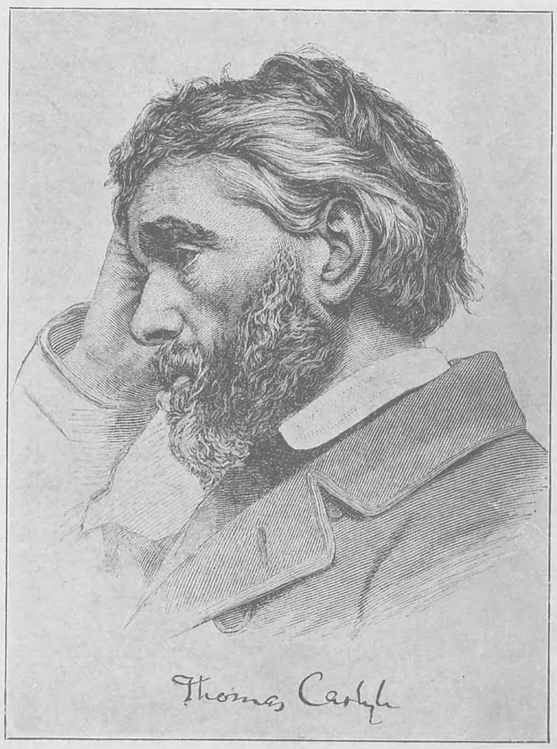
Gibbon.

世界百傑人畫錄

（獨逸）ランケ（近世の大史家）

Ranke

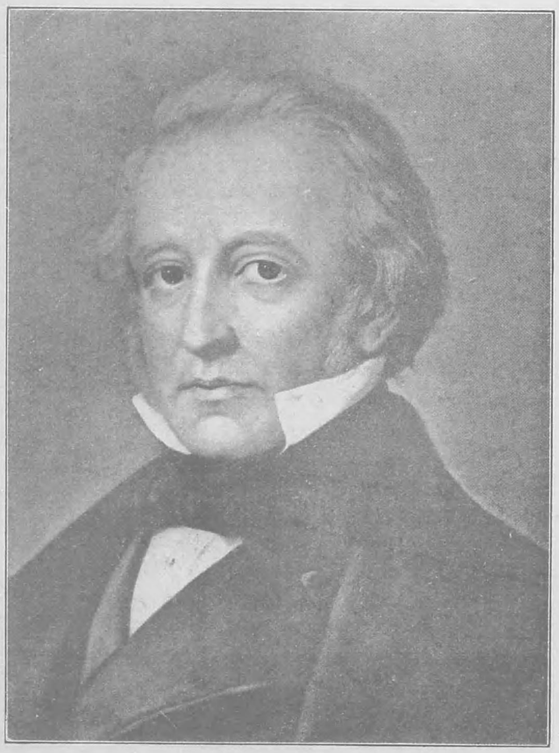
ホッヤー世界史



（英國）カーライル（史家、英雄崇拜論佛國革命史の著者）

Carlyle.

ホッヤー世界史



（英國）マコーレー（史家）

Macaulay.

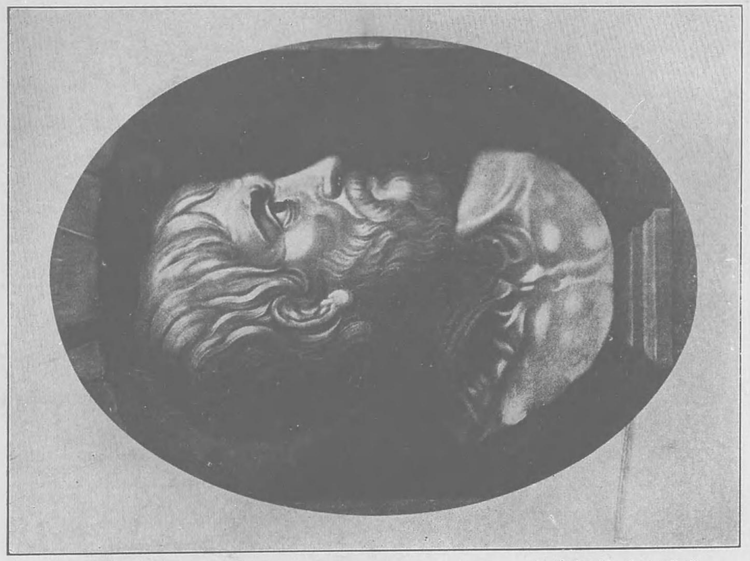
世界畫報轉寫

(大哲學者)　(希臘)　ソクラテス

世界百偉人肖像集

Sokrates.

(大哲學者)　(希臘)　ピタゴラス(ピサゴラス)



世界百偉人肖像集

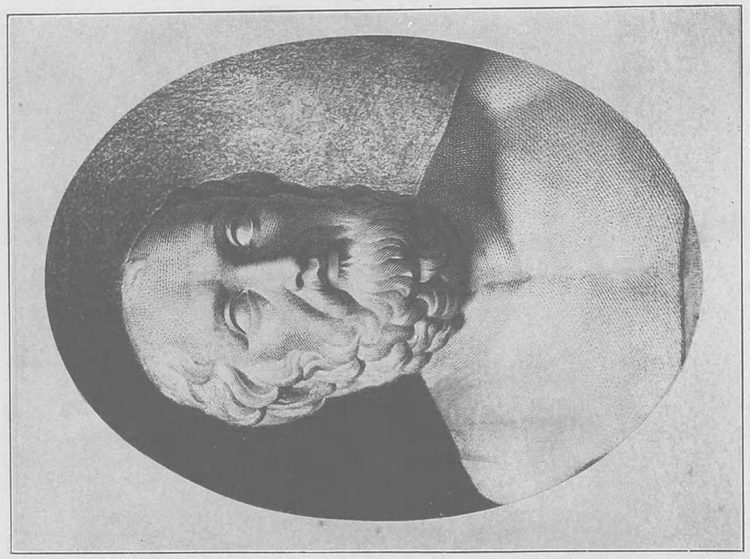
Pythagoras.

(大哲學者)　(希臘)　アリストテレス

世界百偉人肖像集

Aristoteles.

(大哲學者)　(希臘)　プラトン



世界百偉人肖像集

Platon.

●ソクラテス(希臘)

西暦紀元前四百四十九年—三百九年
日本紀元一九二年—二六二年

ソクラテスは希臘の大哲學者、大德行家として、後世の尊崇する所なり。士族の階級の家に生れたりしも家貧にして、父は彫刻に從ひ、母は產婆を業とせり。初め父の業を繼ぐ爲に彫刻を學び其製作は今猶存在すと云ふ。後アテネの富豪クリトーの保護を得て修學し、所謂詭辯派の者につきても智識を研けり。ホメロスの詩は特に其愛讀せし所なりと云ふ。當時希臘の思想界は大に亂れ、詭辯論者は此機に乘じて盛に詭辯を流布しつつありしかば、

●アリストテレス(希臘)

西暦紀元前三八四年—三二二年
日本紀元前二七七年—三三九年

大哲アリストテレスは希臘植民地スレース地方のスタギラに生る。家世々醫を業とし、父ニコマーコスはマケドニア宮廷の侍醫たりしを以て、彼又醫學及び科學に關する研究に心を傾けたり。然るに不幸にして早く兩親を失ひ、次で監督をうけたる父の友プロクセヌスも又死せしかば、十八歲にしてアテネに來りて、プラトンの門に入るや、師プラトンをして「アリストテレスは吾が學校の精神なり」と嘆稱せしむるに至れり。プラトンに師事すること殆ど二十年間、[illegible]

ピタゴラス（希臘）

ソクラテス（希臘）

●ソクラテス（希臘）

西暦紀元前四六九年—三九九年
日本紀元一九二年—二六二年

ソクラテスは希臘の大哲學者大德行家として、後世の尊崇する所なり。士族の階級の家に生れたりしも、家貧にして、父は彫刻に從ひ、母は產婆を業とせり。初め父の業を繼ぐ爲に彫刻を學び其製作は今猶存在すと云ふ。後アテネの富豪クリトーの保護を得て修學し、所謂詭辯派の者につきても智識を研けり。ホメロスの詩は特に其愛讀せし所なりと云ふ。當時希臘の思想界は大に亂れ、詭辯論者は此機に乘じて盛に詭辯を流布しつつありしかば、ソクラテスは慨然として起ち、巧妙なる辯證法によりてアテネの人民を訓誨啓發し、諄々として倦まざりき。然るに其宗教政治に關せる所說が、時流と懸隔する事甚しかりしかば、反對者の嫌忌に觸れ、彼は希臘の宗教を破壞し、青年を誤り、國家を賊するものなりと誣ひられ、遂に獄に投ぜられたり。彼は法廷に立ちて己が所信を述べ、大に判士を罵倒せしかば、其激怒を買ひ、死刑の宣告を受く。クリトー來りて其獄吏に賄ひ、逃獄を勸めしも、彼は縱令罪なきも國法には從はざる可らずと云ひて、門弟環視の裡に從容として毒を仰げり。此像は羅馬のカピトル殿堂に存せしものをボビ氏が摸寫せるものに係る。

●アリストテレス（希臘）

西暦紀元前三八四年—三二二年
日本紀元前二七七年—三三九年

大哲アリストテレスは希臘植民地スレース地方のスタギラに生る。家世々醫を業とし、父ニコマーコスはマケドニア宮廷の侍醫たりしを以て、彼又醫學及び科學に關する研究に心を傾けたり。然るに不幸にして早く兩親を失ひ、次で監督をうけたる父の友プロクセヌスも又死せしかば、十八歲にしてアテネに來りて、プラトンの門に入るや、師プラトンをして「アリストテレスは吾が學校の精神なり」と嘆稱せしむるに至れり。プラトンに師事すること殆ど二十年間學成りて名聲頗る高く、四十歲の時、マケドニア王フィリポに召されて、其太子アレクサンドルの師傅となりしが、アレクサンドル亦大に彼を保護して、學術の研究に一身を委ねしめたり。紀元前三三四年アテネの廓外リュカイオンの林園内に學徒を集めて哲學を講せしかば、彼の學派はリケウム派或はリュカイオン派と稱せられ、又彼が篤志の門弟を從へ、並木の間を逍遙しながら講義したりしを以て、逍遙派とも呼ばれたり。アレクサンドル大王の歿後、排マケドニア黨の爲に國教に背き、敬神の道を缺けりと訴へられ、將に死に處せられんとせしかば、アテネを逃れて、エーボア島のカルキスに至り、同三二二年胃病にかりて此地に歿せり。

●ピタゴラス（ピサゴラス）（希臘）

西暦紀元前六〇〇年？
日本神武天皇六〇年？

希臘最古の哲學者中最卓越せるものはピタゴラスなり。其傳記は素より詳ならずと雖、傳說によれば彼はサモスに住せし商人の子にして、始めクレオフイラスなるものにつきて教を受け、後フエレシデスなるものに學び、それより埃及、バビロン、印度等を歷遊して其學術を探り苦心研鑽の末獨特の哲學を構成し、伊太利のクロトナに學校を開きて當時の才俊盡く其門に集まれりといふ。彼は萬物の數によりて組織せらるゝこと、人は輪廻するものなることを說き、始めて地球が大空に浮べる天体の一なることを推定し、また數學上に於ける幾多の有益なる發見をなせり。彼は其子弟によりて殆ど神に對する如き尊敬を受けしと云ふ。以て其人格をも察知すべきなり。彼は實に世界學術の鼻祖ともいふべく、學藝に心を傾くる人の忘るべからざる偉人なり。

●プラトン（希臘）

西暦紀元前四二九年—三四九年
日本紀元二三三年—三一三年

プラトンは希臘アテネに生る。本名はアリストレースといひ、プラトンは其綽名なり。家はソロンの血統を引き、且つ富裕なりしかば、少時より完全なる教育を受け、体操、音樂、詩歌、修辭學、數學及び幾何學の如き、皆通せざる所なかりしが、二十歲にしてソクラテスの門に入り、大に哲學に興味を感じ、遂に一身を之に委ぬるに至れり。ソクラテスに從ふ事十年、師の刑に就きし後は、メガラのオイクライデスに師事したり。後マグナ、グレシアに遊び、更に埃及、シチリア等にも遊歷し、其間捕はれて奴隸となりエージナに賣られしが、幸にして放還せられ、四十歲前後にしてアテネに歸り、弟子の爲にアカデミーに於て哲學を講じ、アカデミー學派を開きソクラテスと同じく時人に誤解せられし事もありしも、其崇拜者よりは「神の如き人」と稱讃せられたり。彼の容貌は重々しく、額は廣くして皺多く、眞は聳へ、微笑はすれども大笑する事なく、當時「プラトンの如く苦し」といへる諺ありき。其著書は文章對話体なるを以て、プラトンの對話篇とも稱す。對話の主人公は概ねソクラテスなり。

ベーコン（英國）

エピクテツス（エピキユラス）（希臘）

●モンテーニウ（佛國）

日本天文 四十三年—元禄五年

至のを衛しは國のン佛國の諸地行刋改ボルド拉丁解教師せざるに家庭生まで方をで究しドー語のみに至を解れ家ボルド遊名頓の專門學以れ宅ボルレ漫擊得るに所教育に生ーの一に所門學以れ宅ボルド語のる

となれり。氏の說に曰く、從來の學問は主觀的にして不確實無効力なるを以て、決して眞理を發見するの道にあらず、確實なる智識を得んとせば事物其物を直接に研究し、舊慣を墨守することを棄てゝ、歸納的に眞理を發見すべし、人類の進步は發明にあり、人類の勢力は科學にあり、科學的智識を得るには認識の方法を明かにし經驗によりて智識の材料を得、特殊的命題より進んで普遍的命題に至るにあり。と後ホッブス。ロック。ヒューム等其說を祖述し、之より英國哲學界には經驗派の哲學者續々現はれ、一種の光彩を放てり。佛國の蔣原惺窩林道春の如き巨儒はベンコンと時代を同うせり。

世界百傑人肖像集

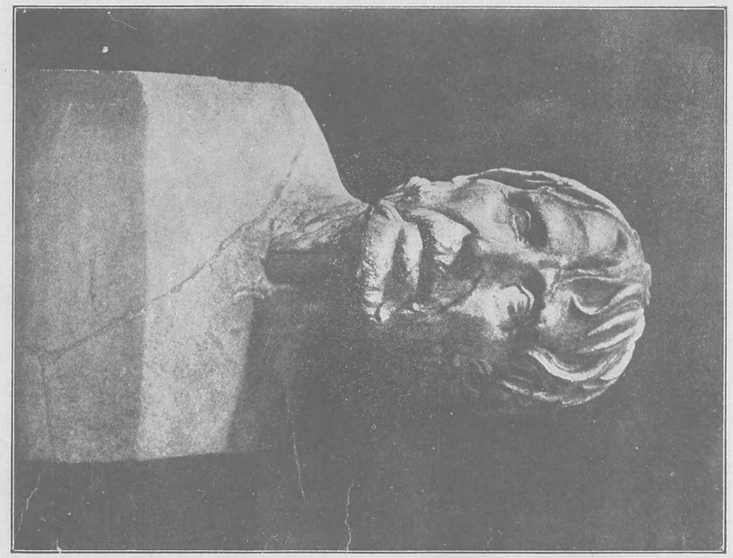
(佛國)哲學大家 モンテーニュ

Montaigne.

女子大學教授 高島平三郎氏所藏

(英國)哲學大家 ベーコン

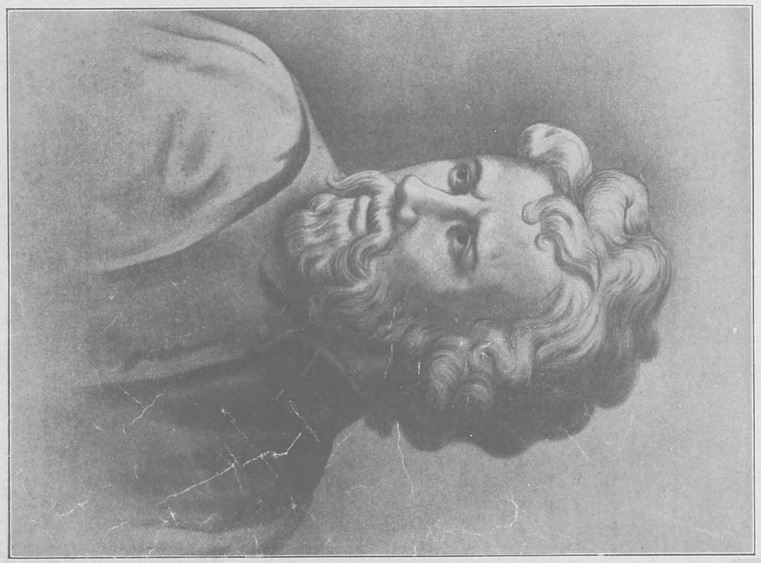
Bacon.



世界論報寫

(伊太利)大哲學者 セネカ

Seneca.

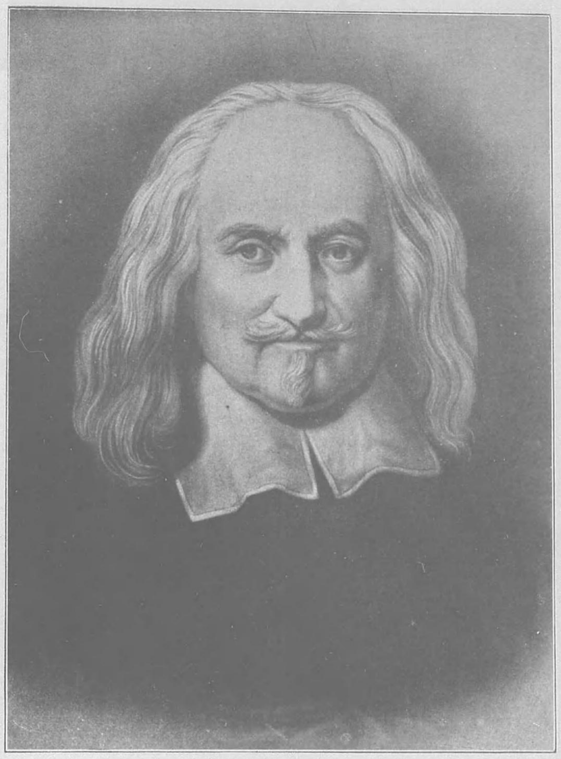


文學士 松本孝次郎氏所藏

(獨逸)大哲學者 エピクテッス(エピキテタス)

Epicteteus.

ムブサカス等に歷遊し後アテネに至りこゝに花園を求めて永住し學校を開きて新學說を講せり。彼の哲學はストア派の極端なる謹嚴主義と反し較デモクリタスの哲學を繼げるものにして生活の目的は快樂に在りとなし、而して[illegible]を得る手段を以て德操に歸したるが、其[illegible]く本旨を誤まられたりき彼は最謹嚴にして德ある生活を送れり。



(英國) ホッブス (功利論の唱導者)

文學士 松本孝次郎氏所藏

Hobbes.

(和蘭) スピノサ (近世哲學大家)

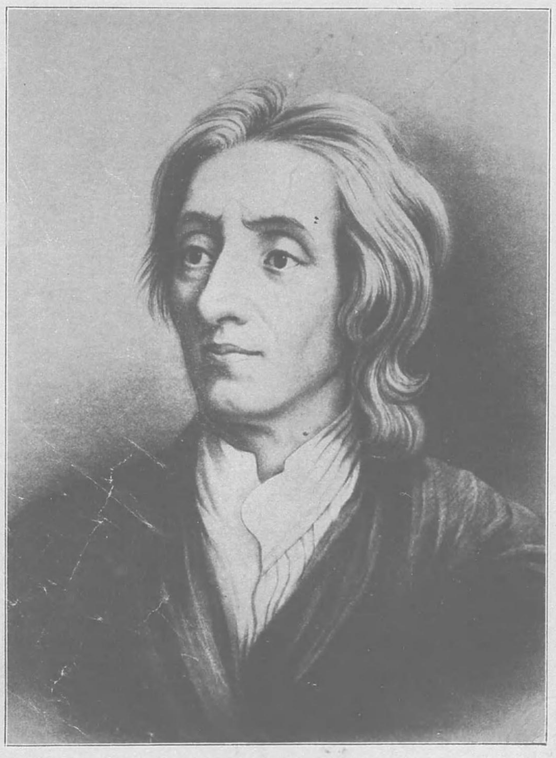
文學士 松本孝次郎氏所藏

Spinoza.

(佛國) デカルト (近世哲學の鼻祖)

文學士 松本孝次郎氏所藏

Descartes.



(英國) ロック (哲學大家)

女子大學教授 高島平三郎氏所藏

Locke.

年を脱し、四十六歳で、伊太利に、ルネサンスの瑞典に、七年佛蘭西に、ルネサンスの王女に、十年佛蘭西に、再びルネサンスの一大國に、十一年和蘭に、再びルネサンスの一大朝に、十六年英吉利に、再びルネサンスの一大王に、十八年佛蘭西に、再びルネサンスの一大國に、二十年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、二十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、二十八年佛蘭西に、再びルネサンスの一大國に、二十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、三十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、三十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、三十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、四十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、四十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、四十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、五十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、五十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、五十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、六十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、六十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、六十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、七十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、七十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、七十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、八十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、八十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、八十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、九十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、九十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、九十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、百年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、百六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、百九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、百十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、百十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、百十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、百二十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、百二十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、百二十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、百三十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、百三十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、百三十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、百四十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、百四十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、百四十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、百五十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、百五十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、百五十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、百六十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、百六十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、百六十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、百七十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、百七十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、百七十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、百八十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、百八十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、百八十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、百九十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、百九十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、百九十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、二百年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、二百六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、二百九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、二百十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、二百十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、二百十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、二百二十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、二百二十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、二百二十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、二百三十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、二百三十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、二百三十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、二百四十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、二百四十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、二百四十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、二百五十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、二百五十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、二百五十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、二百六十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、二百六十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、二百六十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、二百七十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、二百七十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、二百七十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、二百八十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、二百八十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、二百八十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、二百九十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、二百九十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、二百九十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、三百年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、三百六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、三百九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、三百十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、三百十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、三百十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、三百二十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、三百二十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、三百二十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、三百三十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、三百三十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、三百三十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、三百四十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、三百四十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、三百四十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、三百五十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、三百五十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、三百五十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、三百六十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、三百六十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、三百六十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、三百七十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、三百七十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、三百七十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、三百八十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、三百八十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、三百八十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、三百九十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、三百九十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、三百九十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、四百年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、四百六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、四百九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、四百十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、四百十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、四百十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、四百二十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、四百二十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、四百二十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、四百三十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、四百三十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、四百三十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、四百四十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、四百四十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、四百四十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、四百五十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、四百五十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、四百五十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、四百六十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、四百六十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、四百六十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、四百七十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、四百七十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、四百七十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、四百八十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、四百八十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、四百八十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、四百九十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、四百九十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、四百九十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、五百年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、五百六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、五百九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、五百十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、五百十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、五百十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、五百二十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、五百二十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、五百二十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、五百三十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、五百三十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、五百三十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、五百四十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、五百四十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、五百四十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、五百五十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、五百五十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、五百五十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、五百六十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、五百六十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、五百六十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、五百七十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、五百七十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、五百七十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、五百八十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、五百八十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、五百八十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、五百九十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、五百九十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、五百九十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、六百年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、六百六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、六百九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、六百十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、六百十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、六百十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、六百二十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、六百二十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、六百二十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、六百三十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、六百三十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、六百三十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、六百四十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、六百四十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、六百四十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、六百五十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、六百五十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、六百五十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、六百六十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、六百六十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、六百六十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、六百七十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、六百七十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、六百七十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、六百八十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、六百八十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、六百八十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、六百九十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、六百九十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、六百九十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、七百年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、七百六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、七百九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、七百十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、七百十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、七百十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、七百二十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、七百二十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、七百二十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、七百三十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、七百三十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、七百三十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、七百四十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、七百四十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、七百四十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、七百五十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、七百五十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、七百五十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、七百六十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、七百六十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、七百六十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、七百七十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、七百七十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、七百七十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、七百八十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、七百八十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、七百八十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、七百九十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、七百九十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、七百九十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、八百年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、八百六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、八百九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、八百十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、八百十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、八百十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、八百二十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、八百二十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、八百二十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、八百三十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、八百三十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、八百三十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、八百四十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、八百四十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、八百四十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、八百五十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、八百五十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、八百五十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、八百六十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、八百六十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、八百六十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、八百七十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、八百七十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、八百七十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、八百八十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、八百八十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、八百八十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、八百九十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、八百九十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、八百九十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、九百年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、九百六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、九百九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、九百十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、九百十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、九百十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、九百二十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、九百二十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、九百二十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、九百三十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、九百三十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、九百三十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、九百四十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、九百四十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、九百四十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、九百五十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、九百五十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、九百五十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、九百六十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、九百六十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、九百六十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、九百七十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、九百七十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、九百七十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、九百八十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、九百八十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、九百八十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、九百九十年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、九百九十六年和蘭に、再びルネサンスの一大國に、九百九十九年英吉利に、再びルネサンスの一大國に、

●デカルト 佛國 西曆一五九六年—一六五〇年 日本慶長元年—慶長三年

入ルネサンス學修歳のデカルトは習せし時ルトもに至まれば、佛國ルトの一之一六一に滿一足で當國ルトの朝等を心に六年すす時流行レーの聞事能セスの門閥家ス家に生一理學る問十

●ロック 英國 西曆一六三二年—一七〇四年 日本寛永元年—元禄十七年

オックは地に、ドは思國ォウ信を買ルの經驗政にひとの代表派ード大學上してッ此ト著哲學に頗ミる惑所ミン一心に左ン者學者家に當住マ彼ンり、彼ンり者ジ思索ス一維ルのし祖て九三的校に持セ父ッ父十八宗教に困國は彼トは八永七四教的びし難會呼のにニ世元四傾向せ軍は移リ紀年は後ずりの熱住ガに

タけロ長な僅少の英ックたる宗の時國は彼ふ教信を買ルし教の經ォ始財者政にひとの代驗ード大學上してッ此ト著哲學に頗ミる惑所ミン一心に左ン者學者家に當住マ彼ンり、彼ンり者ジ思索ス一維ルのし祖て九三的校に持セ父ッ父十八宗教に困國は彼トは八永七四教的びし難會呼のにニ世元四傾向せ軍は移リ紀年は後ずりの熱住ガに

文學士 松本孝次郎氏所藏

Spinoza.

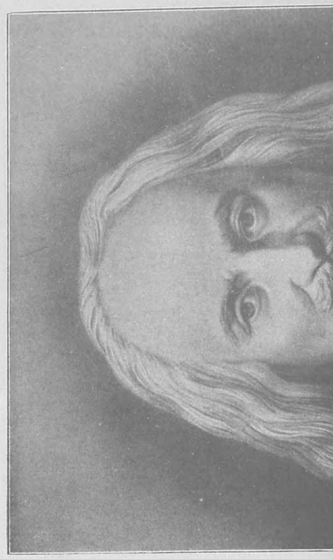
文學士 松本孝次郎氏所藏

Hobbes.

女子大學教授 高島平三郎氏所藏

Locke.

Descartes.



ホッブス（英國）

スピノザ（和蘭）

●デカトル（佛國）

西暦一五九六年―一六五〇年
日本慶長元年―應長三年

ルネ、デカルトは佛國トゥレースの門閥家に生る。十八歳の時に至まで、當時流行せるスコラ派の學問を修めしも、之に滿足する事能はず、好んで數理學を學習せり。一六一六年和蘭の軍隊に投じ、同一九年パイエルの軍隊に入りしが、同二一年軍隊生活を脱して再び專心理學の研究に身を委ねたり。後伊太利、佛蘭西等を遊歴し、同二九年居を和蘭に定め、四七年佛國朝廷より恩給金を與へられたり。次で瑞典女王クリスチナの招聘に應じて、一六四九年ストックホルムに移住せしが、此地の酷寒に苦しめられ、翌年遂に此の地に歿せり。其著書には「方法論」「純正哲學上の思索」及哲學原理」あり。彼の哲學は懷疑を以て其端を發せり、其說によれば、宇宙の存在、神の實在皆疑ふべく、其他一切皆信するに足らず、然も此一切の事物を疑ふ我なる者の存在は疑ふべからず。「我思ふ故に我存す」是れ即ち哲學の出發點にして、思惟即ち實在、我が本位は思惟に外ならず。吾人は理性的實在なり。彼は進んで吾人の寫影中最も分明明晰なる者は神の存在なり、而して此の如き觀念は決して無より生ずる者にあらず、故に一層多くの實在性を有せざる可からずと、論じ神の存在を以て最も確實なる者となせり。

●ホッブス（英國）

西暦一五八八年―一六七九年
日本天正一六年―延寶七年

トーマスホッブスはオクスフォード大學に學び夙に中世思想の弊害を看破せり。後パリーに遊びてデカルトと識り、數學を研究して、ゲブレル、ガリレー等の思想に私淑し、以てベーコンの思想の缺陷を補へり。英國革命運動の起るや、深く國事を憂へ爲めに「君主專政々治學」を著せり。其「ヴァヤサン」は最世に顯はれたる書の一なり。氏の世界觀は極端なる器械主義にして、其說によれば、「外界の事物の吾人の精神に及ぼす運動は、之を感覺と稱すれども、實際的に之を言へば、快樂苦痛の感情に外ならず。人類の各種の情は、要するに快苦の情より發展するものなり。吾人の慾望の對象は善にして、嫌惡の對象は惡なり。善惡は只相對的に存するのみにして、客觀的普遍的の規則あるに非ず。善惡の一定の標準は國家成立後初めて發するものにして、即ち正は法律の許す所、不正は法律の禁ずる所、善とは一般の利益となる所のものなり。人國家を組織して自ら束縛するは畢竟自家保存の爲のみ、國家は君主をして人民の意志を代表して生命財産を保全せしめ、君主は人民を保護するを以て、國民は決して其命に違背すべからず」と

●ロック（英國）

西暦一六三二年―一七〇四年
日本寛永九年―寶永元年

ロックは英國經驗派哲學者にして、十八世紀に於ける英國思想の代表者なり。彼の祖父はエリザベタの時に、ドルセットより、ソマルセットに移住し、僅少の地を買ひて此所に定住せり。彼の母は熱心なる宗教信者にして、慈心に富み、父は國會軍の隊長たりしが、財政上頗る一家の維持に困難せりと云ふ。彼は始めウェストミンスター校に學びしが、後オックスフォード大學に轉じ、思索的宗教的傾向は變じて、大に自然科學に興味を有するに至り、醫學の研究を始めて實地に治療を試み、傍ら哲學を研究せり。一六六四年英國公使の秘書官として、伯林に赴き、翌年英國に歸り、氣象學の研究に從事せしが、一六六七年シャフツベレー卿に知られ、數年間同居して其家廷教師となりて子女教育を管理し、傍ら當時政界に雄飛しつつありし諸名士と交際して、識見を廣め、一六七二年にはシャフツベレー卿の下に、商務局の秘書官となり、累進して高官に進み、佛國に遊びて、有名なる「人間悟性論」の著作に著手せり。後彼は或事件に關して嫌疑を蒙り、一時和蘭に逃れしが、一六八八年の政變によりて歸國し、哲學的新生涯を送るに至れり。

●スピノサ（和蘭）

西暦一六三二年―一六七七年
日本寛永九年―寛文七年

和蘭に生れ、其父母は猶太人なり。幼きより多病なりしが、好みて希伯來語及希臘語を學び、またデカルトの著を愛讀し、哲學的天才を有して屢奇說を吐きしかば、猶太人團体の爲に異端者として擯斥せられ、長ずるに及び猶太人の迫害益甚しく、遂に彼を暗殺せんとするものをさへ生じたりしかば、遂に故郷に留る能はず、各地に放浪せしが、後日ライデンに移り、眼鏡師となりて寂しき生活を送りつゝ、一哲學系統を組織せり。一六六八年彼はライデンを去りてヘーグに移り、茲に其終生を送りぬ。一六七三年ハイデルベルヒ大學は禮を厚うして彼を招き、教會を攻擊するの外は凡て自由なる講義を許すべき旨を以て、彼を教授たらしめんとせしも、彼は丁寧に之を辭して受けず、かくて貧苦と迫害とは常に其の生涯に伴へりき。スピノサは實に近世哲學者中の最偉大なるものにして、殊に其神の說は理智を基として理智を超越し莊嚴至妙の境に至り、衆人の感歎措かざる所なりとす。スピノサの學說は本邦に於ても之が信奉者甚多し。

ルソー（ルーソー）（瑞西）

西暦一七一二年—一七七八年
日本正德二年—安永七年

ゼネバに生れ其父は時計師なり。幼にして母に別る。好んでプルタルコス偉人傳及タシタスの著を讀めり。一七七二年其父の手を離れ叔父に養はる、次で彫刻師の徒弟となりしが一七二八年逃れてサヴォイに行きマダム、ド、ヴレンなる貴女に救はれ、其意を奉じて一僧院に入りしも復長く止まる能はず。逃れて歸れり。次でションバーリーに音樂教師となり、一七四〇年リヨンに行き、同四九年巴里に移る。翌年デジョンアカデミーの募集論文に當選して賞金を得たり。此成効に發奮して「人種異同の原理」なる著述を公にし大に名聲を博しぬ。後復一論文を出版して演劇反對の意見を發表し次に音樂辭典を出せり。一七六〇年小說「新へロイゼ」を出し、次で有名なる教育上の大著エミールを公にせり。エミールに於て彼は教育の方法は兒童の自然に從ふべきことを說き、基督教に於ける豫言及奇蹟を否定し、福音を讃美せり。これが爲佛國政府はエミールの發賣を禁じ、其身亦危かりしかば暫く瑞西に逃れぬ。後再び巴里に歸り、一七六六年哲學者にエームに招かれて倫敦に行けり。上記諸書の外ルソーの著す所甚多し。就中民權論は最著名なりとす。ルソーは終生厭世的氣風を帶び、人と親しむ能はざりき。

ライブニッ（獨逸）

西暦一六四六年—一七一六年
日本正保三年—享保一年

ライブニッは獨逸國ライプチヒ府の人なり。年甫て十六同府大學に法律を學び傍哲學及び數學を研究し一六六六年法學博士となり、アルトルフ大學教授に任せられしが受けず、マインツ侯の囑に應じ法律改正に從事せり。後巴里に趣き、ルイス十四世に埃及遠征を勸めて、獨逸の征服を中止せしめんとせしが用ひられず。更に轉じてハノバルの圖書館長となり、同地に永眠せり。著書の重なるものは「人間理性論」「神惡論」「單子論」等最も著はる。彼の單子論はデカルトの實体論とデモクリトスの原子論に胚胎し、之を折衷せる者也。彼曰く、此等無數の單子が一致して活動するは豫定調和によると、豫定調和論は、デカルト以來の大問題たりし心身の關係を巧に說明せる者にてデカルト以來の合理說は、彼に至りて其發展の頂點に達せり。彼は頗る多方面の學者にして、法律、政治、外交、數學、物理、言語、學神學等に通じ、貢献せる所頗る多し。特に數學上に於ては、ニュートンと同時に微分法を發見し、斯學上に一新紀元を開けり。其の哲學上の涉獵の多方面なる、古今比なく、加ふるに鋭利なる批評眼と、强大なる同化力を有し、此等の諸材料を融合調和し、宗教と科學と、新教と舊教との調和を圖れり。

チドロー（佛國）

西暦一七一三年—一七八四年
日本正德三年—天文四年

チドローは佛國の哲學者にして、又飜譯、目錄編纂、及び索引を作る事に從事し、又讃美歌をも編纂せしと云ふ。一七四六年一書を公にせしが、國會の命令によりて之を燒棄せられ、後數年又著書の爲めに投獄せられしが、免されて後は、醫學辭典を出版し、後百科辭典出版の計畫を立てチャムバーの百科辭典によらんとせり。一七五一年計畫を變じて「科學、文藝及手工辭典」の名稱の下に一種の百科辭典を編み、一七六五年十七冊を以て完結し、之を世に公にせり。初ダランベールも其の共同者の一人なりしが、後辭せしかば、チドローは自ら之が編纂に從事し、數多の助手と共に刻苦辛酸を嘗めて、始めて上梓せしと云ふ。彼の全集は一七九八年ネーゼオン之を十五冊として公にし、後一八七五年アセラ復之を廿冊として公にせり。チドローは晩年頗る落魄の境に沈淪せしが、露國女帝カタリナの好意によりて、其圖書を高價に買はれ、且つ其の管理者として傭はれ、一生を安樂に送るを得しかば、親しく露國に赴きて、女帝に謁し、其好意を謝せしと云ふ。我が大日本史、群書類集此の時に成り、支那に於ては約此の時代に康熙字典を完成せり。

ヒューム（英國）

西暦一七一一年—一七七六年
日本正德元年—安永五年

ダビット、ヒュームは蘇格蘭土エヂンバラに生る。始め同市の圖書館員たりしを以て、史料を通覽するの便を得、歷史に精通し、有名なる英國史の著作あり。彼は二度佛國に遊びて懷疑哲學者と交り、其影響を受け、哲學上の著作たる「人性論」「道德の原理」「論著」等皆名あり。彼は感覺を印象と云ひ、其感覺せるものを記憶又は想像によりて保存せるものを觀念と云ひ、吾人の智識は內外二種の經驗より得るの外道なきを以て、觀念も亦印象より發生せざるを得ず。而して此の如くにして得られたる觀念は、一定の規則に從ひて、機械的に連合す。即ち觀念連合作用にして、其作用には類似及び背反の連合、時間空間によりての連合、及び因果關係によりての連合の三種あり。而して第一種は數學に應用せられ、第二種は物理學幷に倫理學の經驗的部分に應用せられ、第三種は宗教上其他形而上學に應用せらるべし云々と、彼は史學に於てはギッボン、ロベルトソンと共に英國三大家として認識せられ、世界史に一異彩を放てり。我が白石及眞淵と畧同時代の人なり。

瑞西　ルソー

獨逸　ライブニッ

と云ふ。我が約大の日本史、代に康熙字典を完成せり。

親切者と露國に赴きて、女帝に謁し、其好意を謝せしかば、那

理意に露國に赴きて、女帝に謁し、其好意を謝せしかば、那

頗る高價を安樂に買ひ、其所に送るを得たり。

ゼ

ラ

ル

ソ

ー

（佛國）ヂドロー

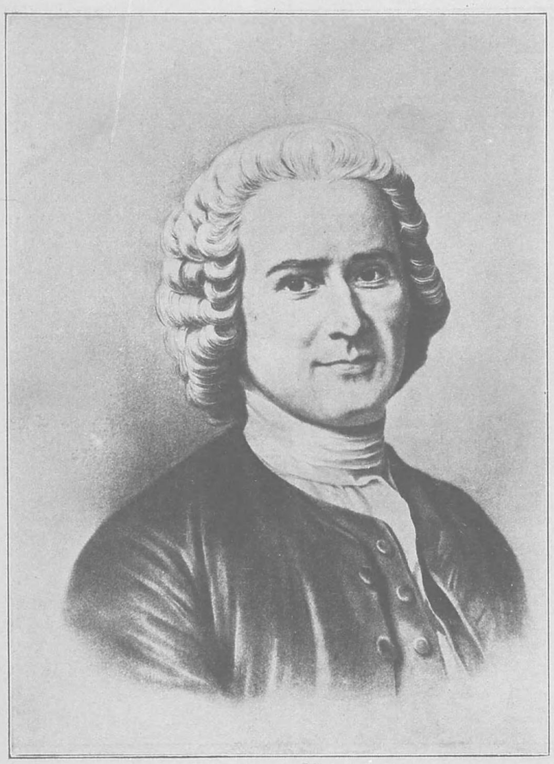
（百科全書編纂者）

世界百偉人肖像集

Rousseau.

Diderot.

（哲學大家、民約論の著者）



寫眞　松本孝次郎氏所藏

獨逸（ライブニッ

（哲學大家、數學者）

文學士　松本孝次郎氏所藏

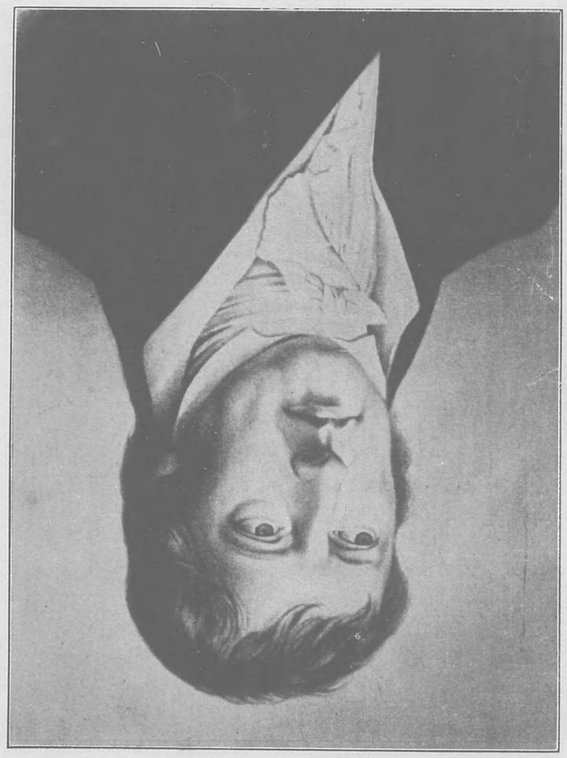
Leibnitz.

（英國）ヒューム

（哲學大家）

女子大學教授　高島平三郎氏所藏

Hume.



(獨逸) ヘーゲル (獨逸)

哲學大家肖像畫

(獨逸) カント (獨逸)

(獨逸) ヘルバルト (獨逸)

日本天保四年 日西曆一七六六年 ― 一八四一年

(獨逸) フイヒテ (獨逸)

日本寶曆二年 日西曆一七六二年 ― 一八一四年

(獨逸) ヘルバルト

(獨逸) フイヒテ

(獨逸) カント

(獨逸) ヘーゲル

(獨逸) フイヒテ

(獨逸) ヘルバルト

カント（獨逸）

ヘーゲル（獨逸）

●フィヒテ（獨逸）

西暦一七六二年—一八一四年
日本寶暦一二年—文化一一年

フィヒテは獨逸ラウジッツ州の貧家に生れしが、上部ルサチヤのラムメノーに生る。幼にして既に神童の名あり。十八歳にして神學研究の爲めイェナ大學に入りて哲學に趣味を感じ熱心にスピノザを研究せり。然るに學資十分ならざりしかば所々の家庭教師となり後瑞西に赴きて家庭教師を務め、一七九〇年歸國しライプチヒに私塾を開けり。此時カントの知遇を受け其の勸によりて著述を公にせしかば名聲頓に擧り、遂にイェナ大學の哲學教授に擧げられたり。一七九三年氏は其友ニートハムメルが編輯せる哲學雜誌に宗教の意見を公にせしが、無神論者なりとの批難を受け、遂に辭職せざる可らざるに至り、伯林に來りて私塾を開けり。一八〇六年佛帝ナポレオン一世來りてプロシヤを蹂躙するや、フィヒテは教育に依りて國民性を鍛へ、此屈辱を雪がざるべからずと絶叫し、プロシヤ王フレデリキ、ヴィルレム三世亦此意見を抱き一八〇九年伯林大學を起すや、フィヒテは大に力を盡し教授より總長に進む。一八一三年プロシヤ國民が佛帝の壓迫に對して自由軍を起すや氏之に投じ、不幸陣中の傳染病に襲はれ翌年一月廿八日遂に恨を呑んで歿せり。

●ヘルバルト（獨逸）

西暦一七七六年—一八四一年
日本安永五年—天保十一年

近代教育學者の泰斗ヨハン、フリードリッヒ、ヘルバルトは獨逸國オルデンブルグの人なり。幼よりして學術儕輩を拔き、長じて當時の哲學者に交り、熱心研究する所あり、特にカント及びフィヒテの哲學に得る所多し。後擧げられてケーニッヒスベルヒ大學の哲學教授に擧げられ、心理學に關する大を公にせり。大學に於ける業務に從ふの傍らまた著獨逸に於ける教育機關制度の改良に盡す所最多し。獨逸今日の教育の盛はヘルバトに負ふところ少からずといふ。其教育學は心理學に於ける造詣を基礎として立論し、最教授の妙を盡せるものにして、ヘルバルト派教育學なる一派を形るに至れり。彼の實踐哲學に於ける着眼點は、五個の實踐的觀念にあり。實踐的觀念とは即ち良心の根本的判斷なり。其の五個の實踐的觀念とは即ち內面的自由、圓滿、好意、公正、賠償の五觀念之れなり。此等の五觀念は實際の生活には分離するを得ず此の實踐的觀念を人格に於て統一する者を德の概念とせり。

●カント（獨逸）

西暦一七二四年—一八〇四年
日本享保九年—文化元年

獨逸國ケーニッヒスベルヒに生る。其父は蘇格蘭人にして、馬具を造るを以て業とせり。學齡に達するやケーニッヒスベルヒのギムナヂウムに學び、次で其他の大學に入る。業を卒るの後牧師たること少時にして、一貴族の家庭教師となり後再びキヨニッヒスベルヒ大學に入り、傍ら私塾を開きて生計を支へ、一七七八年業を卒ふ。それより公開講演を行ひて多數の學徒を得爾來益其研究の步武を進めて、遂に近世哲學者の始祖たるに至れり。其著書甚多し、特に其純理哲學」は近世哲學に一大變遷を與へたる最貴重なる大著述なりとす。其他自然科學及物理學上の良著述亦少からず、中に就きて著名なるものは「風の原理」「地文學概要」「運動と休止に關する新論」「地球規道の變化」等なりとす。是より先哲學界に經驗論と合理論の爭論百年の久しきに亘りて、遂に解決を見る事能はざりき。此の二論の爭論の根本問題は、要するに認識の起原及び範圍、演繹法と歸納法との應用にあり。カントは此等の兩說を結合して認識論に於ては先天概念と驗驗とを取り、演繹法と歸納法の爭論に就ても兩者の欠點を指摘して以て彼の純理批判哲學を建立せり。

●ヘーゲル（獨逸）

西暦一七七〇年—一八三一年
日本明和七年—天保二年

獨逸國スツットガルトに生る。初めチユービンゲンに於てシエルリングと共に學び、後イェナ大學に入りてフィヒテの教を受けたり。かくて研鑽すること幾年始めはフィヒテの哲學を奉ぜしが、後轉じてシエルリングの說を取り、更にシエルリングの說を捨てゝ、自家獨特の哲學を構成せり。一八〇六年イェナ大學教授に擧げられ其哲學を講演す。一八〇八年より十六年に至るまでニウルンベルヒ專門學校に長たり。爾來フィヒテ、シエルリングと共に學界の權威として畏敬せられしが、巴里に於て虎列刺病に罹り、遂に起たず。其著十九卷、凡て近代哲學中に異彩を放つものなり。彼の哲學的研究法を見るに、彼は進化論的見地に立てることを發見すべし。彼思らく宇宙の絕對は實在にあらずして進化發展にあり。宇宙の事物は皆絕對の自家發展の契點に過ぎず、故に各概念は自己中に其の反對の性質を包有す、かくて措定、反對措定及び綜合措定に及び、此の過程絕へず行はれ以て宇宙は發展すと。

●スペンサー（英國）

西暦一八二〇年—一九〇三年
日本文政三年—明治三六年

英國最近哲學の大家スペンサーは始め機關師として倫敦及びバーミンガムに奉職せしが一八四六年以來新生涯に移り同四八年に及べり。彼が哲學的研究を始むるに當り劈頭第一に着手せし問題は政治並に社會學的事項なりき。一八五〇年社會靜學を公にし同五五年心理學原理を著し同六二年綜合哲學の第一編たる第一原理を出し爾後六四年より九六年に至る廿年間に社會學原理三卷を七九年より九三年に至る間に倫理學原理六卷を出せり。此の如く哲學的研究を始めし以來三十六年箇の間に其の綜合哲學の全体統系を完成せり。彼は英國經驗學派の思想を繼承しダーウィンの唱導せし生物進化論を應用して宇宙の諸現象を說明せり。彼は大學の課程を履まず又大學の講壇に立たず在野の鴻儒として一生を研究と著作とに献げ終生娶らず清廉潔白の一生を終れり。其の簀を易ふるや例によりてウェストミニスターに葬らんとせしが大僧正は其宗敎上に一大打擊を加へしを以て其の寺院内に葬むる事を拒みたりき。

●コント（佛國）

西暦一七九八年—一八五七年
日本文政二年—安政四年

佛蘭西の哲學者にして實驗哲學及人道派の始祖なり。一七九八年一月佛蘭西のモンペリエーに生る。始め巴里エコール、ポリテクニクに學びて研鑽すること二年、一八一四年卒業せり。一八一八年頃、著作者兼外交家として著名なりしサン、シモンと交を結び、其感化を受くること淺からず、其學說をとりて一書を著し、一八二二年には、更に之を敷衍せんことを努めたりき。然るに、かく親密なりし兩者の友情は、後遂に反離に終りたりといふ。一八三二年より五一年まで、エコールポリテクニクにて敎授となり、其蘊蓄せるところを以て學生を敎導したり。其著書頗多く、就中、實驗哲學を祖述し及び人道派を皷吹せるものは、每に哲學者の良友として愛讀せられつゝあり。一八五七年十一月五日、巴里に於て死去す。

●ミル（英國）

西暦一八〇六年—一八七三年
日本文化三年—明治六年

英國哲學者ミルは、ゼームス、ミルの長子にして、倫敦に生る歲十四にして既に希臘の國語に通曉し、其の文藝を味ひ兼ねて數學論理學經濟學等の造詣甚だ深く、其の非凡なる精神腦力は、幼より老に至るまで駸々として絕えず發展せり。一八二〇年佛國に遊び、經濟學者セー氏と相識り、其の學說を聞きて大に得る所あり。一八二三年父の下に東印度會社に入り、遂に部長の位置に進みしが、一八五八年退職して、これより專ら著作に從事し、一八六五年下院議員に擧げられしも、依然として研究を怠らず、ベーコンの歸納法を改善整齊し、以て之れを完成せしめ、又ベンザムの功利說を祖述して、更に之を詳說精論し、思想界に一大光明を與へたり。彼は、エデンボロー時論、倫敦時論及び、ウェストミニスタル時論等に論文を掲げて自說を公にせり、其經濟的著作經濟原論に於ては、リカード氏の所說に同意せりと公言せしも、要旨に於ては往々意見を異にせる所あり。特に社會主義に關する點に於て然りとす。彼はハミルトン氏の哲學を批評するに當りて、大に經驗的哲學の根據を明確に說けり。功利說に至りてはベンザムを祖述して、夫れより一層深遠に、且其誤謬を指摘したり、

●フイヂアス（希臘）

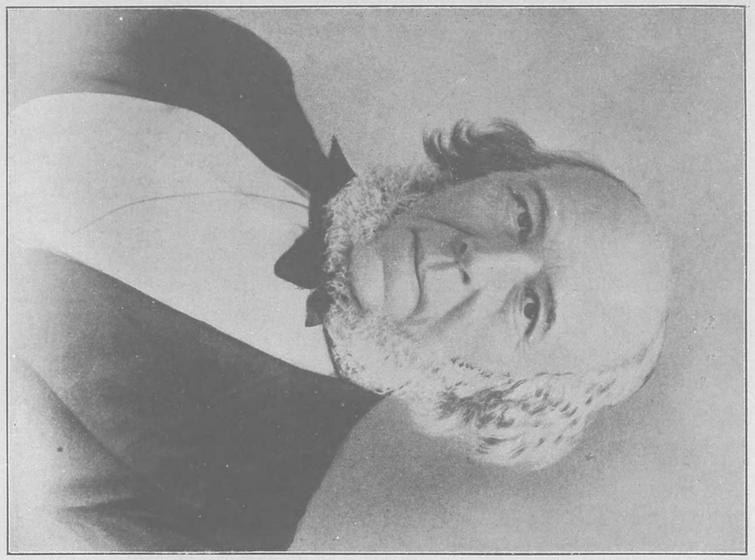
西暦紀元前四三二年？
日本孝昭帝四四年？

アテネの彫刻家なり。其生死の年月詳ならず。古代美術家中の卓絕せるものにして、彫刻術の祖として崇敬せらる其傳記に就ても學者間定說の存するものなしと雖、傳說によれば、アテネに於て美しきミネルヴ神の立像を作りしも、製作に要する黃金を私したりとの嫌疑を蒙り、追放せられてアテネを去りエリスに赴き、アテネ人に對する復讐として、其畢世の心血を注ぎオリムプスのチェウス神像を作りてエリスに建てぬ。其精巧にして殆んど人工を超脫せることミネルヴ像を以て比較すべからず、當時世界の一不思議として驚かれしといふ。

（佛國）コント

（英國）スペンサー

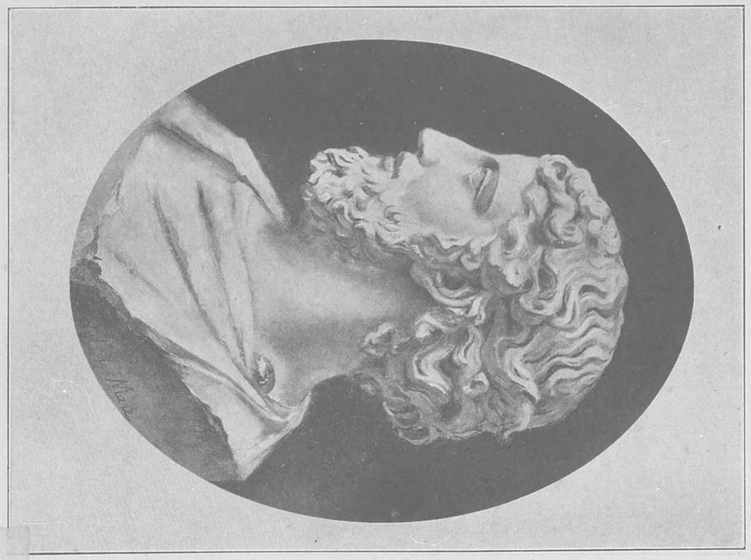
きミネルヴァ神の立像を作りしも製作に要する黄金を私したりとの嫌疑を蒙り、追放せられてアテネを去りエリスに赴きアテネ人に對する復讐として、其畢世の心血を注ぎオリムプスのチェウス神像を作りてエリスに建てぬ。其精巧にして殆んど人工を超脱せることミネルヴァ像を以て比較すべからず、當時世界の一不思議として驚かれしという。



女子大學教授 高島平三郎氏所藏

(英國) 哲學家、進化論學者 スペンサー

Spencer.



世界百傑人肖像集

(希臘) 世界三大彫刻家の一 フィディアス

Phidias.

文學士 松本孝次郎氏所藏

(佛國) 實驗哲學の始祖 コント

Comte.

文學士 松本孝次郎氏所藏

(英國) 哲學家、政家 ミル

Mill.

（羅馬）　ミケランジェロ　（伊太利）

世界百傑人肖像集

（羅馬）　ラファエロ　（伊太利）

羅馬百傑人肖像集

●ボッチェリー（伊太利）

日本文政四年―永正二年　西暦一四四七年―一五一〇年

七百年時代の逸品として、嘆々世に稱せらるる、一四八七年に畫きし春の比喩は、現今フィレンツェのアカデミーに秘藏せられ、ビナスの誕生は、ウフィージに著名なる、ノビ皇帝の一支安に學び、アンドレアに化を受けて得るところあり、剛勇の作品は、ミケランジェロ及ルスタグ、ネポラジュオロ等と共に、ミラノ、ボローニヤ、ピサ、ローマ、ナポリ、ヴェニスに生る。一四四七年、我花園天才彫刻を學び門に出藍の譽あり、フィエゾレに書を好むこと數月、天才院護のレンツオの寺院にて、ドナテロの書に學ぶ。其保護のレンツオの下に入りて、ローマ、ヴェニスの學び、ナポリの識所となり、ローメに生る。幼にして伊太利タスカニ生、十四歳の時

プラクシテレス（希臘）

レオナルド、ダ、ビンチ（伊太利）

●ボッチチェリー（伊太利）

西暦一四四七年—一五一五年
日本文政四年—永正一二年

著名なる伊太利の畫家なり、一四四七年（我花園天皇文安四年）フィレンツェに生る。夙にフイリッポ、リッピーに學び、アントニオ、ポラジュオロ及カスタグノの感化を受けて得るところあり。「剛勇」の作品は、其青年時代の逸品にして、嘖々世に稱せらる。一四七八年に畫きし「春の比喩」は、現今フィレンツェのアカデミーに秘藏せられ、「ビナスの誕生」は、ウフィージに保存せらる。彼が、ルシアノの記錄によりて、希臘の畫家アペレスの「誹謗」を復寫せしものは、繪畫界に於て最も注意すべきものなり。彼が、ダンテの神曲に就いて描きし說明畫は、非常の大作にして、其八十四枚は、ベルリン博物館にあり、八枚はバチカノに保存せらる、一四八二年、法王シスト第四世の勸誘を受けてシスタイン禮拜堂の裝飾に從事したり。彼は革命者にして雄辯家たりしサボナロラの一味なりしといふ。一五一五年五月フィレンチェに死す、或は曰ふ、一五一〇年なりと。

●ミケランジェロ（伊太利）

西暦一四七四年—一五六四年
日本文明六年—永祿七年

ミケランジェロ、ボナアロッチは伊太利タスカニーのキャプリースに生る。幼にして畫を好むこと食よりも甚しく、十四歲の時ドミニコ、ギルランタジオの門に學び出藍の譽あり、フイレンツエ王ローレンゾオの識る所となり、其保護の下に繪畫及び彫刻を學び、カーメライツの寺院に入りてマッサツキオの畫に學ぶこと數月、天才の譽既に高し、ロオレンゾオ死して國內漸く不穩の形勢あるや、亂を避けてボログナに行き、次で其父の家に在りしが後僧正セント、ジョルジオの招聘を受けて羅馬に行き有名なるピエタの像を造れり。後ピーツロ、ソデリニーがフィレンツェの要路に立つに及び歸りて「ダビッド」の像を造り、次でフィレンツェ人とピサン人の戰を壁畫にものして空前の盛名を博せり。此他作る所の繪畫及彫刻數を知らず、其今に殘存せるものは、千古の大美術品として世人の賞嘆措かざる所なり。

●プラクシテレス（希臘）

西暦紀元前三六〇年—全二八〇年
日本孝安帝三三年—孝靈帝一一年

彫刻術の最も發達せる希臘にありて、フイヂアスに次ぐものは唯プラクシテレス一人のみと稱せられしを以て、其の偉才なりしを知るに足るべし。プラクシテレスの傳記もまた明に知るべからず。たゞ傳ふる所を以てすれば彼は最も愛情に富み、美ばしき品性を有したる人にして多くの人に敬せられ、其製作としては大理石、銅其他の材を以てせるバッカス、セートルス、アフロダイト、アポロ等の像あり、またハーキュレスの神殿に獻ずる爲め計畫せられたるハーキュレス像製作の一部を擔當せり。其戀人フォリーンは低き階級の者なりしもよく眞摯なる戀愛を保持し、アフロダイト像のモデルは彼女なりきといふ。プラクシテレスの遺子二人共に父の天才を受けて彫刻に秀で、名聲を殘せり。

●レオナルド、ダ、ビンチ（伊太利）

西暦一四五二年—一五一九年
日本享德元年—永正一六年

伊太利の大畫伯にして彫刻家、建築家を兼ねたるレオナルド、ダ、ビンチはフィレンツェの附近なる一小村に生る。幼にして畫才あり、長じてフィレンツェの畫伯ベロチオに就きて畫を學び、出藍の譽あり、忽ちにして當時幾多の畫家を凌ぎて第一流の畫家となれり。ミラノに赴きて畫を敎へ、一代の才俊其門に集れり。ミラノに於て名高き水道を造る。後フィレンツェに赴き、ミケランジェロと共に名高き法皇宮殿の壁畫を作ることを命せられ、騎兵戰を畫題として其技倆を揮へり。次で佛王フランシス一世の招きにより佛國に赴きしが遂に玆に客死せり。或はいふ、佛王と隙を生じて遂に殺されたるなりと。彼の畫數多きが中に「聖餐」の畫最名高し、外に畫法に關する著書あり。

●コレジオ（伊太利）

西暦一四九四年—一五三四年
日本明應三年—天文三年

コレジオは一四九四年北部伊太利コレジオ市の一農家に生る。文藝復興期に於ける北部伊太利畫派（パルマ派）の一明星にして學殖、色彩、光線及び形態を美化するの枝に於て、最も卓絶せる技倆を有し、又光學、透視畫法、及び天文學等に精通し、繪畫に於ける色彩及び技能は特にドッソー、ドシーの大なる感化に負ふところ多し。彼はパドア派とベネチア派との連鎖を爲すものにして、當時ラファエロ、レオナルド、ダ、ビンチ等と共に其聲名嘖々として旭日冲天の概ありき。コレジオの作「微笑」はフイレンツエ派の如く、神秘朦朧の痕なく、簡朴にして一種の快感を與ふるものあり。其傑作と稱せらるるセント、ブラウンス寺の聖母は、今ドレスデン市にあり。其他、パルマの一寺院の壁畫を描きて名手と謳はれ、又同市のサン、ヂオバー寺の壁畫耶蘇昇天」は稀世の傑作たる名譽を得たり。彼の手になりし壁畫の價値は構想の大膽と工夫の豊富とが能く調和を得たるにあり。寫影畫家として古今獨歩と稱せられ、就中黄金色の光線を描く事に於て最も卓絶したり。油繪に於ては、巧に光線と陰影とを描寫し、最も能く其調和を得しめ、繪畫界に一派を立てしが、其門弟子中彼を繼ぐの天才なく流派漸次に衰微せしは惜む可きなり。

●チチアノ（チ、アン）（伊太利）

西暦一四七七年—一五七六年
日本文明九年—天正四年

伊太利國ヴエネチアに生る。幼きより繪畫を好みしが、長じてギオバンニ、ベリニの門に遊び其畫風を學ぶ、後去りてギオワンニと親しむに及び、又その畫風の採るべきを知り之を學べり。爾來溫蓄すること最深くして、名聲日に擧り、遂に第一流畫家の列に入りぬ。西班牙王カロロチャールス五世之を招いて其保護の下に技能を發揮せしめ、勳爵士に叙し、年金を授けたり。カロロが如何にチ、アノの畫才を敬重せしかに就きては一場の物語あり。一日チ、アノ熱心製作に從事し居りしに誤りて其畫筆を落しぬ。カロロ之を見て直に走り至り畫筆を拾ひてチ、アノに與へぬ。チ、アノ恐懼言ふところを知らざりしにカロロ笑を含んで「チ、アノの製作はカイザルと雖之を助けざるべからず」といへりとぞ。以て彼の畫才が如何に當時に重きをなしたるかをも知るべきなり。チ、アノは歴史畫、風景畫、肖像畫等に通ず。其作品は主としてベネチア及びマドリードに殘れり。中に就きて最も有名なるは「終りの聖餐」と題する宗教畫にして、荆棘の冠を戴ける基督を描く。其痛切深刻なる描寫人の心を奪ふものあり。ベネチアに死す。

●リウーベンス（佛國）

西暦一五七七年—一六四〇年
日本天正五年—寛永一六年

フランドルのコローンに生る。フレミシユ派畫家の始祖にして、始めフレミシユ派の大家數人に就きて教を受け出藍の譽あり、後伊太利に行きてチ、アノ、パウル、ベロネーゼ等の畫を研究して得る所甚多し。羅馬、フイレンツエ、ゼノヴ等に轉居し、一六〇九年アントワープに至る。名聲既に高し。次でルクセンブルグ宮殿の裝飾に從ふ。後女王イザベラ及西班牙王の知る所となり、重用せられ、樞密院書記官に任ぜらる。次で西班牙大使として英國に派遣せらる。英王カロロ（チャールス）一世大に之を厚遇し、特にナイトに叙す。英國に於てホワイトホール舞踏室の裝飾に關係す。後アントワープに歸り、同地に死せり。

●ラファエロ、サンチ（伊太利）

西暦一四八三年—一五二〇年
日本文明一五年—永正一七年

伊太利の侯國ウルビフに生る。其父畫を以て業とし多少名聲あり。ラファエロに畫の大要を學ばしめ、指示教導すること最懇なり。ラファエロが後年の成功此間に萠すもの少からずといふ。後フイレンツエに赴きカルツーヌ、レオナルド、ダ、ビンチ、ミケランジエロ等の作品に學び、大に得る所あり。技能益發達し、名聲大に擧る。法王ユリウス二世禮を厚うして之を招き、バチカノ宮殿の壁畫を描かしむ。次で佛王フランシス一世の爲め、數個の畫を描き、次で法王レオ十世の囑を受けてシスタイン祈禱堂の窓掛畫を作りぬ。此畫は百年の間フランドルに在りしが、カロロ一世その七個を求めて今ケンシントン宮殿に藏せらる。ラファエロは所謂ラファエロ派の開祖にして、理想を尊び、自然以上に出でゝ自然的なるを以て畫の本領とせり。作る所の畫多くは羅馬にあり。その國民美術館には聖カザリン、ジユリアス二世、ナイトの幻及窓掛畫等を藏す。

（伊太利）コレジオ

（伊太利）チチアノ

(伊太利) チチアン (テチアノ) (名畫家)

Tizian. (Tiziano).

世界百偉人肖像集

(伊太利) コレッジオ (名畫家)

Correggio.

世界百偉人肖像集

(伊太利) ラファエロ、サンテ (畫聖)

Raphael.

世界百偉人肖像集

(佛國) リッーベンス (名畫家)

Rubens.

世界百偉人肖像集

ンバンダイクは獨逸に生れ、ルーベンスに師事して肖像畫に於ては特に其名あり、ムリロは西班牙の市に生れ、ルーベンスの影響を受け、其作品は殆んど教會に集り、ラファエルは伊太利の人にして

ベラスケス（西班牙）

●レンブラント（レンブラン）（和蘭）

西暦一六〇六年―一六六九年
日本慶長一一年―寛文九年

バン、ダイン、パウル、レンブラントは和蘭國ライデン府に生る。アムステルダムに於て畫を學び、弱冠にして聲名あり、特に其肖像畫の色彩に光線の妙を盡したるに於ては殆追及するものなく、一代の才俊其門に集り、當代第一流の畫伯として崇敬せられたりたゞ彼の性行に於て缺點とすべきは其金錢を愛したることにして、子弟をして自家の畫を模寫せしめ、自ら之に筆を加へ、高價に之を賣り以て巨萬の產を成せり。之を以て彼の畫と稱するものにも信憑すべからざるもの甚多し。其作品の多數はアムステルダム博物館に藏せらる。彼はダッチ派畫家としては第一流の天才なり。

●ワグネル（獨逸）

西暦一八一三年―一八八三年
日本文化一〇年―明治一六年

樂聖ワグネル、名をリヒヤルドといふ、獨逸國ライプチッヒ市に生る。幼にして奇才あり、十三歳の時ホメロスのオデイセーを譯し、十四歳にして一悲曲を作曲せり。二十一歳の時ベートーヘンが演奏を聞き深く感激し、志を立てゝ作曲家たらんとせり。ハイデルベルク、ゲーニッヒスベルグ、リガ等に在ること數年、一八三九年意を決して巴里に赴き、其作を公表せんとせしも誰ありて之が興行を引受くるものなし。疲憊困窮して一八四二年巴里を去り、翌年ドレスデンに於て興行し成効せり。ワグネルの名之より世に知らる。これより「デル、フリゲンデ、オルランデル」「タンホイゼル」其他の傑作相次いで出で當時の樂壇を驚かせり。後事により罪に座し國外に在ること十二年、貧困常に其身に迫りしも屈することなく作曲に從へり。一八六一年歸國を許され、次でバワリア王ルイの招きにより其家に入り、こゝに樂しき生活を送れり。一八六五年「トリスタン、ウンド、イソルデ」を出しぬ。彼は一八八三年ベネチアに死せり。ワグネル天資超邁哲人の風あり、常に人の畏敬する所たり。

●バンダイク（フレミシウ）

西暦一五八九年―一六五四年
日本天正一二年―承應三年

バンダイクはアントワープに生る。始めリユーベンスに學び、後羅馬に赴きて幾多の名高き古畫を研究し、技倆益發達す。後ゼノアに赴き、ザヴォイの皇族フイリベルトを始め、當時の貴人の囑を受けて揮毫す。爾來名聲天下に高く研鑽益努む。佛の名宰相リシュリー禮を厚うして佛國に至らんこと勸めしも辭して赴かず、次で英王カロロ（チャールス）一世の招きを受けて英國に行き、其靈筆を揮ふ。カロロ厚く之を遇し、ナイトに叙し、英國に永住せんことを勸めしかば之に從ひ、ゴーリス伯の女を娶り、倫敦に棲めり。かくて英國に於て多くの傑作を殘し、一世の聲譽を荷ひしが、遂にロンドンに死せり。遺骸をアントワープのセント、ポール寺院に葬る。其作る所の畫甚多きも、特に肖像畫に於て卓越せる技能を有し、長く肖像畫家の泰斗として仰がる。

●ムリリヨ（西班牙）

西暦一六一八年―一六八二年
日本元和四年―天和二年

畫伯バルトロミ、ステファノ、ムリリヨは西班牙國セビリアに生る。其叔父カスチロまた名ある畫伯たりしかば、早くよりこれに就きて敎へを受けぬ。一六四三年主都マドリッドに至り、有名なる畫伯ベラスケの敎へを受け、技倆日に進み、期年ならずして盛名を遠近に馳するに至れり。一六四五年よりセビリアに歸りぬ。これより名聲愈高く、各所に其天才を發揮し、殊に西班牙王の爲に作れる歷史畫數幅は最賞讃を博せしが、カディズに於てフランシカンス派僧院の裝飾に從ひ、「聖カザリンの婚姻」なる畫を製作せる中、足場を失ひて不幸なる死を遂げたり。ムリリヨは啻に歷史畫をよくせしのみならず、また風俗畫に長じ、其丐兒肯爪の圖の如きは神工を以て稱せらる。

●モツアルト（モザルト）（墺太利）

西暦一七五六年―一七九二年
日本寶暦六年―寛政四年

樂聖モツアルトは墺太利國ザルツブルグ市に生る。其父多少音樂に堪能なりしかば幼きより樂器に親しみ異常の進歩を示せり。六歳の時墺太利皇帝フランシス一世の前に其最初の公開演奏を試む。技術精妙優に大人音樂家を凌ぎ殆奇蹟を以て目せられたり。七歳の時父と共に巴里に赴きしに其奇才を傳聞して演奏を求むるもの甚多く、遂に其宮廷に招かれ貴顯朝臣の前にオルガンを奏す。此年また最初の作曲を公にせり。一七六四年九歳の時再其父に伴はれロンドンに赴き皇族の前に演奏す。爾來六年にしてロンドンを去るに臨み、ソナタ六曲を作りて女王に獻ず。それよりハーグ、巴里を訪ひザルツブルグに歸り、ジョセフ二世の爲にオペラを作る。次で羅馬に赴き法王宮廷に演奏し、勳位を授けらる。一七七七年より維納に住す。こゝに彼はコンスタンス、ウエベルなる貴女を戀ひしも其戀は幸福ならざりき。かくて幾多の名曲を殘し、維納に於て長逝せり。モツアルト病弱にして風采甚揚らず、其性質も亦神經質にして病的なるを免れざりき。其作曲數多あるが中に臨終の神託を受けて作れりと傳へらるゝ輓歌は最名高く、其他フイガロ、ギオバンニー等の曲も亦名あり。

●バ　ハ（獨逸）

西暦一六八五年―一七五〇年
日本貞享二年―寛延三年

ヨハン、セバスチアン、バハは獨逸の音樂界に於ける作曲の大家なり。其父亦樂界の名手にして、宮廷樂師として、又市樂長として令名ありき。父の遺傳と習練の好機會とを有せるバハは、幼にして既にバイオリンに熟達し、又熱心に風琴を研究して、ワイマル朝廷の宮廷附屬禮拜堂の樂長に任ぜられ、一七二三年にはライプチヒのセント、トーマスの樂長に推され、兼ねて同地大學の音學長となり、長逝の日に至るまで其職を奉じたりき。氏の樂界に於ける功績と盛名とは、當時殆ど比肩する者なく、樂界は正に氏によりて一時期を劃せられたり。氏が風琴の造詣に至りては最も著名なるものにして、其發明に係る數種の樂器は、今日に至るも猶ほ最良と稱せらる。氏は二回の結婚によりて子女廿人を擧げしが、皆音樂に從事せしめたり。氏は又社交に長じ、親として賢父なる如く朋友として友誼に厚く、音樂の趣味を有する者常に門下に蝟集し、一門の中和氣掬すべき者あり、其收入は多かりしも、社交と慈善との爲に、囊底常に空しかりきといふ。バハの曲は皆宗教の儀式に適し、崇嚴にして能く善男善女の渴仰心を激せしめたりしかば、到る所の教會堂に採用せられしを以て、彼の畢生の理想は、茲に實現せられたりといふべし。

●ベートーヘン（獨逸）

西暦一七七〇年―一八二七年
日本明和七年―文政一〇年

近世音樂家の巨擘として何人も知らざるなきルードウイツヒ、フォン、ベートーヘンは獨逸國ボン市に生る。幼よりして音樂を嗜むこと食よりも甚しく、常に絲竹を放たず。其異常なる天才は早く既に總角にして現はれ、十三歳の時、何等の準備なく、豫想なくして一曲を作り、當時の大音樂家を驚嘆せしめたること甚しかりき。長するに及びて其技益神に入り、奇才を擅にせしも、其餘りに高遠なる理想と風韻とは反て俚耳に入り難く、一七九一年有名なる歌劇レオノラ（一名フイデリオ）を公にせしも成効せず、かくて比較的不幸なる生活を送りしも、屈せず撓まず其樂しむ所を守り、幾多の曲を出せしが、其死後に至りて名聲益高く、至妙の韻、至高の調、何人も追及すべからざるを認めらるゝに至れり。其作曲中「月夜の曲」は殊に名高く、至る所に演奏せらる。維納に於て死す。一八四五年ボンの市民は特に此天才を追慕し、これが爲めに紀念碑を設け、ビクトリア女王は特旨を以て其除幕式に臨幸せられたりき

●ハンデル（獨逸）

西暦一六八四年―一七五九年
日本貞享一年―寶暦九年

フリードリヒ、ハンデルは獨逸聯邦サキソニー國ハレーに生る。幼にして音樂を好みしが、其父は之に法律を學ばしめんと欲し樂器を弄することを固く禁ぜしに、夜に入りて家人の眠る毎に潛に樂器を取出し、之を演奏して樂となせり。七歳の時ワイッセンフエル公、父に勸めてハンデルの音樂を學ぶを許さしむ。かくて師を求めて學ぶに進歩著しく十歳の時既にソナタを作曲せり。一六九八年伯林に至り皇帝の感賞を受けぬ。同年ハムブルヒに於て樂人某と決鬪せり。二十歳の時アルメリアなるオペラを作り、翌年フロリンダを作る。爾來聲名日に高し。次で伊太利に赴き、また一七一〇年英國に至り、居ること二年にして歸る。この間屢作曲を試み、各所に演奏して時人の驚嘆を博せり。次でウトレヒトの平和を祝ひてアンナ女王の爲に新曲を作れり。かくてハンデルを崇拜する者年と共に加はり、數人の貴族は共同してハンデルの爲に其作曲を公にし、幷に彼の指揮の下に之を興行せんが爲に會堂を設くるに至れり。後ロンドンに於て死す。作るところの曲、いづれも名作にして後世音樂家の尊重措かざる所なりとす。

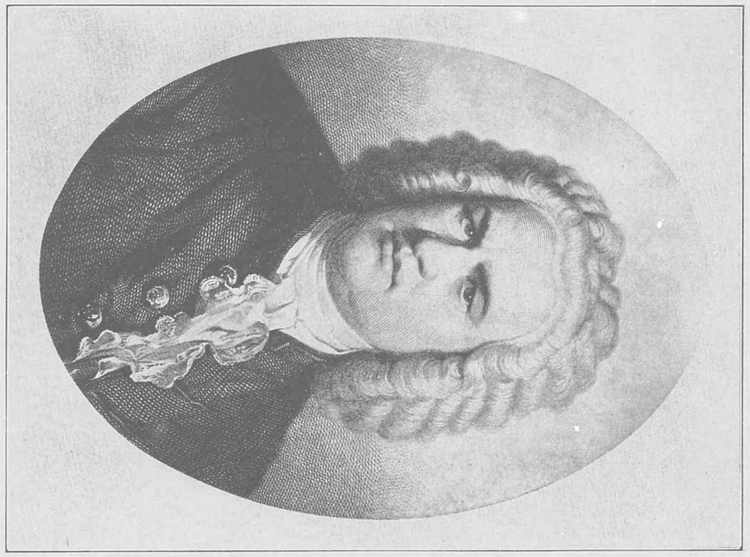
理想と風韻とは反て俚耳に入り難く、一七九一年有名なる歌劇レオノラ(一名フイデリオ)を公にせしも成効せず、かくて比較的不幸なる生活を送りしも、屈せず撓まず其樂しむ所を守り、幾多の曲を出せしが、其死後に至りて名聲益高く、至妙の韻、至高の調、何人も追及すべからざるを認めらるゝに至れり。其作曲中「月夜の曲」は殊に名高く、至る所に演奏せらる。維納に於て死す。一八四五年ボンの市民は特に此天才を追慕し、これが爲めに紀念碑を設け、ビクトリア女王は特旨を以て其除幕式に臨幸せられたりき

(獨逸)モツアルト(モザルト)音樂大家　アドルフ彫刻世界百傑人肖像集

Mozart.

(英國)ベートーフェン(音樂大家)　世界百傑人肖像集

Beethoven.



(獨逸)バハ(音樂大家)

Bach.

(獨逸)ハンデル(音樂大家)　世界百傑人肖像集

Handel.

於て樂人某と決鬪せり。二十歳の時ヴルメリアなるオペラを作り、翌年フロリンダを作る爾來聲名日に高し。次で伊太利に赴き、また一七一〇年英國に至り、居ること二年にして歸る。この間屢作曲を試み、各所に演奏して時人の驚嘆を博せり。次でウトレヒトの平和を祝ひてアンナ女王の爲に新曲を作れり。かくてハンデルを崇拜する者年と共に加はり、數人の貴族は共同してハンデルの爲に其作曲を公にし、幷に彼の指揮の下に之を興行せんが爲に會堂を設くるに至れり。後ロンドンに於て死す。作るところの曲、いづれも名作にして後世音樂家の尊重措かざる所なりとす。

(希臘) ヒポクラテス (醫學の鼻祖)

世界百偉人肖像集

Hippokrates.

(伊太利) ガレノス (醫學大家、科學者)

世界百偉人肖像集

Galen (Galenos).

(希臘) アルキメデス (科學大家)

世界百偉人肖像集

Archimedes.

(伊太利) マルコポーロ (大旅行者)

世界百偉人肖像集

マスター、チプ、フイロソフイ 長瀬鳳輔氏所藏

Marcopolo.

● アルキメデス (希臘)

紀元前二八七年—紀元前二一二年

ス螺旋を創び理學界の明星たり。彼は馬の明し大有力なる腦領域を發見す。彼は羅馬の攻撃を受くるや、彼は戰艦又は機械を使用して之を甲板上に捕獲し或は空中に投ラ下すべき機械を造せり。アルキメデスは希臘市の人にして有名なる數學者なり。アルキメデスは原理及び數學に關する著書多し。彼は各種の機械を發明し、ピラミッドを建設し、ピラミッドは埃及市伊太利南部のシラクサ市に生れ、紀元前二八七年—紀元前二一二年

● マルコポーロ (伊太利)

紀元一二五四年—紀元一三二三年

駐ポ。ポ。ポ。

●アルキメデス（希臘）

西暦紀元前二八七年—二一二年
日本紀元三七四年—四四九年

アルキメデスは希臘領シラクス市（伊太利南部）の人にして、有名なるエウクリデス及びアポロニオスと共に數學界の明星たり。彼は各種の理學に關する原理及び機械を發明し、有名なる「アルキメデス螺旋」を創造せり。羅馬の大將マルセラスがシラクス市を攻むるや、彼は戰艦の甲板上に石塊を放下すべき機械を發明し、又は之を捕獲し、或は空中に飛揚せしむるの工夫を按出して、敵の心膽を寒からしめしが、落城するに及びマルセラス命令を發して彼と其家屋とを安全ならしめんと計りしも、及ばず、大科學者は遂に戰場の露と化せり。彼は難問を解決するに驚く可き天才を有し、キケロの時代に「アルキメデスの問題」なる俚諺あり。蓋し非常なる難問の意なり。東羅馬帝國の首府コンスタンチノープル陷落の時、アルキメデスの著作は、幸にして伊太利に運ばれ、後獨逸に移され印刷術の發明と共に一五四四年バーゼルに於て希臘語及び羅甸語にて出版せられ、後一五〇年にして巴里、ベニス、倫敦等に於て重ねて出版せられたり。此の肖像は古代の凹彫より採れる者なり。

●マルコポーロ（伊太利）

西暦一二五四年—一三二三年
日本建長六年—元亨三年

伊太利の大旅行家マルコポーロは、ベニスの人なり、父及伯父は嘗て東洋に貿易を試み元の始祖勿必烈に謁して優遇を受けしが、一二七一年ポーロは父に從ひて東遊し、一二七五年元に仕へて高官に任せられ、其一族は一二九二年に至る迄支那に駐り、後五年にして始めて故國に歸れり。一二九八年、ポーロは海軍に從ひ、ゼノア人と戰ひて捕虜となり、獄中に於て同獄者に其東洋旅行談を物語れり。翌年放免せらるゝや、直にベニス大議會の一員に擧げられ、時人の尊敬をうけつゝ、此地に歿せり。彼は東洋各地の地理、風俗、人情、人種等に關して銳利正確なる觀察をなし、其旅行記は學界を利せしこと少からざりき。當時歐羅巴人は十字軍の結果稍東洋に關する知識を有し、一二四六年法王の使節は蒙古の國都附近に至り、同五三年には法王ルイ九世の使節又來朝せしことあり。次でポーロ元朝に仕ふるに及び、亞細亞特に日本の地理風俗を傳へ、帝室の壯麗、國土の富饒等を誇大に述べしより、歐人の冒險心を刺激し、大に航海貿易の發展を促せり。彼のコロンブスの亞米利加發見の如き、實は日本探險の目的を以て發航せし結果なりといふ。ポーロの元に在職中元軍大に我が西邊に寇して大敗せり。實に西暦一二八一年我が弘安四年也

●ヒポクラテス（希臘）

西暦紀元前四六〇年—全三六一年
日本孝昭天皇一六年—孝安天皇三二年

世界醫學の祖として尊ばるゝヒポクラテスはペロポンネサス戰爭の時代に希臘に生る。其家はアスクレピアデー家にして三百餘年間代々醫を以て業とせり。當時希臘に於ては醫術未だ開けず、單に僧侶神官等の衣食の資を得る副業と見做され、其醫療法は種々なる迷信によりて行はれたり。彼はこゝに醫術の開拓者たらんことを以て畢生の目的となし、各種の學術を研究して之を綜合し、其の上に基礎を立て、醫療法は不自然を避くべきこと、病兆を仔細に觀察すべきこと、簡易なる藥劑を用ふべきこと、食物療法の有利なること等を發見し、これを實行し、又鼓吹したり。其著書なりと稱せらるゝもの甚多し、中に就きて著名なるは空氣、水、土地、食物等に關する醫學上の論文なりとす。

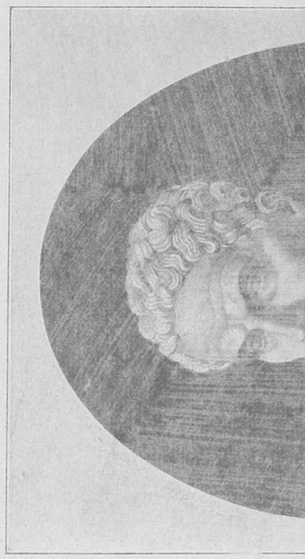
●ガレノス（伊太利）

西暦一三〇年—二〇〇年
日本景行帝六〇年—仲哀帝九年

ヒポクラテスに次げる古代醫學の大家ガレノス、クラウデイウスは希臘國ペルガモスに生る。醫學を以て志を立て希臘、埃及の各地を漫遊して著名なる學校及學者を訪ひ得る所甚多し。後羅馬に赴きて其學說を講じ、また醫を開業せしに、病として治せざるものなかりしかば、當時の未開なる醫療法に慣れし羅馬人は大に之を異とし、魔術者の如く思惟せり。後皇帝マルクス、オーレリウスの知る所となり、信任深く、オーレリウス死するに臨みては其子コムモダスの監督をガレノスに托したる程なりき。羅馬に於て長逝す。其遺著三百餘卷に及びしが、羅馬平和宮の兵火に罹りし際其大部分を燒失せしは深く惜しむべきなりしかも後世醫學の其殘餘の著に負ふところ極めて大なりとす。

（希臘）

（伊太利）



●バスコダガマ（葡萄牙）

西暦一四五〇年—一五二四年
日本寶德二年—大永四年

航海家として名高きバスコダガマは葡萄牙國サイネスに生る。早くより航海を業とせしが、一四九七年ポルトガル王エマヌエルの命を受けて喜望峰の迂回を企つ。從來喜望峰迄は歐州船舶の航せるものありしも、喜望峰以東は殆別世界として歐州人の之を探りしものなかりしかば、衆人皆此航海を危ぶみしも、彼はあらゆる困難を冒して喜望峰を迂回し、亞弗利加東岸を探りつゝ東走し、カリカットに着して其國王より至大の歡迎を受け、一四九九年其成果を收めてリスボンに歸りぬ。一五〇二年更に國王の命を蒙り、東印度に通ずる航路を發見せんが爲め、二十隻の船艦を率ひ印度に達し、遂に葡萄牙をして東洋開拓の先鞭者たる榮を荷はしめたり。功により伯爵を授げられ、一五二四年ジョン三世の時葡領印度總督に任せらる。任後間もなく印度に死せり。當時本邦に於ては足利氏の武威漸く衰へ、群雄四方に起り、天下多時ならんとするの時にして、爾來外には葡國の海外發展益盛んに、遂に其船舶本邦にも渡航するに至れり。

●グーテンベルヒ（獨逸）

西暦一四〇〇年—一四六八年
日本應永七年—應仁二年

古來印刷術の發達に寄與せる人尠からず、其發明に刻苦したる人亦甚多しと雖、特に之が發明を未開の時代に試み、新形式を起して世界の文明に貢献せるグーテンベルヒの如きは、長く人類の恩師として渇仰せらるべきものなりとす。グーテンベルヒは獨逸國メンツに生る。其家は名高き舊家なり。幼時より發明の才ありしが、長ずるに及びて印刷術の發明を志し、始めジョン、アウストなる人の保護を得て之を試みしが、後獨力を以て事に當り、刻苦研究の末、從來の印刷術の到底守るべからざるを知り、字母を個々に製造して木材を彫り、之を配置して自在なる文字を綴るの至便なることを發見し、遂に之を大成したり。實に是れ現時使用せらるゝ活字の祖なりとす。一八三七年有志者相謀りて其銅像をメンツに建てたり。グーテンベルヒの發明ありて以來、出版印刷の事業容易となりしかば、續々珍書公にせられ學術の普及迅速となり、遂に世界の思想界に大變動を與へ中世の迷夢を覺醒せしめ、科學的研究是より起れり。

●マガリアエンス（マゼラン）（葡萄牙）

西暦約一四八〇年—一五二一年
日本二一四〇年—二一八一年

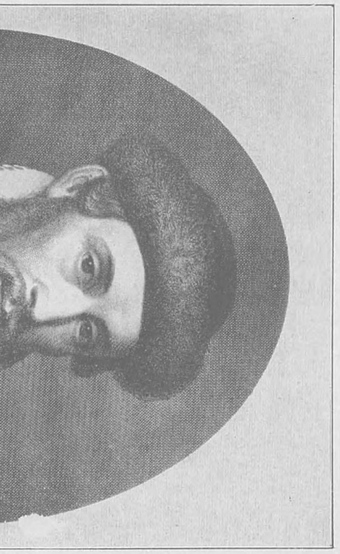
南米最南端のマゼラン海峡及ヒリッピン郡島の發見を以て知られたる航海家なり。初東印度に於て葡萄牙の爲に努力せしが、報せらるゝことの薄きを以て去て西班牙に赴き、馬剌加に達する西方航路を發見せんことを建議して、チャーレス五世に容れられ、五艘の艦隊を率ゐて一五一九年十一月後柏原天皇永正十六年サンルカーを出帆せり。先づマデイラに航し、リオラジャネロ灣に碇泊し、一五二〇年パタゴニア沿岸サンジュリアンにて、監督官及三艦長の背叛に遭ひ、且其一艦は、南方測量に赴きて難破したり。同年十月廿一日艦隊はマゼラン海峡に入りしが、其一艦は僚艦と失して本國に歸航せり。十一月二十八日海峡を通過して大洋に出で、之を太平洋と命名せり。それより北北西、西へ轉針し、一五二一年四月ヒリッピン群嶋を發見せり。群嶋の一なるゼブの王は、西班牙人を歡迎し、臣下と共に洗禮を受けしが、他のマクタン土人の襲撃をうけ、マゼランは部下の一部と共に虐殺せらる。實に一五二一年四月二十七日なり。其後ゼブも亦反きて船將其他を殺せしかば、殘員は、殘艦二艘にて困難なる航海の後マラッカに到着し、内一艘は、喜望峰を廻りて本國に歸れり、これを世界一週の嚆矢とす。

●コロンプス（伊太利）

西暦一四三五年—一五〇六年
日本永享七年—永正三年

コロンプスは伊太利ゼノアの近傍に生る。十四才にして海員となりしが、少年時代の航海的生活は、地中海に限られたり。後永州に航し、一四七〇年葡萄牙沿岸の航海中難破して遂にリスボン府に住し、後數年マデーラ嶋、アゾレス嶋等に航海を試みたり。當時航海發見の風潮は西歐の流行となり、一四八七年喜望峰の發見あり、同九八年バスコダガマは印度に赴き、珍貨を持ち歸りし以來、印度は深く一般歐羅巴人の注意を惹くに至れり。先是一四七四年の頃コロンプスも亦印度に赴かんと欲しゼノア人に謀りしも得る所なく、轉じて葡萄牙王及び英王ヘンリー七世に說きしも納れられず。遂に西班國女王イサベラの納るゝ所となり、三艘の帆船を率ゐて、百廿人の船員と共に出帆し、有ゆる危險に打ち勝ち、バハマ附近の一嶋を發見し之を西印度と名けたり。實に一四九二年十月なり。第二回の航路にはドミニカ嶋に至り、第三回の航海に於て、始めて（一四九八年）米大陸を發見するに至れり。彼は第四回の航海に於て、メキシコ灣の沿岸を航して西班牙に歸り、バラドリッドにて歿せり。彼の遺骨は始めセビリアに葬りしが、後サンドミンコに改葬し、又ババナに移され米西戰爭後、更にセビリアに改葬せられたり。

（葡萄牙）マガリアエンス



（獨逸）グーテンベルヒ

ピリに遺骨は始班四回の牙にの航海に改葬せられたり。

於て始め(一四九八年米大陸に到り、バスコ、ダ、ガマ西回の印度航路を発見し、第三回目なり、第二回目の航路には四度に亙り、第四回目は第二十七日間の後、殺害せしかば、殘員は殘艦二隻にて歸国せり。

西洋に歸航出で、之を太平洋と命名せり。

西洋に歸航出で、之を太平洋と命名せり。

(獨逸) グーテンベルク (印刷術發明家)

原圖古諸世界百傑人肖像集

Gutenberg.

(伊太利) コロンブス (亞米利加發見者)

原圖ノルフセオ彫刻(唯一の性實ナルモノ)世界百傑人肖像集

Columbus.

(葡萄牙) バスコ、ダ、ガマ (大航海者)

オンケン氏世界史

Vasco Da Gama.

(葡萄牙) マガリアエンス (大航海者)

Magellan (Magalhães).

●コルテズ（西班牙）

西暦一四八五年—一五四七年
日本文明一六年—天文一六年

西班牙國メドリンに生る。其家は貴族なり。一五四〇年初めてサン、ドミンゴに航す。探險家ベラスケスと共にキユーバの遠征に從ひ、一五一八年更にメキシコ遠征を企て、ダバスコに上陸し、交戰の後其地を征服し、一五二〇年オタムバに於て大にメキシコ人と戰ひ之を大敗せしめ、進んで主都を奪ひ、

●ドーレク（英國）

西暦一五四五年—一五九六年
日本天文一四年—慶長元年

フランシス、ドレーキは英國タヴイストックに生る。幼にして海員となり、其親族ジョン、パウスキンの部下となりて航海に從事し、勇敢を以て名を博せり。一五七〇年自ら船員を募集して二隻の船を率ひ西印度に航し、一五七二年西班牙に航す。次で愛蘭に於て將軍エセックスの下に軍務に從ひ曉名を博し、クリストファー、バットン卿の知る所となりてエリザベタ女王に謁す。一五七七年再び亞米利加に航し、マゼラン海峡を迂回して智利及伯

（メキシコ征服者）コルテズ（西班牙）

エーゲル世界史

Cortez.

（天文學者）コペルニクス（波蘭）

世界百傑人伝叢集

Copernicus.

（探險家）ドレーク（英國）

世界史一ヤンキ

Drake.

（陶器改良者）バーリシー（佛國）

世界百傑人伝叢集

Calissy.

●コルテズ（西班牙）

西暦一四八五年—一五四七年
日本文明一六年—天文一六年

西班牙國メドリンに生る。其家は貴族なり。一五四〇年初めてサン、ドミンゴに航す。探險家ベラスケと共にキユーバの遠征に從ひ、一五一八年更にメキシコ遠征を企て、ダバスコに上陸し、交戰の後其地を征服し、一五二〇年オタムバに於て大にメキシコ人と戰ひ之を大敗せしめ、進んで主都を奪ひ、メキシコ全國を征服し、またカリフォルニヤを發見せり。かくて國王カロロ五世より新西班牙總督に任せられたるが其施政餘りに苛酷なりとて批難交々起り、一五二八年西班牙に召喚せられ、カロロの前に辨疏し、侯爵を授けられたり。後年王の待遇に嫌焉たるものあり、不平に晩年を送り終にセビリアに死せり。コルテズは實にイスパノアメリカ建設者の一として勳功最著しきものの一人なりとす。

●コペルニクス（獨逸）

西暦一四七八年—一五四二年
日本文明一〇年—一二年

近世天文學の父と稱せらるるコペルニクスは、西普漏西亞のトルンに生れたり。一五〇〇年羅馬に遊び天文學を講じ、後醫學を研究し寺院の醫師となり、其伯父エルムランド僧正の歿後は、プラウエンブルグに移り、陸軍の軍屬となりて功あり。彼は又鑄貨に關する熱心なる研究をなし、全國を通じて統一したる鑄貨の必要なる事を主張し、普國の貨幣制度に貢獻せる所大なりき。一五一七年エルムランドの大監督となり最も克く其職責を完うしたりき。彼の天文學的所說は、太陽は中心に位し地球及び恒星は其周圍を廻りて運行すると云ふにあり。此說は既に先哲ピダゴラス其他の科學者の唱導せし所なりと雖も、コペルニクスは系統的に說明を加へ後進ケプレル、ガリレーの如き諸天文學者をして彼の學說に基いて一學統を建設せしめしは、眞に斯學上掩ふ可らざる大功なり。彼が法王ポーロ三世に捧げし一書は、六部より成り、新理論を以て宗教を批判せしを以て、一六一六年より一七五七年に至る間該書は宗教を破壞する者なりとして、禁書の目錄中に擧げられたり。其他三角術の著書及びビザンチン市の一著者の著書の飜譯あり。

●ドーレク（英國）

西暦一五四五年—一五九六年
日本天文一四年—慶長元年

フランシス、ドレーキは英國ダヴイストックに生る。幼にして海員となり、其親族ジョン、バウスキンの部下となりて航海に從事し、勇敢を以て名を博せり。一五七〇年自ら船員を募集して二隻の船を率ひ西印度に航し、一五七二年西班牙に航す。次で愛蘭に於て將軍エセックスの下に軍務に從ひ曉名を博し、グリストファー、バットン卿の知る所となりてエリザベタ女王に謁す。一五七七年再び亞米利加に航し、マゼラン海峽を迂回して智利及伯露の西班牙殖民地を攻め之を破壞し、ニウアルビオンを奪ひ、それより東印度を經、嘉望峰を周航し、一五八〇年英國に歸るや、エリザベタ女王親しく彼の船に臨幸して酒宴を設け、授くるにナイトの爵を以てす。一五八五年及六年西印度に赴き數個所の市を攻略し、一五八七年軍艦三十隻を率ひてカディズ港を攻め、聖ヴインセント岬とカディズの間に西班牙の船舶を捕拿し、海岸の要塞數個を陷る。翌年ハワード提督の下に海軍中將として有名なるアルマダ艦隊を邀擊し、之を全滅せしむ。後復西印度に赴きしが、ノムブルド、ディオスに於て死せり。

●パリシー（佛國）

西暦一五〇九年—一五八九年
日本永正六年—天正一七年

ベルナルド、パリシーは佛國アグネに生る。始め玻璃書工として佛國の各地を巡業せしが、一五三八年結婚してセインテスに住めり。爾來各種の學術を攻究せしが、陶器に塗るべき白色の顏料を得んことを志し、これが工夫に身を委ね、苦心を重ぬること十六年、貧苦身に迫るも意とせず、家財を蕩盡して只一脚の椅子をすら燃料に用ゆるに至り一五五七年漸く之を發明せり。これ實に佛國の陶器業に一新紀元を與へたるものにして、パリシーの名之より高し。一五六二年新教を奉せるを以て幽囚せられしが、ヘンリー三世之を惜み其保護の下に置き、カトリック教に改宗せしめんとせしも遂に從はざりき。一五六四年チウレリーに工場を設けたり。一五七二年所謂聖バルウロミイ虐殺の際には彼は特に許されて其害を免れ、一五七五年より同八四年に至るまで自然科學歷史、生理學、農學等に關し各地に講演せり。一五八五年再び新教を奉ずるの故を以て捕へられ、バスチーユに幽閉せられてこゝに死せり。パリシーは敬虔なる新教徒たりしと共に、進步せる學者にして、其自然科學及陶器に關する著書は名聲高く、殊に佛國陶業の世界に冠絕せるはパリシーに負ふ所最多しとす。

●ハーベー（英國）

西暦一五七八年—一六五七年
日本天正六年—明暦三年

血液循環の發見は世界の醫學に一轉換を來さしめたる大事件なり。而してこれが發見の榮譽を荷べるものは實に英國の醫學者ハーベーなりとす。ハーベーはケント州フォークストンに生る。初めケムブリッヂに學び、業卒るの後伊太利に遊學し、パドア大學より醫學博士の學位を受く。一六〇七年ケムブリッヂ醫科大學委托員となる。其血液循環の原理及事實を公表せしは一六二八年にして當時の醫界を驚かしたること甚しく、論難攻撃するもの甚だ多かりき。後其眞理なること確證せらるるしも、尚其發見者たるの榮を奪はんとして中傷するもの甚多かりしといふ。一六三二年國王チャールス一世の侍醫となり、深く信任せられ、時々王及び侍臣に向て血液循環の事實を説明し、いたく之を驚かしたりき。一六四六年オックスフォードなるメルトン、カレッヂの指導員となりしが、間もなく倫敦醫科大學長となれり。ハーヴェー常に病弱なりしが、幸に八十歳の高齢を重ね倫敦に死せり。

●ガリレー（伊太利）

西暦一五六四年—一六四二年
日本永祿七年—寛永一九年

經驗科學の祖と稱せらるゝガリレーは伊太利ピザ府に生る。始め醫學を學ばしめられしも轉じて星學を研め、修養する所深く二十五歳にしてピザ大學の星學教授となり、一五九二年パドアに移る。爾來星學、數學、物理學等を攻究し研究最力む。其最初の發見は振子の運動に關するものにして依て時計の進歩に資する所多く、次で從來の寒暖計の缺點を認め之を改造して完全なるものとなせり。一六〇九年望遠鏡を發明し、爲に星學の進歩を資くること鮮少に非ず。ガリレー其望遠鏡を造るや、先づこれをベネチアの統領に送りしに、直にパドア大學教授に擧げられ、且つ終生教授として從來に例なき高俸を受くるを許されたり。これより遂に天文學に一大變化を來さしめたる地動説を公にせしに、學者の之を嘲るもの多く、且つ羅馬に召喚せられて、其所説を捨つべく命せらる。一六三二年地球の組織に關する書を公にし再び地動説を唱へしかば、法王は該著書の燒棄を命じ、且つガリレーを禁錮せり。後法王の命により地球の不動を宣誓し終りて後、傍にありし友人に向ひ確に動く、如何しても動くと言明せりといふ。かくてフィレンツェに至り尚研究を重ぬる所ありしが、眼を過度に使用して終に其學術の爲に盲し、此地に逝けり。

●ニウトン（英國）

西暦一六四二年—一七二七年
日本寛永一九年—享保一二年

アイザック、ニウトンは英國リンコルンシャイアの舊家に生れ、幼にして父に別る。十八歳の時ケムブリッヂ大學に學び既に後年の大發見の基礎を得、二十二歳バチエロル、オブ、アーツの學位を得て郷に歸り、交友を斷ちて專心研究を事とす。林檎の墜ちしを見て疑を發せしは實に此間にあり。一六六七年ケムブリッチに歸りマスター、オブ、アーツの學位を得、二年の後バロー博士の後を繼いで數學教授に擧げらる。一六七一年ローヤルソサイチーに列せらる。一六八〇年遂に其重力の發見を公にし、一六八七年「フイロソフィア、ナチュラリス、プリンシピア、マセマチカ」を出版す。ジェームス二世大學の特權を奪はんと企つるや彼は大學を代表して之に反對し、次で議會に入りて大學を代表す。一六九六年巴里學術協會員となり、一七〇三年ケムブリッヂ大學を退き、それより二十年間ローヤル、アカデミーに長たり。一七〇四年光の反射屈折變化及び色」なる一書を公にす。翌年其學術上に於ける効績を以てナイト爵を授けらる。かくて光榮と名譽を荷ひつゝ生を送りケンシングトンに於て長逝せり。ニウート品性高潔、專心學術の爲に力を盡し、其學術界に於ける効績は至大なりとす。

●ケプレル（獨逸）

西暦一五七一年—一六三〇年
日本元龜二年—寛永七年

天文學者ケプレルは獨逸ウイルテンベルグ公國に生る。始めチユービンゲンに學び、專ら星學の研究に身を委ね一五九三年廿三歳にしてグラッツ大學の天文學教授に擧げられたり。一六〇〇年ボヘミアに瑞典の星學者チホ、ブラヘを訪ひ交を訂す。ブラヘの紹介により瑞王ルドルフに謁し其知遇を受け、其數學上の智識を以て之を資くるところ甚多し。爾來熱心焦慮嘗て休止する所なく研鑽の歩武を進め、遊星の圜環其他に關する各種の發見を公にして學術に資すること最大なりき。其遺著極めて多く、いづれも貴重なるが中に、「新星學」は火星の運動に關する大論文を含み、殊に著名なり。

（英國）ニウトン

（伊太利）ガリレー

にし、一六八七年「フイロソフィア、ナチユラリス、プリンシピア、マセマチカ」を出版すジエームス二世大學の特權を奪はんと企つるや彼は大學を代表し て之に反對し、次で議會に入りて大學を代表す。一六九六年巴里學術協會員となり、一七〇三年ケムブリッヂ大學を退きそれより二十年間ローヤル、アカデミーに長たり。一七〇四年、光の反射、屈折、變化及び色」なる一書を公にす。翌年其學術上に於ける効績を以てナイト爵を授けらる。やくて光榮と名譽を荷ひつゝ生を送りケンシングトンに於て長逝せり。ニウート品性高潔、專心學術の爲に力を盡し、其學術界に於ける効績は至大なりとす。

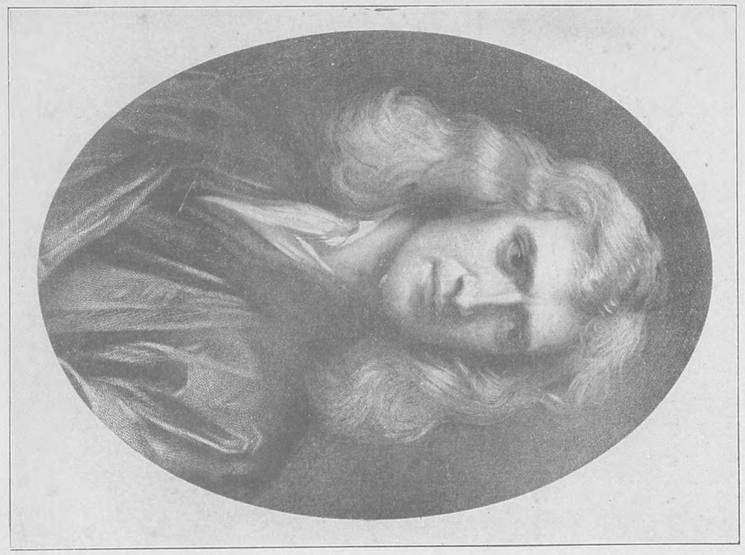
ブラヘの紹介により瑞王ルドルフに謁し其知遇を受け、其數學上の智識を以て之を資くるところ甚多し。爾來熱心焦慮寧て休止する所なく研鑽の歩武を進め、遊星の圓環其他に關する各種の發見を公にして學術に資すること最大なりき。其遺著極めて多く、いづれも貴重なるが中に、新星學は火星の運動に關する大論文を含み、殊に著名なり。

メンダイク世界百偉人肖像集

(英國)ハーベー

(血液循環の發見者)

Harvey.

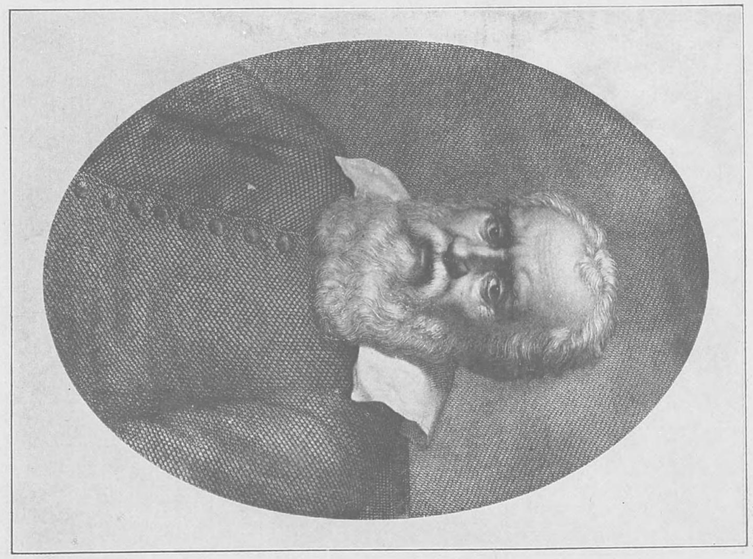


チーバル世界百偉人肖像集

(英國)ニウートン

(重力の發見者)

Newton.



ヤドー世界百偉人肖像集

(伊太利)ガリレー

(天文學者)ガリレオ

(震顫計發明者)

Galileo.

ミユニヒ美術館所藏世界百偉人肖像集

(獨逸)ケプレル

(天文學者)

Kepler.

（植物學大家）リンネ（瑞典）

Linnaeus.

世界百傑人伝叢書

（電氣の發見者）フランクリン（米國）

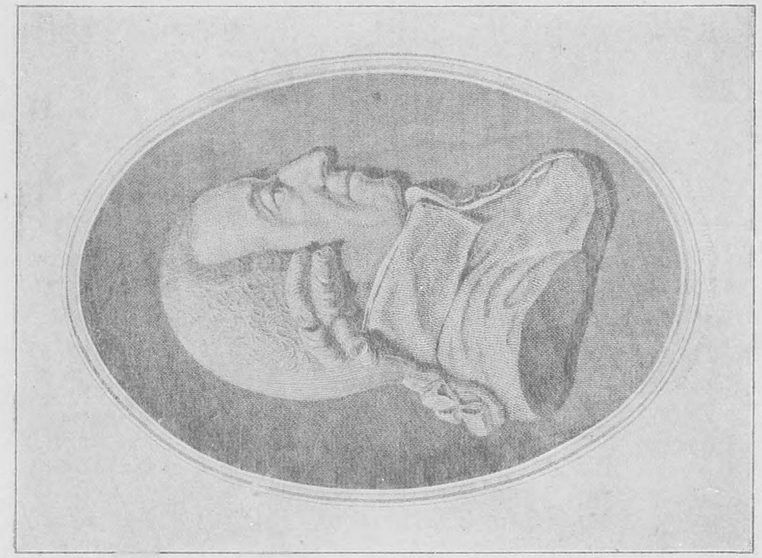
Franklin.

世界百傑人伝叢書

（慈愛家）ハワード（英國）

Howard.

世界百傑人伝叢書



（經濟學の始祖）アダムスミス（英國）

Adam Smith.

ニーゲル世界史

●リンネ（瑞典）

西暦一七〇七年—一七七八年
日本寶永四年—安永七年

植物學大家として普く其名を知られしリンネは瑞典の人なり幼にして貧苦と戰ひ植物學を研究し、殊に山野を跋渉して植物を採集し、發見する所少からず。ウプサラ大學に植物學を講せしが、植物學者ルドベックの知る所となり、其助手となり豐富なる圖書及び植物園によりて、思ひの儘に研究するを得たり。これより大志を起し、植物分類學の完成を計らんとし、廣く植物を蒐集するの必要を

●ハワード（英國）

西暦一七二六年—一七九〇年
日本享保一一六年—寛政二年

ジョン、ハワードは倫敦なる一商人の子なり。幼くして父に別れ、茶商となり海外に赴きしが、旅行中病に罹りて生命既に危かりしを一寡婦の懇切なる看護によりて救はれ、病癒えし後之と婚せしが間もなく死せり。伊太利に赴きて歸來ハムプシャイアに移住し一七五八年再婚せしも其棲すること八年にして妻死せり。一七七三年一地方官となり、監獄囚徒の悲慘なる實況を目撃せしが、是より

●リンネ（瑞典）

西暦一七〇七年—一七七八年
日本寶永四年—安永七年

植物學大家として普く其名を知られしリンネは瑞典の人なり。幼にして貧苦と戰ひ植物學を研究し、殊に山野を跋渉して植物を採集し、發見する所少からず。ウプサラ大學に植物學を講せしが、植物學者ルドベックの知る所となり、其助手となり、豊富なる圖書及び植物園によりて、思ひの儘に研究するを得たり。これより大志を起し、植物分類學の完成を計らんとし、廣く植物を蒐集するの必要を曉りて一七三二年ラプランドに旅行し、幾多の危險、困苦と戰ひて植物を採集し、歸來「フローラ、ラポニカ」の書を公にす。次で和蘭及英國の各地に漫遊す。一七四〇年ウプサラ大學の生理學及植物學教授に任せられ、同時に國王の侍醫となり、ナイトに叙せらる。それよりノールウエー、アインランド、獨逸の各地を旅行して、普く植物を探り、所謂リンネの分類法を完成して、植物分類上の一新紀元を開き、またストックホルムに學士院を建てたり。リンネの學術に對して熱心なる寢食を忘れし事ありしといふ。其著書甚多く、凡て後世の學者を資くること極めて多し。

●ハワード（英國）

西暦一七二六年—一七九〇年
日本享保一六年—寛政二年

ジョン、ハワードは倫敦なる一商人の子なり。幼くして父に別れ、茶商となり海外に赴きしが、旅行中病に罹りて生命既に危かりしを一寡婦の懇切なる看護によりて救はれ、病癒えし後之と婚せしが間もなく死せり。伊太利に赴きて歸來ハムプシャイアに移住し、一七五八年再婚せしも其棲すること八年にして妻死せり。一七七三年一地方官となり、監獄囚徒の悲慘なる實況を目擊せしが、是より囚徒救濟の方法を講せんと決心し、職を罷めて救濟所を設け、囚徒の教誨、及びこれが正業を得せしむるの方法を講じ、着々成効して其結果を擧ぐるに至りしかば、一七七四年英國議會はハワードに對し感謝の意を表せり。かくて囚徒救濟に關する幾多の書籍を出版して世人の注意を喚起し、歐州各國を巡りて其事業を擴張せしが、クリミヤに於て病者を看護し、其熱に感染して死せり。後人相謀りて宏大なる銅像を聖ポール寺院に建つ。ハワードは實に囚徒救濟事業の祖にして、その遺業は今や殆全世界に普及するに至れり。

●フランクリン（米國）

西暦一七〇六年—一七九〇年
日本寶永三年—寛政二年

フランクリンはボストン市の蠟燭製造者の子にして、十二才の時費府に出て印刷業を始め、一七二四年更に英國倫敦に赴き十八ケ月間印刷業に從事し、后費府に歸り「ペンシルバニア新報」を發行して稍々其の地歩を進めたり。一七三六年出でゝ官途に就き、累進して殖民地郵便總裁に任せられ議會の一員となり、一七五七年及同六四年には英國に國到り重要なる使命を果したり。一七七六年米が獨立を宣言するや、フランクリンは出でゝ佛國に趣き上下に遊説して英國の非ら鳴らし、米國を援助せしむ。佛人其至誠に感動し、一七七八年二月遂に米國と同盟を約し、西班牙和蘭も亦之れに加はるに至れり。佛國の學者ダランベールはフランクリンを稱揚して「天より電光を奪ひ、暴君より笏を奪へり云々」と言へり。一七八三年ベルサイユの和議に於て米國が初めて獨立を承認せらるゝや、フランクリンは再びペンシルバニアの知事に選はれぬ。フランクリンは政治家として頗る偉大なる人格を有するのみならず、科學界に於ても亦異常の貢獻をなせるものにして、其空中電氣及び避雷針の説明は、實に不朽の功績なり。

●アダムスミス（英國）

西暦一七二三年—一七九〇年
日本享保八年—寛政二年

經濟學者アダムスミスはキクルカルデーに生る。一七四八年以來エヂンバラの文學倶樂部の一員となり、文學者及び批評家として、大に名聲を博す。一七五一年グラスゴー大學倫理教授に任せられ、翌年更に道德學講座擔任を命せられたり。一七五九年「道德的情操論」を公にして、道德心の根本思想は、同情心にあることを主張し、最近の社會學者ギッデング氏等と殆ど同一の意見を發表せり。後グラスゴー大學の教授を辭して故郷に歸れり。一七七六年「國民富强の性質及び原因の研究」と云ふ書を公にし、貿易の法則を研究し、需用供給の原理を明にするや、名聲忽ち遠近に傳はり、其門に集まる者頗る多く、政治家ピットの如きも亦自ら其門下生たるを誇り、此書の原理を政治に應用し、以て「平和宰相」の名を博するに至りしと云ふ。十八世紀末佛國大革命の暗雲漸く急ならんとするや、氏の理想は漸く實現せられ、英國商業政策は改革せられて、穀物條令及び航海條例の廢止を見るに至れり。後エジンバラ稅關の代理官に任せられたり。近世經濟學の一大發展は、氏に負ふ所頗る多く、其政治經濟學の鼻祖と稱せらるゝもの固より偶然にあらざるなり。

（米國）フランクリン

（英國）アダムスミス

●ジエンナー（英國）

西暦一七四九年—一八二三年
日本寛延二年—文政五年

エドワード、ジエンナーは英國ライセスターシヤイア州キツプウオースに生る。其父は牧師なり。ザイレンセスターに學び、後一軍醫の助手となりしが、更にロンドンに赴き聖ジョンス病院に於て醫術を學ぶ。業卒るの後居をグラウセスターシヤイア州バークリーに卜し、茲に醫院を開き、聖エンドリウス大學より醫學博士の學位を受けたり。これより天然痘の研究に心身を委ね、十六年間之を續けて倦まず、屢天然痘と牛痘との關係を論じて醫界を警醒せんとし、嘲笑を被りしが、遂に種痘を以て天然痘を防ぎ得べきを實驗し、一七九八年を以て研究の結果を公にせしに、論難攻擊交々至りしも、約一年にして知名の醫學者七十名は之を承認せり。これ實に醫學界に於ける一大發見にして、全歐州の各地に傳はり、天然痘の慘害は之が爲に全く驅除せらるゝに至れり。かくて名譽と富とはジエンナーの意の如くに博取し得べかりしも、彼は長く其愛せし村を捨てざりき。英國議會は彼の功績に酬ひんが爲めに一八二一年一萬磅の賞金を決議し、更に一八七年二二萬磅を追加して彼に贈れり。

●モンゴルフィエー（佛國）

西暦一七四五年—一七九九年
日本延享二年—寛政一一年

佛國ビダロンの市民なり。幼きより自然科學に興味を有し、兄と共に其研究に從事し、硬皮紙を發明していたく賞讃せられたり。一日急須にて咖琲を煮たりし際急須の蓋を蔽へる紙片の膨るゝを見、輕量なる氣體によりて空中を飛行する機械を造り得べきを信じ、爾來刻苦研究すること年あり、幾たびか試みて幾たびか失敗に歸せしも失望せず、終に最初の輕氣球を發明し、ヴエルサイユに於て衆人環視裡にのこれを揚試し、好結果を得たりき。これ實に空中飛行計畫の嚆矢にして、爾來人の之に倣ふて新工夫を凝らすもの多く、遂に幾多空中飛行機發明の礎をなせり。

●ジアカール（佛國）

西暦一七五二年—一八三四年
日本寶暦二年—天保五年

機業界の偉人ジアカールは佛國リヨン市に生る。リヨン市は佛國機業の中心たるを以て彼は幼より機業に關する智識と經驗とを有し、從來の機織法の不完全なるを見て、其改良を計らんと欲し、多年蘊蓄せる機械學的素養を發揮し、幾多の失敗にも屈撓せず、遂に完全なるジアカール織機を發明し、機業界に一大革命を興へたり。此の織機は水車と直立の棟、發條及鈎を有し、各種の織機に應用するを得る組織にして、多く人力を省き絹布モスリン、毛氈等を織るを得爲に從來の織物職工に一大恐慌を來せしかば、氏を惡みて種々の妨害を加へたるも、氏は毫も屈せずます〳〵改良を加へて以て機業界を利し、遂に佛國の機業をして世界に冠たるに至らしめたり。

●ラボアジエー（佛國）

西暦一七四三年—一七九四年
日本寛保三年—寛政六年

近世化學者の泰斗ラボアジエーは巴里の富豪の子なり。カレッヂ、マザレンに於て學び、數學、星學、化學及哲學を攻究し、殊に化學の研究に心を傾け、發明する所尠からず。一七六四年年僅に二十一歳にして佛國學士院の懸賞論文「巴里市の點火方法」に對し、論文を提出し之に當選す。二年の後學士院會員に列せらる。其如何に學術に貢献せしかを知るべきなり。爾來學士院報告に幾多の有益なる研究の結果を公表し、また硝石製造局長其他の要職に歷任す。佛國革命の起るや事によりて罪に問はれ、死刑の宣告を受け、其發明せんとせし事業を完成する迄で生命を許されんことを求めしも許されざりしかば彼は從容として死に就けり

（英國）ジエンナー

（佛國）モンゴルフィエー

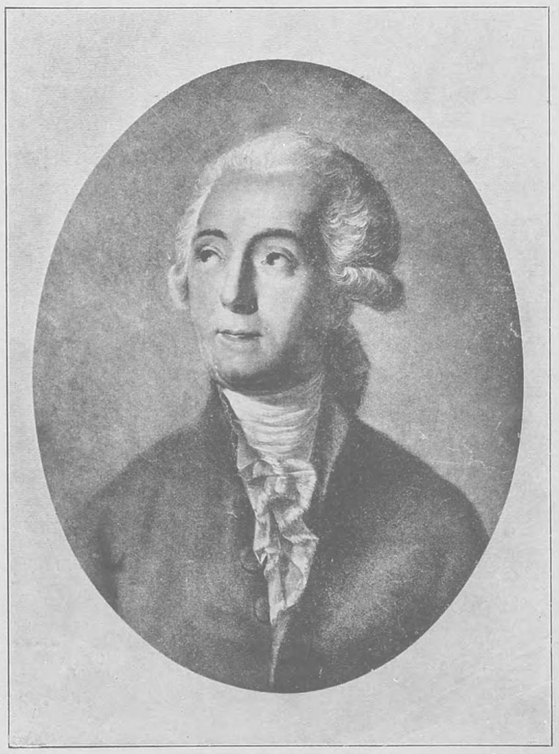
(佛國) モンゴルフィエー (輕氣球の發明家)

世界百偉人肖像集

Montgolfier.

(英國) ジェナー (種痘法發明家)

Jenner.



(佛國) ラボアジェー (化學の泰斗)

世界百偉人肖像集

Lavoisier.

(佛國) ジャカール (紡績機發明者)

ホットー世界史

Jacquard.

米國　ペーター　ルーベンス

ルーベンス　畫

佛國　キヴィエー

英國　スチフンソン

●キヴィエー（佛國）

日本明治二年　西暦一七六九年　—一八三二年

佛國博物學者キヴィエーは其研究せる動物學に於て巴里市某の家庭に開きたりしが、科學の上に於て特に博物石化教師と興味を有したりき。當時彼は園の高級の助手となり、更に動物園の研究に從事せり。彼は佛國管理なる博物館の研究に貢獻せり。所謂大學の發展に貢獻せり。

●スチフンソン（英國）

日本安永元年　西暦一七五二年　—一八三〇年

ロバート、スチフンソンは蘇格蘭グラスゴーの人なり。エデンバラの高等學校に學ひ、後ロンドンに出でて、蒸汽車發明家ジョージ、スチフンソンの下に師事し、其技術を學ぶ。一八二七年協會トンネルを建設し、外に二十三個の有名なる橋梁を建て、數個の港を建設し、又ロンドンの人口を長ずること十七年、其技術の有名なる橋梁なり。

米國　ペーター　ルーベンス

英國　スチフンソン　畫

佛國　キヴィエー

英國　スチフンソン

（米國）

（佛國）

●キュビエー（佛國）

西暦一七六九年—一八三二年
日本明和六年—天保三年

佛國博物學者キュビエーは其研究せる動物學に於ては餘り大なる貢獻をなさざりしが、科學の上に驚く可き一大發展の道を開きたり。十八才して某家の家庭教師となり、此處にて海產動物の研究を始め、特に化石研究に興味を有したりき。當時彼は巴里市某博物館の高級助手となり、更に動物園の管理となりて潛心斯學の研究に從事せり。彼は佛國に於ける博物教育の發展に貢獻せる所頗る大にして、特に解剖學者の巨擘として、其動物學書は一八一六年公にせられ、永年の間斯學のオーソリテーとして尊ばれたり。彼の動物學の分類は單簡なりしと雖も、學界に一大進歩を與へ、特に其の組織統一によりて、動物學を科學として確固たる基礎の上にたゝしめたり。彼の頭腦は頗る明晰にして分析透徹せざれば滿足せず、不分明を惡み獨斷臆說に耳を借さゞりしを以て、總ての哲學的理論を排斥して、當時將に起らんとしつゝありし進化論には絶對的に反對し、ラマーク其他の論者を論難攻擊せり。彼は一八三二年巴里に於て急性中風に係り歿したりしが、ルイ、フィリップは彼を男爵に叙し、功績を不朽に傳へたり。

●スチブンソン（英國）

西暦一七七二年—一八五〇年
日本安永元年—嘉永三年

ロバート、スチブンソンは蘇格蘭グラスゴーの人なり。エデンバラのトーマス、スミスの下に働いてノーザーン燈臺協會の技手となり、一七九六年技師長となる。一八〇七年有名なるベルロック燈臺を建設し、外に二十三個の燈臺を建て、數個の港を造り、又架橋工事に大腕手を示せり。かく彼は建築技師として卓絶せる手腕を有せしも、特に彼の名聲を千載に不朽ならしめたるものは、其各種の發明、就中瀛罐車の發明にして、彼はこれが爲に精力を傾注し、幾回の失敗と、世人の嘲笑とを意とせず、グラスゴー、マンチエスター間に木造の規道を敷設して實驗を重ね、遂に此千古の大發明を成就せり。今日の交通の利器として世界の矩離を短縮せしめたりと稱せらるゝ瀛車は、實に彼によりて創造せられしなり。

●フルトン（米國）

西暦一七六五年—一八一五年
日本明和二年—文化二年

ロバート、フルトンは米國ペンシルバニア州の人なり。幼にして畫を學び、十八歳の時フィラデルフィアに赴きて揮毫を業とし、一七八六年英國に渡りて歷史畫の大家ベンジャミン、ウエストの知遇を受け、其家に寓するを許されて畫を學びしも、自ら畫に於て成効すべき器に非ざるを悟り、ウエストの許を去りてデボンシャイヤ公の水道工事に從事せり。爾來專ら器械學を修め、工夫修錬を事とし、農業及工業に關する機械を發明して特許を得たるもの數を知らず。後蒸汽力を以て船舶を運轉せしむるの可能なるべきを信じ、巴里に赴きて英國公使バーローの保護を受け、刻苦焦慮の末一汽艇を造りてセイヌ川に之が實驗を行ひ、後米國に歸りて更に大なる船を造り、衆人環視の間に之をハドソン河に浮かべ好成績を得たりしが、發明後間もなく死せり。これ實に本邦にありては露船屢北境を窺ひし時代の事にして、爾來一世紀を經ざる今日に於て世界の造船術は全く變化を來し、舊來の小帆船は僅に跡を存するのみ、數萬噸以上の大瀛船世界の各大洋に航行し、交通の至便竟に同日の談に非ず。今日の文明がフルトンの瀛船發明に負ふ所實に大なりといふべきなり。

●ビシアー（佛國）

西暦一七七一年—一八〇二年
日本明和八年—享和二年

ビシアーは佛國の人にして、解剖學を生理學及藥物學に應用せる有名なる大醫學者なり。一七九七年解剖學、外科學及實驗生理學の講座擔任を命せられ、次いで一八〇〇年オテルデューの國手となり、著名なる「死の生理的研究」なる一大論文を公表したり。又有名なる「普通解剖學」は又同年の出版にして近世解剖學の面目を一新し、其の基礎を確立したる大著述にて、氏の醫學界に於ける貢獻は實にこの裏に存せり。氏の體格は頗る强健偉大にして、其前額の發達持に著しく、彼の滾々として盡きざる學理の源泉は實に此の理想的に發達せる靈腦より溢出せしものなり。然れども、不幸にして天此の學界の偉人に齡を借さず、僅に三十一歳を以て逝けり。此の肖像は同年のものなるが、其年齡に比して老成の風采あるを認むべし。

●ワット（英國）

西暦一七三六年—一八一九年
日本元文元年—文政二年

ジェームス、ワットは蘇格蘭グリーノックに生る、幼時より事物の理を窮むる性向あり、羅針盤の製作及修繕を學び進歩著し、十八歳の時グラスゴーに行き、二十歳ロンドンに移り其業を研めて發明する所少からず、此間熱心に諸種の學術を修めたり。一七五六年グラスゴーにて大學の保護の下に其の業を開く、當時彼は啻に精錬なる機械製作家として信用を博したるのみならず、また自然科學者として尊敬せられたり。是より蒸汽機關の發明につき苦心を凝らすと共に、獨逸伊太利等の國語を學べり。一七六五年より六九年に至るまで乾燥機、印刷機其他の新奇なる器械を發明す。一七七四年マッシュー、バウルトンと共同して工場を起し、爾來二十餘年間苦心を積み研究を重ねて、遂に完全なる蒸汽機關を發明せり。かくて彼はロンドン及びエデンバラのローヤルソサエチーの會員となり。また巴里科學協會の會員たり。其著書甚多く、大英百科全書には蒸汽及び蒸汽機關の説明を執筆せり。ヒースフィールドに死す。後年彼の爲にウエストミニスターアベー、マンチエスター、グラスゴー及びブラハム等に銅像及紀念碑を建設せり。

●クック（英國）

西暦一七二八年—一七七九年
日本享保一三年—安永八年

ジェームス、クックはヨークシャイア州マルトンに生る。幼くして一商店の雇人となりしが、天性海を愛し、海員たらんと欲して傳手を求むる中、ホイツトビーなる船主ウオルカーと相識り其海員となれり。一七五五年英佛干戈を交ふるや軍艦イーグルに搭じて戰に從ひ、戰後英國に歸りて妻を娶る。一七六四年ハッフ、パリツサーのニューフアウンドランド大守となるや、クックも亦ニューフアウンドランド並びにラブラドルの海事を督せんが爲め彼處に赴任せり。一七六七年南洋探險隊の派遣せらるゝや海軍大尉として、エンデイーバー號に乗込み之に從ひ、其指導者として一七六九年まで探險を續け、ソサエチー島を發見し、ニュージーランド、ニューホルランド、ニューギネア等を經て英國に歸る。次で海軍大佐となり、翌年レゾリユーシヨン、アドヴエンチユアの二艦を率ひて再び南洋を探險す。百十八人の艦員中一人を失ひて一七七四年スピットヘッドに歸る。一七七六年太平、太西兩洋を通ずる北方航路の有無を確めんが爲リゾリユーション號を率ゐてプリマウスを發し北極に向て航せしが、サンドウイッチ島に於て土人の爲に殺されたり。

●ダーウィン（獨國）

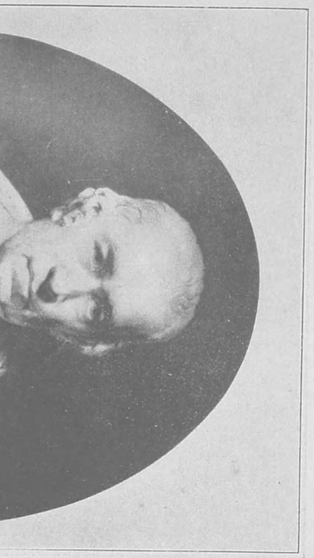
西暦一八〇九年—一八八二年
日本文化六年—明治一五年

ダーウィンは英國スレウスベリーの人にして其の祖父は有名なるエラスムスダーウィン氏なり。エヂンバラ大學及ケンブリヂ大學に學び、一八三一年南洋探險艦ビーグル號に搭乘して博物研究の途に上りぬ。彼は探險の爲に年月を費すこと五年、一八三六年英國に歸り、直に博物採集世界遇航の著を公にせり。後航海中に研究せる地質學、生物學等に關する説を公にし、珊瑚礁の構造及び分布の著あり、一八五九年に至り遂に有名なる種の根原の著あり、是より先ラマルク（一七四四—一八二九）は既に進化論の先鞭者たりしも、ダーウィン出て其の博大なる智識と豐多なる材料とを提供して、自然陶汰、卷者生存の理法を述べ、優者の進化發達すべきを説くに至り、一世の學者靡然として之に傾き、僅々廿年間にして、科學界は悉く進化論に席卷せられ、次でスペンサー、ワイスマン、パックスレー及ヘッケル等相次で出で、進化論はます〳〵思想界を風靡せり。ソレース教授は氏の生理學上の功績を以てニュートンの引力上の功績に等しと稱賛せり。七十三歳にて歿しウエストミンター寺の寺塋に葬られたり。

●アークライト（佛國）

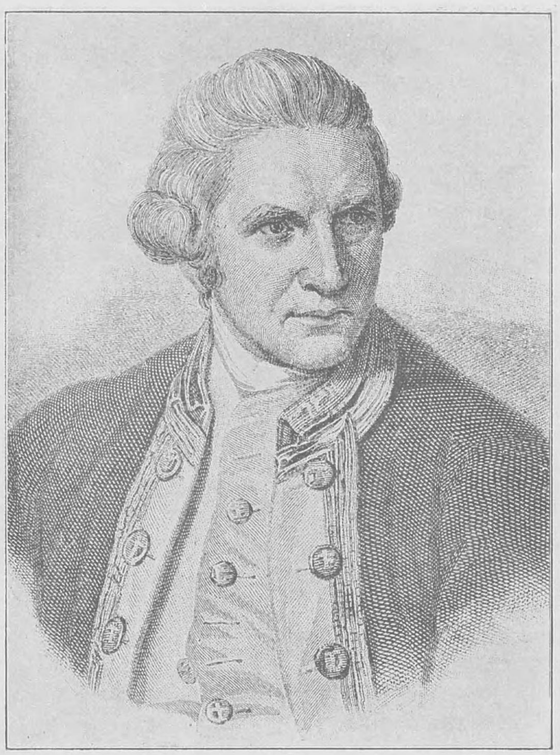
西暦一七三二年—一七九二年
日本享保一七年—寛政四年

アークライトは英國ランカシヤエヤー州プンストンに生る。始め理髪師となり、理髪器の發明によりて同業者を壓倒したりしが、一七六七年頃其職を廢して、精巧なる紡績機械を按出せんと苦心せり。一七六八年始めて第一の紡績機械を工風し、プレストンに於て試驗せしに、彼の理想通りの結果を奏せしかば漸次改良を加へて一七六九年に特許を得、同年ホックレーに工場を建設し始めは馬力を用ひたり。一七七一年彼は他の二名の資本家と共同してロンフォルド及びデルブシヤエヤーの兩地に工場を起し、水力を利用し一七九〇年にはノツテンガムの工場を起し、蒸汽機鑵を使用するに至れり。然るに彼の成功は、遂に同業者の反抗に遭ひ、暴徒の爲に一工場を破壞せられし事あり。晩年彼の富は非常なる巨額に達し、一七八六年にはナイトの爵に叙せられたり。彼は永年喘息の爲に苦しめられ、時に危險に遭遇し、或は一命を失ふの恐れありしが、其の不撓の活力と勤勉とは遂に病魔に打ち勝ちて、此重用なる機械を大成したり。一七九二年八月三日、クロンフォルドの家に於て永き眠りに就きしが、其數時間前まで依然業務を執りしといふ。



（英國）ワット

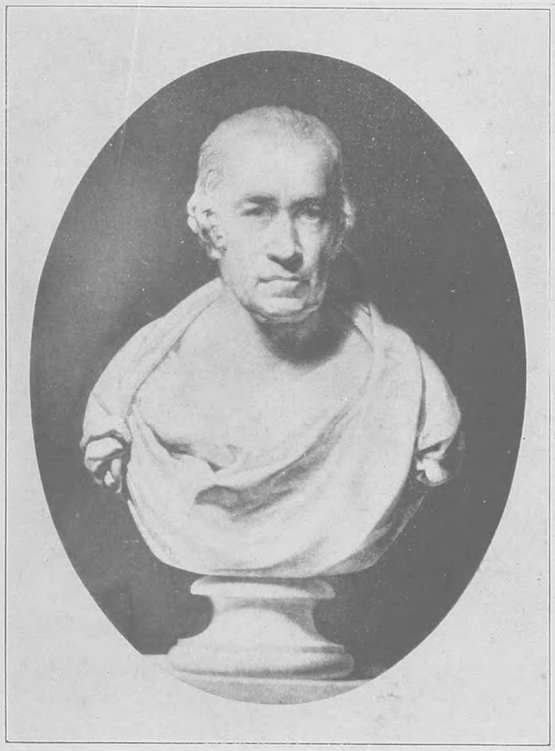
（英國）クック



(英國) クック (世界過航者)

オットー世界史

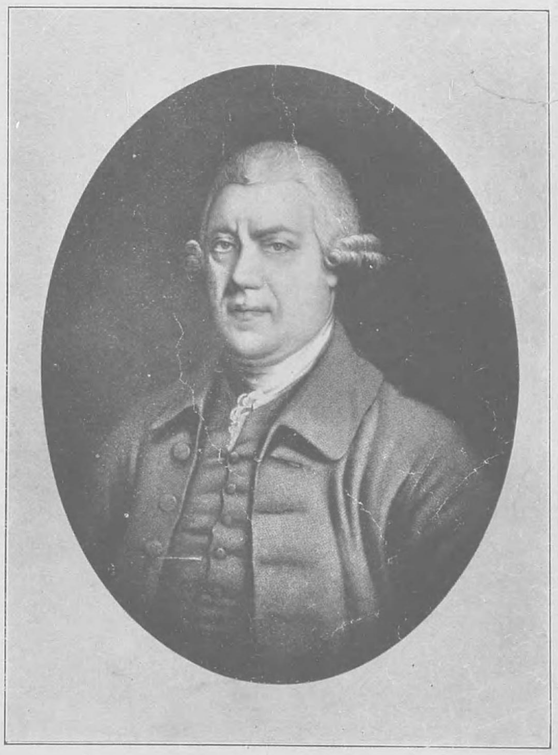
Cook.



(英國) ワット (蒸汽機關の發明家)

世界百偉人肖像集

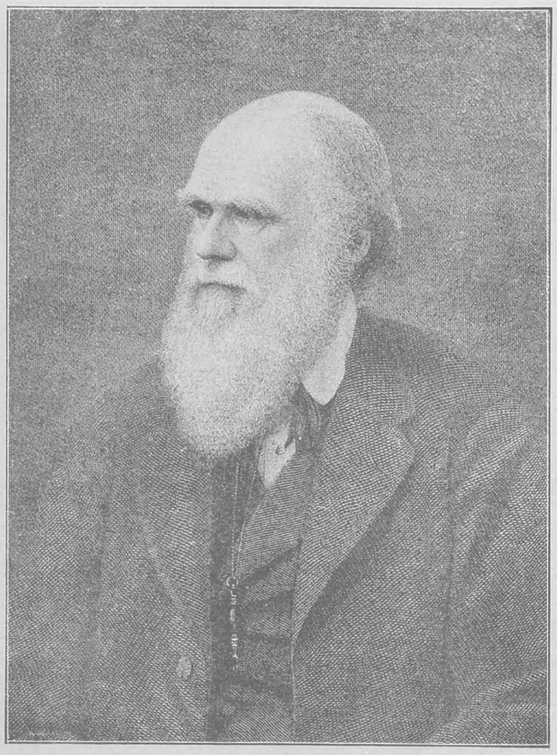
James Watt.



(英國) アークライト (紡績機械發明家)

世界百偉人肖像集

Arkwright.



(英國) ダーウィン (生物進化論大家)

オットー世界史

Darwin.

(醫學大家政論家)
(獨逸)
ウィルヒョウ

Virchow.

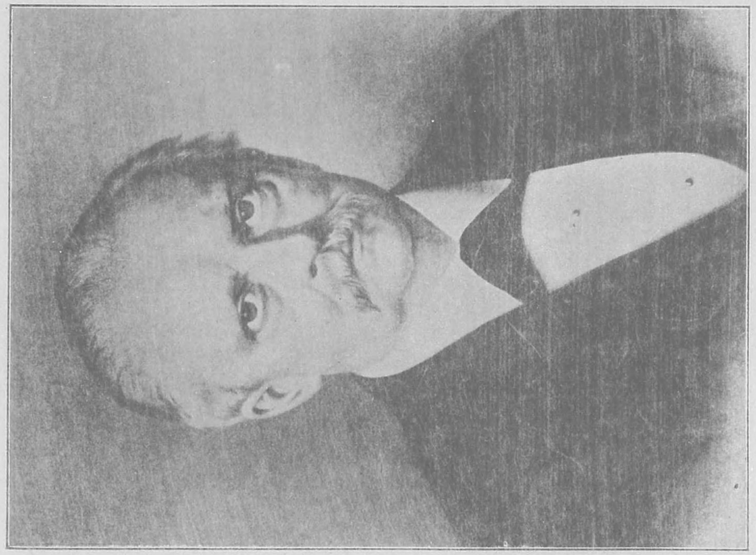
(亞非利加探險者)
(英國)
リビングストン

Livingstone.

(亞非利加探險者)
(英國)
スタンリー

Stanley.

(生物學大家)
(獨逸)
ヘルムホルツ



Hermholts.

女子大學教授　高島平三郎氏所藏

ニール世界史

●ウイルヒヨウ(獨逸)

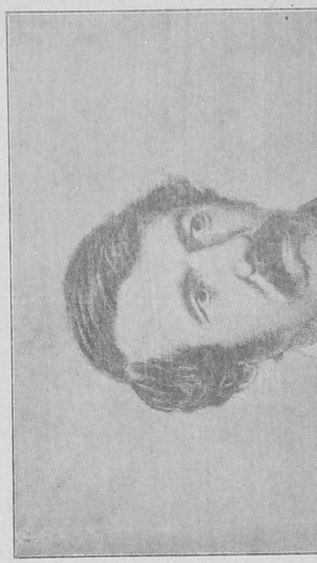
西暦一八二一年——年
日本文政四年——年

ルドルウ、ウイルヒヨウは獨逸國ポメレーニア州の人なり。伯林大學に學び俊秀の名あり、一八四七年大學助教授となり、一八四九年ウユルテンブルグ大學の教授に任せられ、一八五六年伯林大學に

●スタンリー(英國)

西暦一八四一年——年
日本天保一二年——年

最近の大探險家ヘンリー、モルトン、スタンレーは英國ウエールスの貧家に生る。始め名をジョン、ローランドと稱せしが米國ニューオルレアンにてスタンレーといへる商人に雇はれ其名を襲へり。爾來或は軍人となり、或は新聞記者となりしが、一八六七年紐育ヘラルドの通信員としてナビア卿と共にアビシニア遠征に從ひ、次で西班牙通信員となり、後スエズ運河の開鑿を見んが爲め埃及に赴き、それよりパレスチン、土耳其、波斯、印度を旅行せり。かくて亞弗利加探險を企て一八七一年ザン



リビングストン（英國）

ボヘルムホルツ（獨逸）

●ウイルヒヨウ（獨逸）

西暦一八二一年——年
日本文政四年——年

ルドルウ、ウイルヒヨウは獨逸國ポメレーニア州の人なり。伯林大學に學び俊秀の名あり、一八四七年大學助教授となり、一八四九年ウユルテンブルグ大學の教授に任ぜられ、一八五六年伯林大學に轉じ、病理學協會に長たり。數個の雜誌を出し、歐州に於ける病理學者の泰斗を以て目せらる。此他湖沼生活論、トロジャン及埃及の古墳より出せる穴居民族の頭骸等の論文を公にし、人類學及考古學に貢献するところ多大なりき。彼は一方に學者たると共に、又有數なる政論家にして一八六二年以來普魯西の議員たり、一八八〇年より同九三年まで帝國議會の議員たりき。

●リビングストン（英國）

西暦一八一三年——一八七三年
日本文政一〇年——明治六年

ダビッド、リビングストンは蘇格蘭の人なり。幼にしてグラスゴー市の一製綿工場に雇はれしが閑暇を得る毎に神學及醫學を研究し、遂に傳道師となり支那傳道の途に上らんとせしに、時恰も英清戰を交へし時なりしかば道を轉じて一八四〇年亞弗利加に航し、喜望峰に在ること數時にして内地に入り、ベチユアナス人と共に接み、其風俗を學び、基督教を傳へ病者を癒して大に土人の尊敬を受けたり。一八五一年マクロロ族の中に入り、其主なる都市を巡視し、更に廣大豊沃の地を發見し、幾多の困難を經て亞弗利加西岸の聖ポールに出で、再び蠻族の間を通過して南に歸り、一八五七年英國に歸れり。倫敦及巴里地學協會は各金牌を贈りて以て其功績を賞せり。同年其紀行を公にし、またヨット一隻を得て之に搭じ亞弗利加に至り、ザムベジー河を逆航してニヤツサ湖其他を發見す。一八六四年英國に歸り、翌年再び亞弗利加に赴き、ダンガニーカ湖を探り、爾來人跡至らざる深林湖沼に入り蠻族を教化し、幾多の發見をなして地理學上に貢献し、學術界を益せし事大なりき。當時本邦に在ては尚幕末及維新の擾亂の際なりき。

●スタンリー（英國）

西暦一八四一年——年
日本天保一二年——年

最近の大探檢家ヘンリー、モルトン、スタンレーは英國ウエールスの貧家に生る。始め名をジョン、ローランドと稱せしが米國ニユーオルレアンにてスタンレーといへる商人に雇はれ其名を襲へり。爾來或は軍人となり、或は新聞記者となりしが、一八六七年紐育ヘラルドの通信員としてナビア卿と共にアビシニア遠征に從ひ、次で西班牙通信員となり、後スエズ運河の開鑿を見んが爲め埃及に赴き、それよりパレスチン、土耳其、波斯、印度を旅行せり。かくて亞弗利加探險を企て一八七一年ザンジバルより亞弗利加内地に進み、十一月リヴイングストンに邂逅し、タンガニー湖とナイル河との關聯せざるを確め、翌年五月海岸に出で英國に歸れり。一八七四年再び亞弗利加に赴きバガモヨより、ヴイクトリアニヤンザに至りウガンダの王と交を訂し、ローラバ、ニヤングーを經、コンゴー自由國を過りて海岸に出づ、一八八四年より翌年に至る間英米二國に於て其結果を演說せり。一八八六年探險隊を卒ゐてアルベルトニヤンザに至る。王立地理學協會は彼に金牌を贈り、オックスフォード、ケムブリッチ、エデンバラ、ダルハムの各大學は學位を贈りて其効績を頌せり。一八九一年及二年は米國及濠州に於て探險の結果を演說せり。

●ヘルムホルツ（獨逸）

西暦一八二一年——一八九一年
日本文政四年——明治二四年

生理學及醫學に於て、獨逸の學者間に光彩を放ちしものはヘルムホルツなり。一八二一年に生れ、深く斯學の研鑽を積み、視管及聽管の研究に於ては、最著名なりき。一八四三年ポツダムに於て軍醫となり、后アルトのアガデミーにて解剖學を教授す、一八四九年より五五年までケーニヒスブルグ大學にて生理學の教授となり、次で一八五八年まで。ボーン大學にて生理學及醫學を教授し、同五八年より七一年に至るまで、ハイデルベルグ大學の生理學教授を勤め、終に、ベルリン大學に移り、生理學の講註を擔任して、斯學の奉斗と仰がれたり。一八五一年に發見したるオプタルモスコープは、彼の功績の最顯著なるものにして、其他に多く有益なる著述をなし、今日に至るも學者の信頼する所たり。一八九一年十一月八日ベルリンに於て死去す。

●釋迦（印度）

西暦紀元前約四九二年—四一三年
日本崇神帝一九年—孝昭帝六三年

佛陀は佛教の開祖にして印度思想の改革者なり。喬呑摩或は瞿曇又は悉達とも云ふ。父はスドダナ王（淨飯王）といひ釋迦族の一酋長にして、迦毘羅城（現今のゴラク、プール）に住せり。佛陀は王家の一子として父王の寵愛特に深し。妃耶輸陀羅を納れて和氣藹藹の裡に生長せしが生老衰死の人生問題に懊惱し、年二九にして王位を棄て、妻子珍寶を顧みず、密に宮中を脱出して王舍城側の一山に隱れ、道をバカバー、アララ、ウドラガ等に求めしも、遂に滿足するを得ざりしかば更にウルブラの林中に隱れ、苦行六年自ら大悟徹底する所あり是に於て出でゝ四方の民を教化する事に力め、四諦の道を以て大衆に說きしかば、歸依するもの潮の如く、教化する事四十五年、七十五歳にして涅槃に入れり。門弟には佛門の長老迦葉、波阿難、舍利佛目連、阿那律等ありて師の說を祖述し佛教をして益々隆興せしめたりき。佛陀の年代に關しては諸說多く、或は紀元前五六〇年より四八〇年なりと云ふものありて相一致せず。兎に角に支那の孔子の時代と同時代にして儒佛時を同ふして起れるは奇なりと云ふべし。之の肖像はゼームスフェルガッソン氏の古像によれる者なり。

●モーゼ（イスラエル）

西暦紀元前約一三〇〇年頃
日本神武紀元前七〇〇年頃

其年代は漠として詳に知り難しと雖、略紀元前一三〇〇年代といふを眞に近しとす。埃及に移住せる希伯來人の子なり。當時埃及王パロ希伯來人の繁榮を妬み虐遇至らざるなかりしが、モーゼ王に謁して希伯來人の國外に去るを許さんことを要請し、自ら國民を率ひて亞剌比亞のシナイ半島に逃れ、曠野を飄浪すること四十年、神勅に托して律法を授く。所謂モーゼの律法是れなり。爾來モーゼは國民の宗教的特質を作るに務め、百方之れを訓練し、ヨルダン河の東岸に至りしが、病で復起つべからざるを知り、將軍ヨシユアを擧げて國民を統率せしめ、パレスチンを攻略せしめたり。其政略豪邁古代曆史中稀に見る所。其創始せる猶太教は今尙多數猶太人の心靈を統御しつゝあり。舊約聖書中モーゼの五書と稱するものあり。創世紀、出埃及紀、利未紀、民數紀、畧申命記即是なり。モーゼの歷史的研究は、近年漸く稍々正確となり、其の埃及逃遁の事實に付き、從來の傳說を否定するに至れり。

●キリスト（猶太）

西暦紀元前四年—紀元二九年
日本垂仁帝二六年—仝五八年

西洋紀元は基督の降誕を以て其第一年となすと雖、歷史家の說く所は一般に紀元前四年を以て基督の降誕年となすに一致す。其父ヨゼフはダビデ王の裔にして猶太の寒村ナザレの工匠なり。基督はベツレヘムに於て生る。其降誕に當て奇瑞あり、王ヘロデ之を殺さんとす。ヨゼフ嬰兒を携へて埃及に逃れ王の死するに及で歸る。長ずるに及で穎智あり、當時猶太教の弊竇に對して疑を抱き、修養を積むこと幾年三十歳にして蹶起して道を宣べ、パレスチン全地を周遊す。其說くところ學者の如くならずして權威あり、特に其山上の垂訓は古今無比の訓言なりと稱せらる。道を傳ふること三年、民心漸く之に歸服するや、司ピラト以て國を紊るものなりとし、言を構へて之を捕へ、ゴルゴダの丘に於て十字架上に磔殺す。されど其弟子等皆勇敢にて道を傳へ、百折不撓にして師の遺訓を宣傳せしかば、其生命は長く萬世に亘りて涸れず、遂に歐米幾億の人心を支配するに至れり。

●ゾーロスター（波斯）

西暦紀元前約一〇〇〇年頃
日本神武紀元前四〇〇〇年頃

古代波斯の人心を支配したる有力なる宗教ゾーロスター教の始祖なり。其年代は詳ならずと雖、略紀元前一千年といふを以て正確に近しとす。當時波斯は東洋諸邦中最强盛なる一大帝國にして四鄰皆其配下に屬せしが、多神教盛んに行はれ、風俗頹廢せり。ゾーロスターその靈智英邁の資を以て深くこれが救拯の必要なるを感じ、二元的一神教を創始し、イラン古代の明主ジエムシッドの治世を擧げて社會の理想とし、熱心其道を傳へしが、當時無智蠻的なる宗教の中にありて最も學理的にはた道德的なる教說を宣べしを以て、上下一代の人心翕然として之に歸し、長く東邦人の道德的基礎を成せり。その教說の概要を擧ぐれば宇宙には光明と暗黑との對立せるあり、光明の神アウラマズダと暗黑の神アーリマンは太古以來相爭ひ、將來に於て光明の神勝利を得べしといふにあり。

印度（釋迦）

イスラエル（モーゼ）

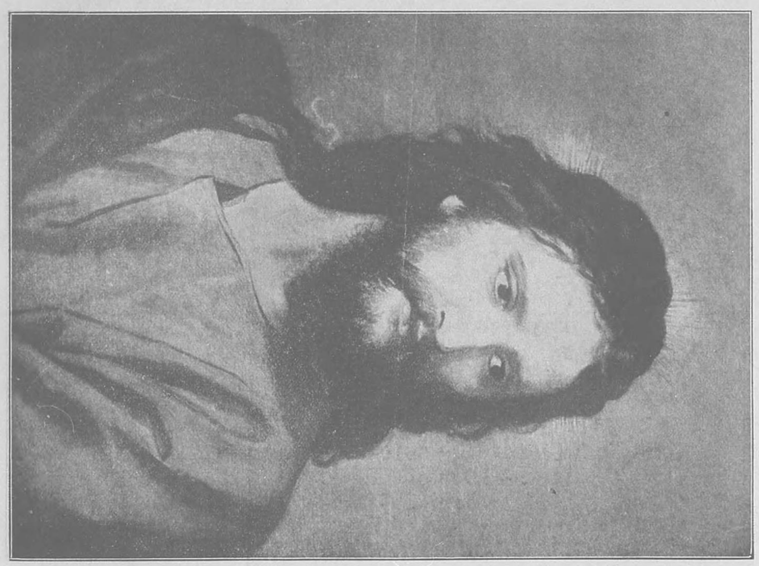
パレスチン全地を周遊す其說くところ學者の如くならずして權威あり、特に其山上の垂訓は古今無比の訓言なりと稱せらる。道を傳ふること三年、民心漸く之に歸服するや、司ピラト以て國を紊るものなりとし、言を構へて之を捕へ、ゴルゴダの丘に於て十字架上に磔殺すされど其弟子等皆勇敢にて道を傳へ、百折不撓にして師の遺訓を宣傳せしかば、其生命は長く萬世に亘りて涸れず、遂に歐米幾億の人心を支配するに至れり。

原圖フエルナツツリン氏所藏世界偉人肖像集

Buddha.

印度釋伽（佛教々祖）

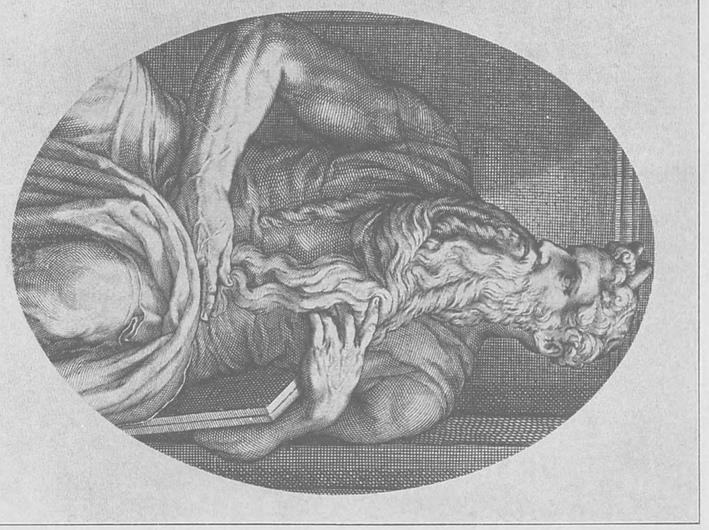
ミルアンセロー作世界偉人肖像集



キプマン筆世界偉人肖像集

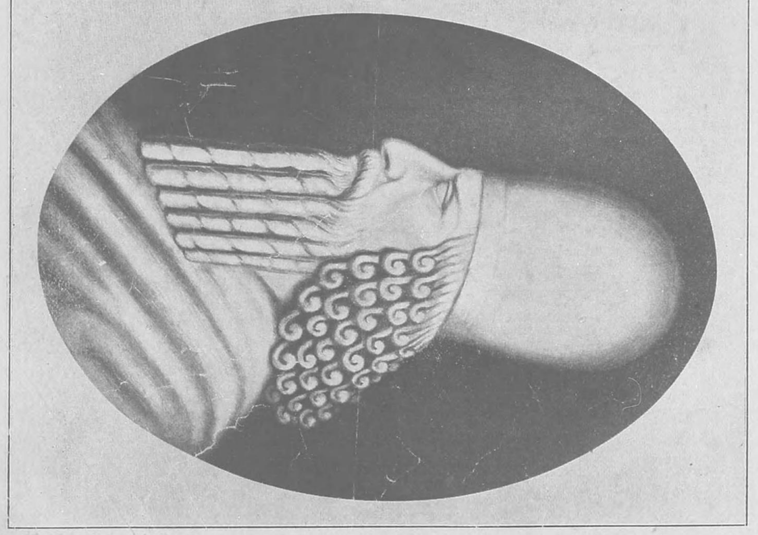
Christ.

猶太キリスト（耶蘇教々祖）



Moses.

イスラエル人モーゼ（猶太教々祖）

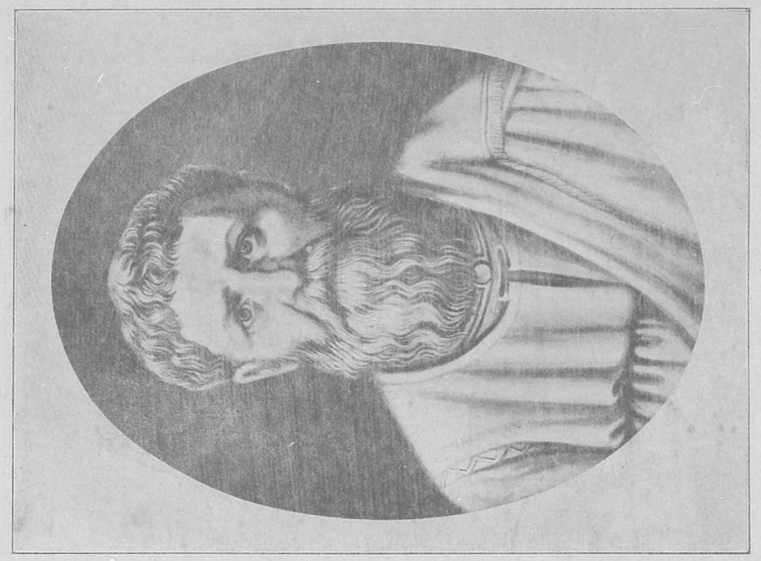


波斯サバン朝の古彫より描寫世界偉人肖像集

Zoroaster.

波斯ゾーロスター（波斯教々祖）

然し古代の明主ジヤンヌの治世を擧げて社會の理想とし、熱心其道を傳へしが、當時無智蠻的なる宗教の中にありて最も學理的にはた道德的なる教說を宣べしを以て、上下一代の人心翕然として之に歸し、長く東邦人の道德的基礎を成せり。その教說の概要を擧ぐれば宇宙には光明と暗黑との對立せるあり、光明の神アウラマズダと暗黑の神アーリマンは太古以來相爭ひ、將來に於て光明の神勝利を得べしといふにあり。



St. Augustinus.

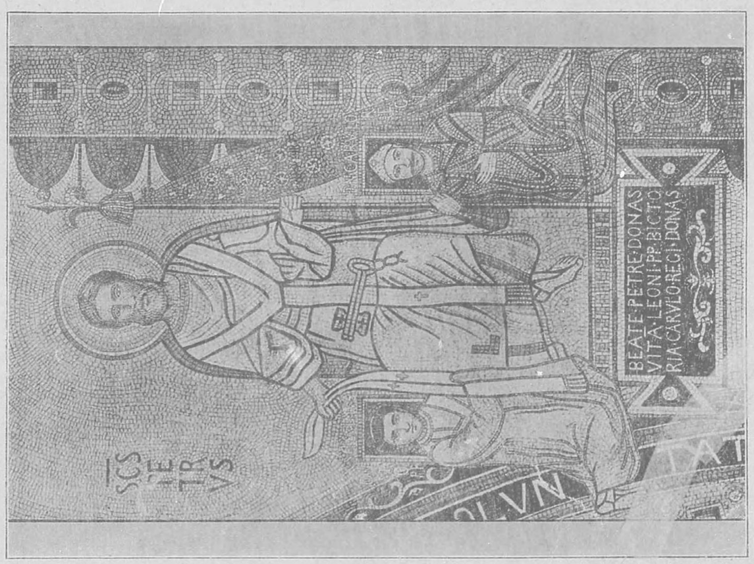
世界百傑人肖像集

(羅馬)　セント・オーガスツヌス　(セント・オーガスチン)　(神學者)

St. Paul.

世界百傑人肖像集

(小亞細亞)　セント・ポール　(使徒)



St. Petaro.

ヵッター世界史

(羅馬)　セント・ペテロ　(使徒)

Muhammed. I.

世界百傑人肖像集

(亞剌比亞)　ハムメツト一世　(モハメツト)　(回教々祖)

●セントオーガスツヌス（伊太利）

西暦三五四年—四三〇年
日本仁德帝四二年—反正帝一九年

亞非利加ヌミデアのタガステに生る若くして當時學術の中心たりしカルタゴに赴き、修辭學を學びしがこゝにて放逸的生活を送れり、それより漸く煩悶に陷り始めてシセロの書を讀み大に哲學を研めんと欲し、次でマニ教派に屬し、カルタゴ、羅

●セント、ペテロ（伊太利）

西暦八〇〇年頃
日本延暦二〇年頃

羅馬法王レオ三世紀元七九五—八一六年在法位）多くの貴族を招きし時其宿泊所に當んが爲、サンペテロ大伽藍の傍及ラテラン宮の傍に二宇の旅館を營めり、ラテラン宮の傍に建てられたる者は、非常に宏大にして、內部の裝飾はモザイック細工を以てし、極めて華麗なり、其の篏細工裝飾中に、セントペテロ、が法王レオ三世に長袈裟を、カロロ大帝に羅馬の國旗を與ふるの圖樣あり、サンペテロ

ー ポ ル ス ト (聖羅馬人)

ー ト ク ス ス (聖羅馬人)

●セントオーガス、ツヌス（伊太利）

西暦三五四年—四三〇年
日本仁德帝四二年—反正帝一九年

亞非利加ヌミヂアのタガステに生る若くして當時學術の中心たりしカルタゴに赴き、修辭學を學びしがこゝにて放逸的生活を送れり。それより漸く煩悶に陷り始めてシセロの書を讀み大に哲學を研めんと欲し、次でマニ教派に屬し、カルタゴ、羅馬、ミラノ等に於て修辭學の教師として成功を博したるも、尚心裏の平安を求めて渇望し、新プラトン派に屬せしが一日國家の顯官が榮職を捨てゝ僧衣を着せることを聞き深く感激し、泣いて神に祈りたるが、全く身を神に獻ぐべく決心し、僧正アムブロシウスより洗禮を受けたり。時に年三十三歳。かくて彼は僧院に入りて勤行せしが、三九五年擧げられてヒッポの監督となり、四三〇年に死せり。其著作甚多きが中に、「神國論」及び「懺悔錄」最名あり。特に懺悔錄は世界各國の語に飜譯せられ基督教徒必讀の書と稱せらる。

●セント、ペテロ（伊太利）

西暦八〇〇年頃
日本延暦二〇年頃

羅馬法王レオ三世（紀元七九五—八一六年在法位）多くの貴族を招きし時其宿泊所に當んが爲、サンペテロ大伽藍の傍及ラテラン宮の傍に二宇の旅館を營めり。ラテラン宮の傍に建てられたる者は、非常に宏大にして、内部の裝飾はモザイック細工を以てし、極めて華麗なり。其の篏細工裝飾中に、セントペテロ、が法王レオ三世に長袈裟を、カロロ大帝に羅馬の國旗を與ふるの圖樣あり。サンペテロは、耶蘇十二使徒の一人にして、布教の爲に羅馬に赴き紀元六四年此の地に殉教せり。カロロ大帝は即ちフランク國王ピピンの子にして、反覆常なきロンバルヂアを攻めて、法王レオ三世を援け、廣大なる地を占領して、八〇〇年法王レオ三世より西羅馬皇帝の金冠を戴き、一時西羅馬を再興せし偉人なり。レオ三世亦當時の法王にして、皇帝と兩々相結んで宗教の爲に盡瘁せし人なり圖に示せる所は、皇帝は國旗を以て國家を經營し、法王は宗教を以て人心を統一せるを寓せしならん。圖の中央は即ちサンペテロにして、右は皇帝左はレオ三世也。其の下に寫出せる羅甸文字は「セントペテロは法王レオに生命を、復皇帝カロロに戰勝を附與す」の意なり。

●セントポール（亞細亞土耳古）

西暦九年頃—六四年頃
日本垂仁帝三八年頃—同九三年頃

セントポールは基督教史中の最大英傑なり。ポールは微つせば基督教も今日の盛を見ざりしなるべく、或は不幸にして廢滅に歸せしやも計られざるべし。其生死とも年月詳ならず。始め名をサウルと呼び愛國者を以て自ら任じ至る所に基督の使徒を迫害し、聖ステパノの殉教せる時の如きは自ら迫害者の指揮をなせし程なりしが、一日飜然悟る所あり、前非を悔ひて曠野に逃れ祈禱勤行を積み、基督教徒となり、其英才と堅信は忽ち使徒として衆人の推重を受くるに至れり。之れよりポールは頑迷なる教徒の惑を解き、基督教の猶太人に限るべからざるものなること、人は信仰によりて義とせらるゝものなることを明かにし、歐羅巴傳道の路を開き、あらゆる迫害を排して傳道と教會の完成に努め、終に基督教今日の盛大の基を成せり。新約聖書中パウルの所作と稱するもの、使徒行傳、羅馬書、哥林多書、加拉太書、腓利比書、哥羅西書、テサロニケ書、テモテ書、テトス書、ピレモン書、希伯來書、加拉太書の三書は神學上多大の價値あるものなり。

●ムハメット（モハメット）（亞剌比亞）

西暦五七〇年—六三二年
日本欽明帝三〇年—舒明帝四年

回々教の開祖ムハメットは紅海の沿岸メッカに生る。年尚壯くして富豪の家を繼ぎ商を以て業とせしが曠漠たるアラビアの自然の中に自ら其自覺を養ひ、また猶太及耶蘇の宗教を研め、四十歳の時ヒラの洞窟入りて冥思し、自ら神の豫言者を以て任じ、一神教を創始して之をイスラム教といひ先づ其妻を信せしめ次で其家僕を信せしめたるが、迫害漸く起るに及び、メッカ府を去りてメジナに傳教の基を置き、宗徒を率ゐてメッカ府を攻め之を陷れ、偶像を破壞し、爾來至る所に異教徒と戰ひ遂にアラビア全國民をしてイスラム教を信奉せしめ、自ら政教の大權を掌握したり。ムハーメット更に進んで世界を統一し、全人類をしてイスラム教を奉せしめんとせしも、其素志を達せずして紀元六三二年溘焉として死せり。我朝にありては百濟の使來朝し、佛教漸く各地に入らんとするの時代なり。

●エラスムス（和蘭）

西暦一四六七年—一五三六年
日本應仁元年—天文五年

デシデリウス、エラスムスは和蘭國ロッテルダムに生る幼にしてブウアルゾウの學校に入り次で寺院に入りたるが、當時の寺院並に僧侶の狀態に嫌焉たるものあり、寺院を脱して巴里大學に入り神學及文學を攻めて造詣する所深く、業終りて英國、佛國、獨逸及伊太利の各地を漫遊し、又專心著述に從事せり。當時恰もルーテルが宗教改革の際なりしが、エラスムスは之に同意を表し、改革の事業には直接干與せざりしも、其著作は之が成就に對して著しく力ありたり。特に一五一二年の出版に係る「白痴の賞讃及び一五一八年の出版に係る「兒童の說話はサルボンヌ大學之を排斥し、佛國にては其出版を禁じ、西班牙にては命じて燒棄せしめ、羅馬法皇は之が繙讀を禁ぜし程にして、前者は主として神學者を後者は修道者、寺院生活、巡禮、斷食を罵り、熱罵冷嘲骨に徹す。

●マーテン、ルーテル（獨逸）

西暦一四八三年—一五四五年
日本文明一五年—天文一四年

マルチン、ルーテルは獨逸邦聯ザクセン國のアイスレーベンに生る。一五〇一年エルフルト大學に入りしが當時歐州の基督教は全く其精神を失墜し、聖書の頒布は全く禁ぜられて聖書を讀むものすらこれ無かりき。時にルーテルは大學附屬書籍館に於て拉丁語の聖書を發見し之を讀みて大に得る所あり、業を卒ふるの後教師となり又僧侶となりしが、一五〇八年ウイッテンベルヒ大學の哲學教授となり專心聖書を研究し、次で神學教授に擧げられたり。爾來漸く基督教の眞髓を明にすると共に羅馬教の腐敗を憤慨せしが、一五一七年法王内帑を增さんが爲に赦罪劵を發行するや、蹶然起て其悖理を痛擊し、九十五條より成る宣言書をウイテンベルヒの城頭に揭げて法王を彈劾し、爾來渺たる一教授を以てして羅馬の教權と歐洲各國の主權に抗して危難の身に迫ること幾回なるを知らざりしも、敢て撓まず先づ聖書を飜譯頒布して基督の眞福を宣べ傳へ、遂に宗教改革の大業を成就して歐洲文明の進歩を促成したり。一五四六年二月十七日アイスレーベンの客舍に逝き、遺骸をウイッテンベルヒに葬る。

●セント、ベルナード（佛國）

西暦一〇九一年—一一五三年
日本寛治五年—仁平三年

羅馬教會の高僧ベルナルドは佛國フォンテーヌに生る。若くして當時學術の中心と稱せられし巴里大學に入り修養最努むる所あり、二十二歳の時學友三十餘人を勸めて共に宗教に身を委ねんことを決心せしめ、ヂジョンに近きフランシス派の僧院に身を投せりかくて極端なる禁欲主義を以て自己の標榜とし、着々宗教界に地歩を占め、遂に英佛二國の宮廷に其勢力を擅にし、其力によりて法王インノーセント二世を位に即かしめぬ。一一四六年ムハメット教徒の侵略益甚しくして、聖都ジエルサレム刼掠せらるゝや、自ら佛英其他の國王を說き、十字軍を組織せしめたり。一一七四年アレキサンダー三世之を聖徒に列せり。

●セント、フランシス（伊太利）

西暦一一八二年—一二二八年
日本壽永元年—安貞二年

聖僧フランシスは伊太利アッシス、ウムブリアに生る。商人ベルナルヂオの子なり。父は之を商人たらしめんと欲し、佛語を學ばしめしに上達著しく、爲にフランシスなる暱名を得たり。二十四歳の時志を決して宗教に身を捧げ、僧院に入りて修養し、遂にフランシスカン派を創始し、何物も自己の所有物として私せざること、自から働きて食を得ること、全世界を巡りて教を傳ふること等を以て其の綱領とし、一二一九年自から此綱領を實行せんが爲、埃及及びシリアに赴きて傳教せり。傳說にればば彼は夢中に天使來りて彼を十字架に架したるを見、其時痛を感じ、其肉體に釘跡を存したりといふ。

（和蘭）エラスムス

（佛國）セントベルナード

（佛國）セント、バルナード（十字軍を起せし人）

世界百偉人肖像集

Saint Bernard.

（和蘭）エラスムス（人道主義者、改革者）

ホルバイン筆世界百偉人肖像集

Erusmus.

（伊太利）セント、フランシス（フランシスカン派の開祖）

世界百偉人肖像集

St, Francis of Assisi.

（獨逸）マーテン、ルーテル（獨逸の宗教改革者）

クラナハ筆世界百偉人肖像集

Luther.

ゥィングリ（瑞西）

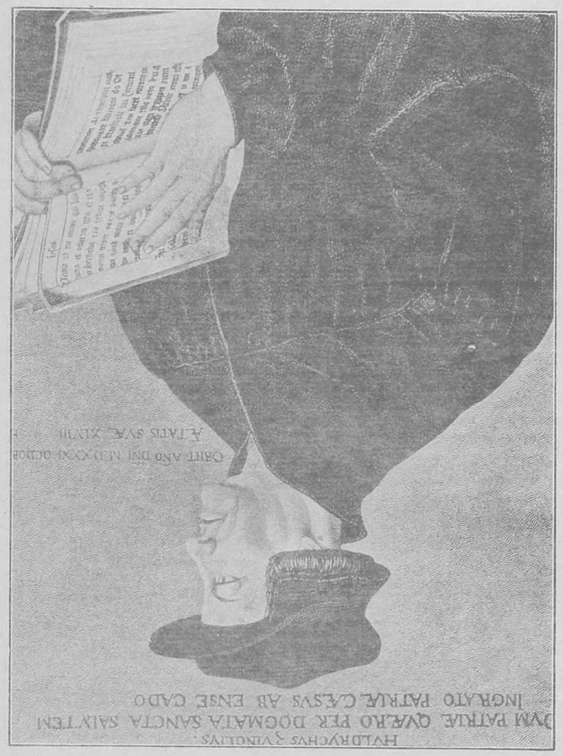
（基督教改革者の肖像）

Zwingli.

西班牙（ロヨラ）

Calvin.

英國（ウェスレー）



Loyola.

Wesley.

●ロヨラ（西班牙）

西暦一四九一年—一五五六年
日本延德三年—弘治二年

イグナチウス、ロヨラは西班牙の貴族に生る。幼くして兵役に服したりしが、パンプレナ包圍戰爭の際脚部に創傷を蒙り、甚重かりしかば、聖母マリアに祈りて救を求め、若し創癒えなばエルサレムに巡禮し、且つ終生を敎の爲めに捧げんと誓へり。かくて傷癒えしかばエルサレムに赴き、後バルセロナにて拉丁語を學びたる後、敎を傳へ、信徒日に加はりしかば、公安を害するものなりとして囚へられしも、其法王に反せざる團體なること判明して法王パウエル三世より公然布敎の免許を得たり。ロヨラ是より益發奮して布敎に力め、其特殊なる宗敎組織によりて益盛大を致したり、人之を呼んでジエスヰットといふ。ロヨラの敎理は正しき敎理なりしも、後世のジエスヰット徒之を誤りていたく弊害を生せり。

●ツウイングリ（瑞典）

西暦一四八四年—一五三一年
日本文明一六年—享祿四年

瑞西の宗敎改革主唱者ツウィングリはサンゴール州ウイルドハウスに生る。始めベルン及ウィーンに學び後バーゼルに於て神學を研究し、牧師としてグララスに赴きぬ。氏がバーゼルに滯在中エラスムス和蘭人にしてユマニストの首領と相識り、其感化を受けたり。後希臘語を修めて特にセントポールの書を研究し造詣すること淺からず。一五一八年免罪符賣却の不當を論じ經典の唯一の法典たるを唱へ、次でチューリヒ寺院の牧師となり、大に時勢に適切なる演說を試みたり。氏は其主義に於てルーテルに贊成せしが、一五二九年マルブルグの會議に於てルーテルの擁護者メランヒトンと議論を戰はし、兩者の意見相一致すること能はず、因て孤立して熱心に國內布敎に從事し、チューリヒ及びベルン等の諸州は深く其敎を信じたるも、シウィツ、ウンテルワルデン等は依然として舊敎を奉じ結局兩敎間に激烈なる攻爭を起し、一五三一年カペルの戰に於てツウィングリは不幸敗死し、後兩敎徒は和議を締結して各州に信敎の自由を許したり。氏が最後の一言は其面目を躍如たらしむるものあり。曰く「彼等は肉體を殺すを得べし。然れども精神は決して彼等の爲めに殺されざるべし」と。

●ウエスレー（英國）

西暦一七〇三年—一七九一年
日本元祿一六年—寛政三年

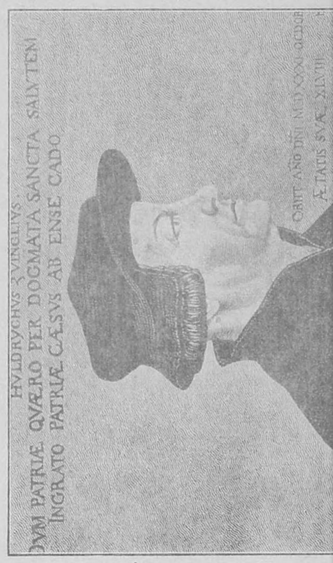
ジョン、ウエスレーは英國リンコルンシヤエッフウオースに生る。牧師サムエル、ウエスレーの子なり、始めオックスフォード大學クライストチャーチカレッヂに學び一七二六年リンコルン、カレッヂに學ぶ。宗敎を信ずる最篤く一七三〇年其學友の同志と共に一の宗敎團體を作り、囚徒を訪ひ、病者を憐み、斷食、聖餐等の儀式を重じ、メソヂストなる名を得たり。一七三五年米國ジョルジア州に赴きて土人に道を傳ふること二年にして歸英し、大道說敎を行ひ、多數の信徒を得たりき。英國敎會は之を鄙しみて排斥し、其會堂に說敎するを許さざりしかば、漸次ロンドン、ブリストル等の各地に會堂を設け、英蘭、蘇格蘭、愛蘭及ウエールスの各地方を巡敎して益勢力を擴張し、遂にメソヂスト敎會の基礎を成せり。ウエスレー精力絕倫にして常に活動を斷たず、終生閑暇あることなかりき、ロンドンに死す。

●カルビン（ジエネバ）

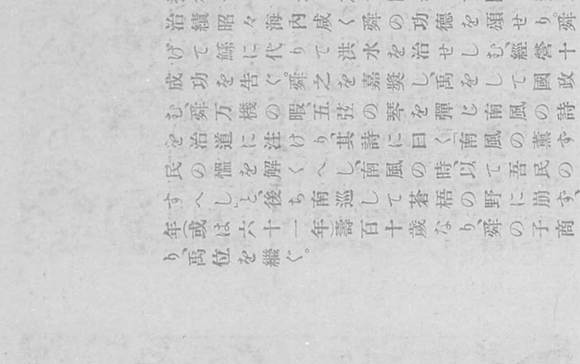
西暦一五〇九年—一五六四年
日本永六正年—永祿六年

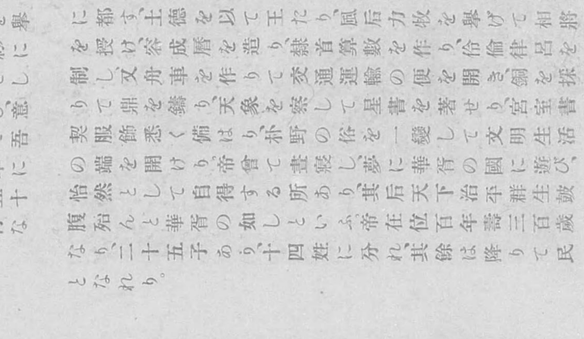
カルビンは佛國の一州ピタルデーのノヨンに生る。初め羅馬加特力敎の敎育を受け、十二歲にして牧師に任せられ、後ラマルセの大學に入り、卒業の後、僧侶となり、神學の研究を始め、希臘語の聖書を讀み、遂に新敎徒となりて巴里に赴き、新宗敎の擴張を謀らんとせしが、市民の迫害頗る酷烈なりしを以て走りて、バーゼルに赴き、次でゼネバに遊びぬ。一五四一年再びゼネバに現はれ改革說を唱導したりしかば、ゼネバは宗敎改革の中心となり、それより諸國に傳播して佛國、和蘭、蘇國等を風靡したり。然るに彼の後年に西班牙の一醫ゼネバを通過せしに、カルビンは市民敎唆して之を捕へ、宗敎裁判によりて之を酷刑に處せしは其歷史上一大汚點を留めしものなりといふ。彼は一五六四年五月廿四日歿せり。其說はルーテルよりも一層進みし改革說にして、新敎徒の勢力は爲に益勃興し、歐羅巴全部に波及したり。我國に於て織田信長が南蠻寺を建立せしはカルビンの歿後十年に當る。此肖像はゼネバの油繪に原き、ミユーレル氏の彫刻せし者なり。

グスタフ（瑞西）



ゴルカン（ジエネバ）

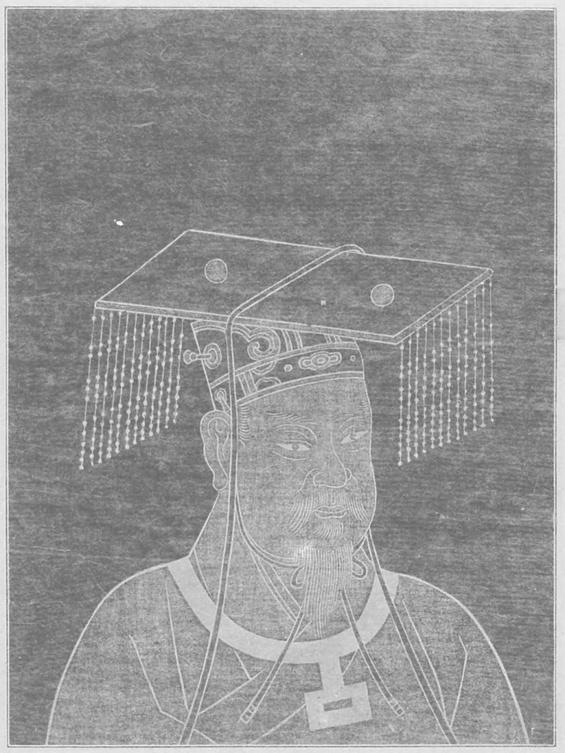




舜帝

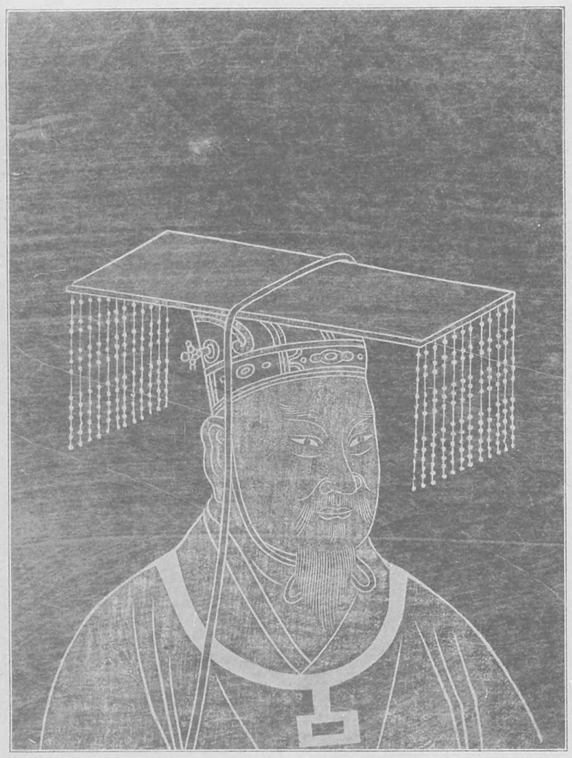
西暦紀元前二二〇〇年頃

帝舜は冀州の人なり、其先は黄帝の子昌意の後裔にして、其父は瞽瞍と稱し、其母は早死せり、瞽瞍は盲人にして、其子象は傲慢なりしかば、舜は幼時より父母の愛を失ひ、象の爲に屢〻殺されんとせしも、天の助けにて、難を免れ、後ち象と和して、其父母に孝養を盡せり、舜の人となりは、仁慈にして、人を愛し、物を愛し



堯帝（聖人）

歷代君臣圖像



舜帝（聖人）

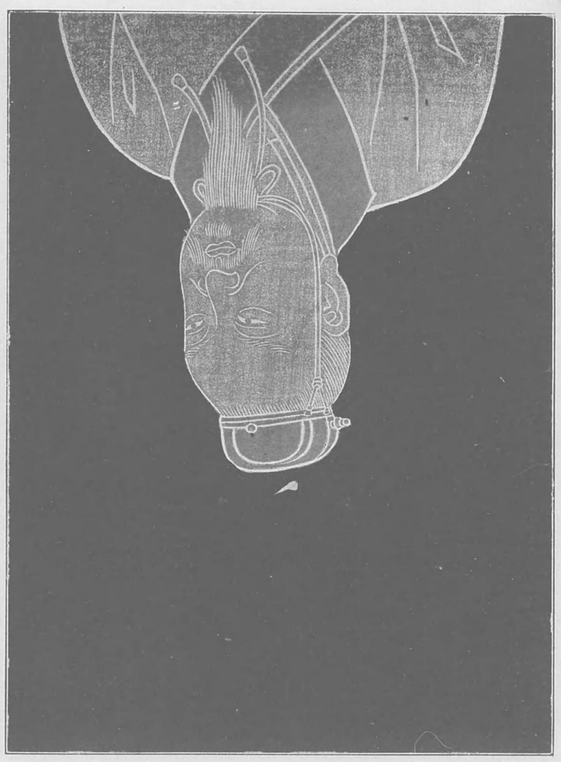
歷代君臣圖像

堯帝（聖人）

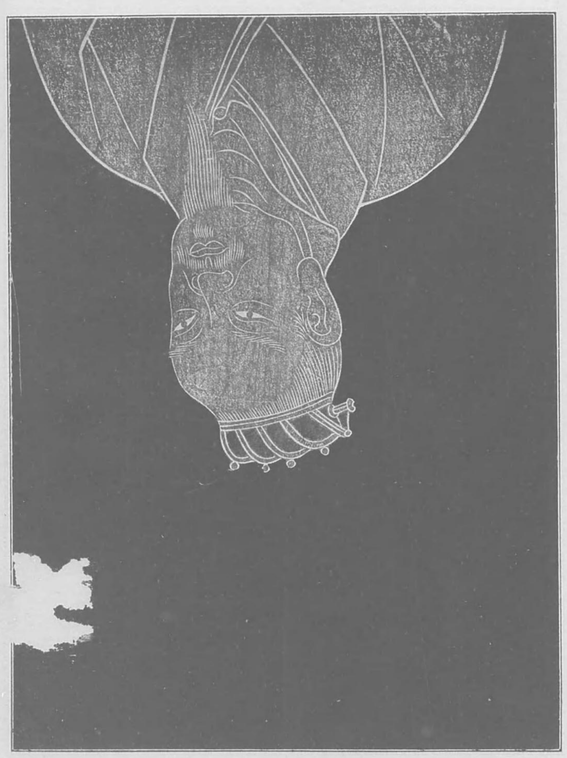
歷代君臣圖像

皐陶（名臣）

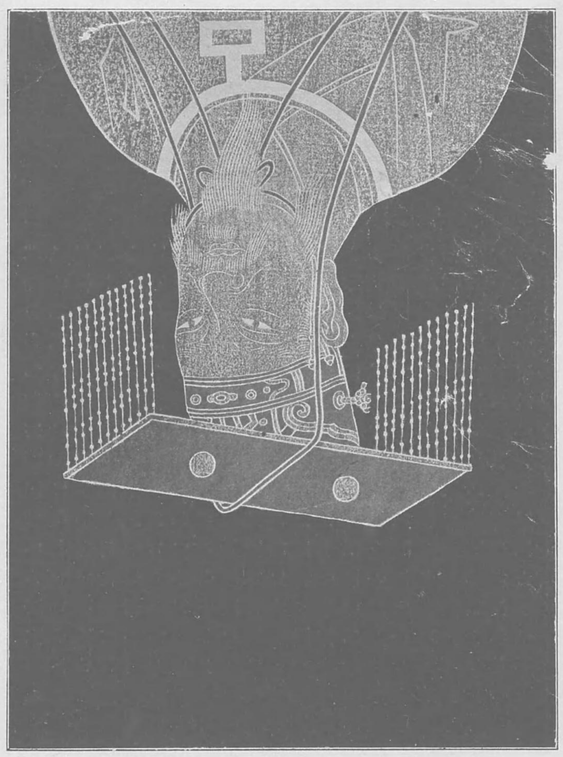
歷代君臣圖像



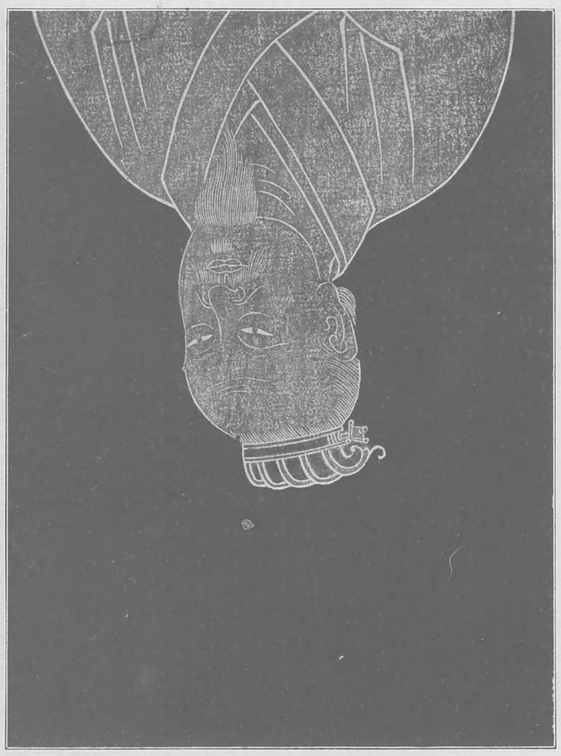
(開)　湯　王　成　(湯王)



(開)　湯　王　成　(湯王)



(殷)　湯　王　(賢君)



(殷)　湯　王　(賢君)

契

西暦紀元前二六〇〇年頃

契は帝嚳の妃、有娀氏の女也、玄鳥の卵を呑み孕めるあり て契を生む、契長じて陶唐虞夏之林至契のりて殷の祖先なり、母は簡狄と いひ、契の時に仕へて功あり、商に封せらる、其先殷の湯王成は子名は履と いふ、黄帝の後なり、其先殷の湯王成は子名は履と いふ、黄帝の後なり、其先殷の湯王成は子名は履と いふ、黄帝の後なり、其先殷の湯王成は子名は履と いふ、黄帝の後なり、其先殷の湯王成は子名は履と いふ、黄帝の後なり、其先殷の湯王成は子名は履と いふ、黄帝の後なり、其先殷の湯王成は子名は履と いふ、黄帝の後なり、其先殷の湯王成は子名は履と いふ、黄帝の後なり、其先殷の湯王成は子名は履と いふ、黄帝の後なり、其先殷の湯王成は子名は履と

湯王成

西暦紀元前一七二〇年頃

契

日本神武紀元前一六〇〇年頃
西暦紀元前二二六〇年頃

契は帝嚳の子にして殷の祖先なり、母は簡狄といひ、有娀氏の女也、玄鳥の卵を墮すを見て、拾ふて之を呑み、孕めるありて契を生む、契長じて陶唐虞夏の間に歴事して司徒の職に任ず。之に命じて曰く、百姓親しまず、五品不遜なり、汝司徒となりて敬しんで五教を布けと、五教は乃ち、父子親あり、君臣義あり、夫婦別あり、長幼序あり、朋友信あらしむるをいふ、契能く其職に稱ひ、功を以て商に封せられて姓を賜ふ、數世の孫湯に至りて夏の桀王の無道を伐ち、天位を踐んで殷業を創始し、傳へて六百有餘年に及ぶ、契が有德偉功の根を植ゆる深きにあらずんば、枝葉の繁茂焉んぞ此の盛を見るを得んや。

后稷

日本神武紀元前一六〇〇年頃
西暦紀元前二二六〇年頃

后稷名を棄と稱す、母姜源は帝嚳の妃なり、曾て野に出でゝ巨人の跡を踐み、懷妊して棄を生む、以て不祥となし、之を隘巷に棄つ、馬牛避けて踐まず、移して山林中に置かんとせしも、偶〻林中人至るに逢ふて果さず、更に之を氷上に移せば、鳥來りて翼を以て之を覆へり。是に於て其神助あるを知りて之を養育せり、幼時已に大人の風あり、遊戯するに常に樹を種ゆることを好み、長ずるに及んで善く土壤を相し、農事に通せり。堯の時、棄を登用して農師となす、乃ち農官の長なり、依て民に耕稼播種の法を敎へ、天下一人の飢者あるも亦以て已れの罪となせり。任へて舜の時に至り、邰に封せられ、此時姓を分ちて后稷と號す、十六世の孫周の武王に至りて四海に君臨し、祚を繼ぐこと八百餘年の長きに至る、世后稷救民の餘德なりと稱す。

禹王（夏）

日本神武紀元前一五四〇年頃
西暦紀元前二二〇〇年頃

夏の禹王姓は姒、名は文明といふ、鯀の子にして顓頊の孫なり、堯の時洪水あり、父鯀治水の事に當りて功なし、舜乃ら禹を擧げて鯀に代らしむ、禹經營拮据、南船北車席暖なるに暇あらず、山を度り陂を築き道路を通じ疏水をなし、外に居ること十三年、家門を過ぐれ共入らず、遂に能く其功を奏せり、舜功を嘉みし姓を姒氏と賜ひ、夏縣の伯に封じ、万機を攝行せしむ、舜崩ずるに及んで位に即き、平陽に都し、金德を以て王たり、禹行住座臥節度あり、身を以て規矩となし、天下の民を撫恤せり。曾て途に罪人に逢ふ、車を下りて涕泣して我不德を責む、江を濟るとき黄龍舟を負ふ、禹歎息して命を天に歸して怖れず、終に龍を屈せり。儀狄なるものあり、酒を造りて薦む、禹飲んで、甘しとし、後世之が爲に國を亡ぼすものあらんを懼れ、終に儀狄を遠ざく、又九州の金を採りて鼎を鑄る、三足は三德に象り、以て上帝を享せり。後諸國を巡狩し、南、會稽山に至りて崩ず、子啓賢にして能く父の道を繼ぐ、終に立て位に即く、禹在位二十七年なり。

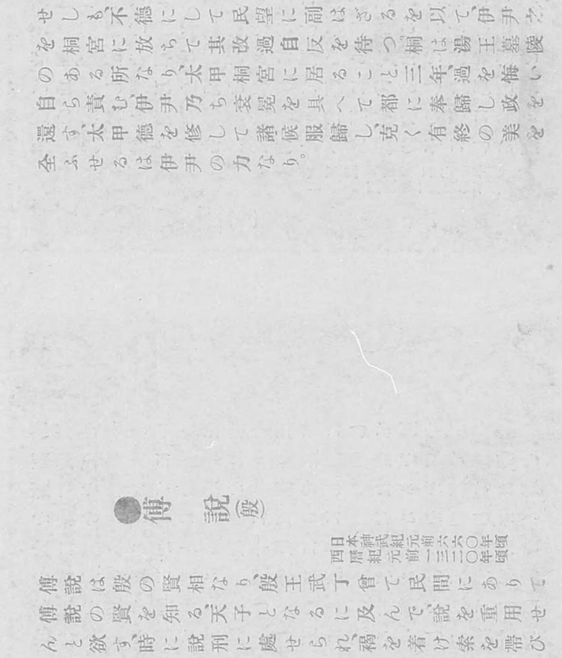
湯王（殷）

日本神武紀元前一一二〇年頃
西暦紀元前一七八〇年頃

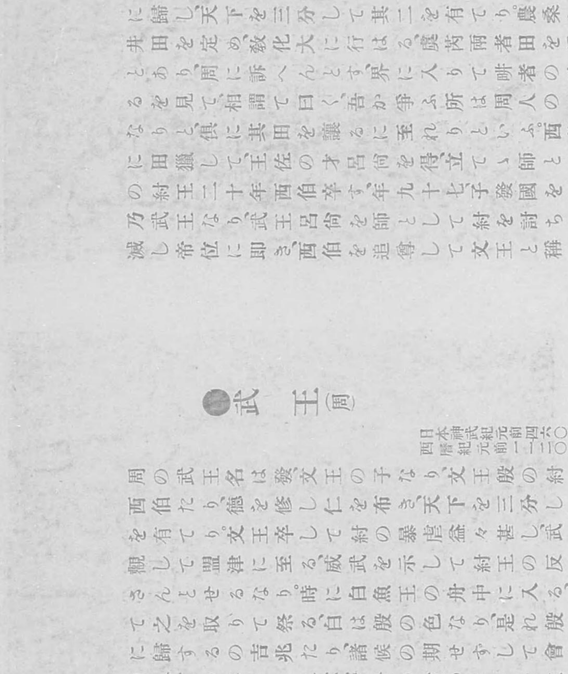
殷の湯王姓は子、名は履といふ、黄帝の後なり、其先契は唐虞の時に仕へて功あり、商に封せらる、湯に至りて夏の桀王無道なり、瓊宮瑤臺を造り、酒池肉林の樂をなす、民財を消費して、國人怨嗟せり、關龍逢なるものあり、之を諫めて殺さる、湯人をして之を哭せしめたりが爲に、夏臺に囚はる、已にして釋さるゝや、諸侯其德を慕ふて心を湯に歸す、是に於て賢相伊尹湯を勸めて桀を討ち之れを南巢に放つ、湯位に即きて國を商と號し、都を亳に定む、大に旱すること七年なりしとき、太史之を占ふて曰く宜しく人を以て犧牲とし天に禱るべしと、湯自ら其身を以て犧牲となし、責むるに六事を以てし、雨を桑林の野に禱る、祈禱未だ終らざるに天神感應大に雨ふること方數千里に及びしといふ、湯其身を修むること日に新に又日に新なるを期し、普く賢才を求めて治道を稗補せしめたるを以て、百姓謳歌天下大に治まれり。又莊山の金を以て貨幣を鑄造せりといふ、在位十三年にして崩ず。

后（名臣）

禹王（賢）（夏）



（殷　伊尹）



（周　文王）

●文王（周）

西暦紀元前一四八〇年頃

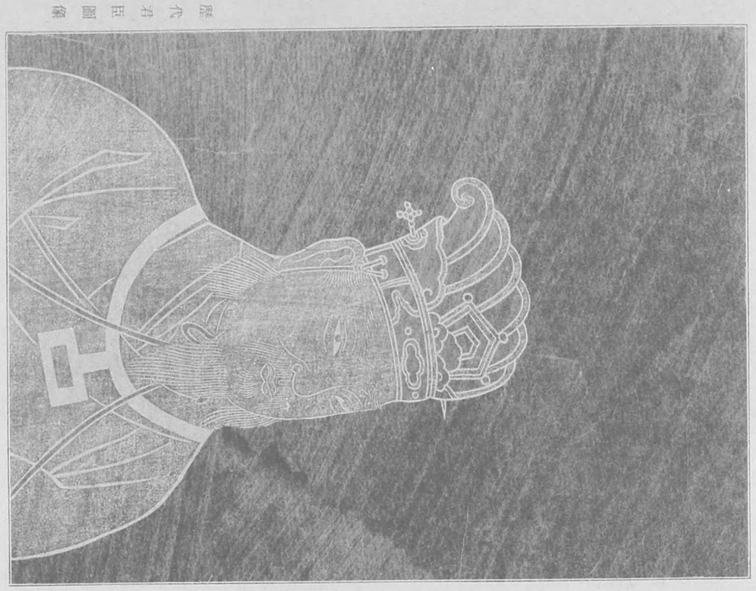
周の文王姓は姬、名は昌、后稷十五世の孫なり、后稷堯に封せらるゝ邰の君にして、農師となり、公劉・亶父に起り、服せしめ、古公・季歷・昌を生む。昌は子季歷に邑し、西伯となし、長子伯邑考を殺し、天下の三分して二を有し、崇侯虎を伐ち、豐に都し、文王と稱せり。

●武王（周）

西暦紀元前一四六〇年頃

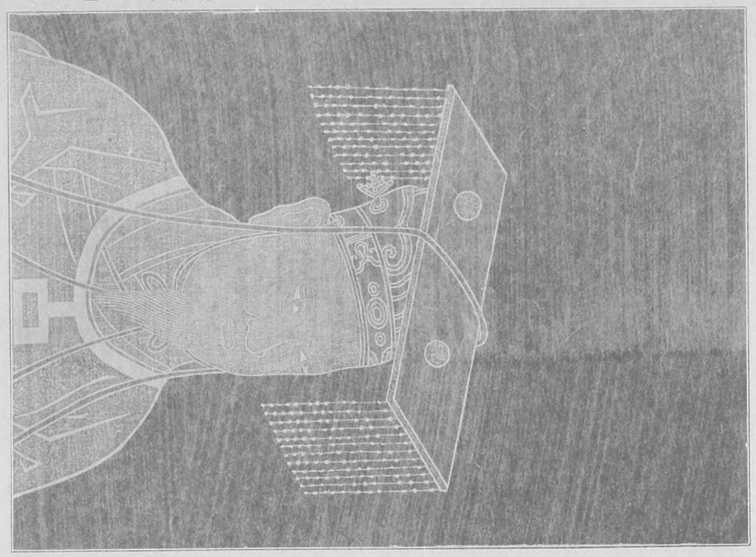
周の武王名は發、文王の子なり、德を修し仁を布き、文王卒して、紂の暴虐を示し、虐益々甚し、武王兵を率ひ、紂王と牧野に戰ひ、紂王自殺し、天下を三分の二を有し、殷の紂王を滅ぼし、周公召公を左右に、方民を布き、文王崩じ、武王立つ、周公召公をして、成王を輔けしめ、成王立つ、周公召公をして、成王を輔けしめ、成王立つ、周公召公をして、成王を輔けしめ、成

玉を衣て鹿臺に燔死せり、王殷を滅し帝位に即き、都を鎬京に定む、箕子の囚を釋し北干の墓を封じ、財を散じ粟を發して大に民衆を殷はせり、伯夷叔齊義、周の粟を食はず、首陽山に隱れて采薇の歌を作り、終に餓死す、箕子殷の故墟を過ぎ、宮苑廢壞し禾黍の油々たるを見て麥秀の歌を作る、殷民聞くもの皆流涕す、武王太公を師とし周公を輔として遍く仁政を布き、万民悅服せり、武王崩じ子成王立つ、周公召公左右の輔佐たり、初め武王西都を鎬京に作り、更に洛邑を營せんとして果さず、成王の父志を成さんと欲し、周公召公をして王城を築かしめ、之を東都と稱せりといふ。



歷代君臣圖像

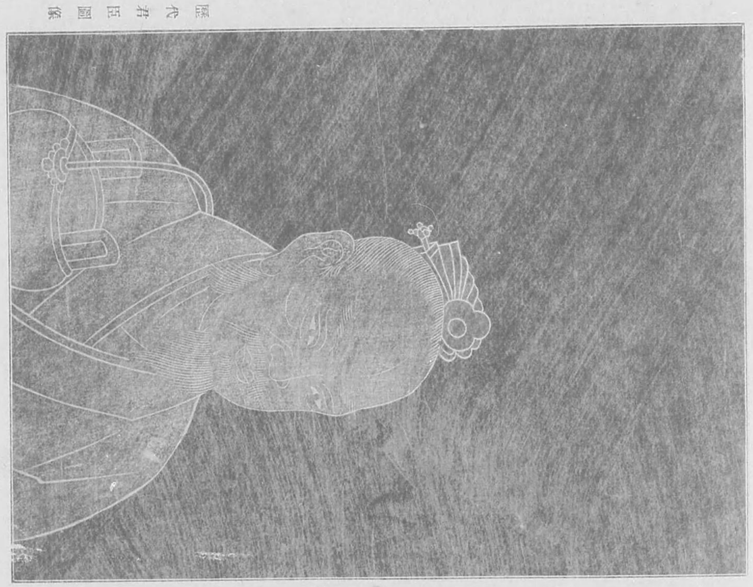
（周）文王（賢君）



歷代君臣圖像

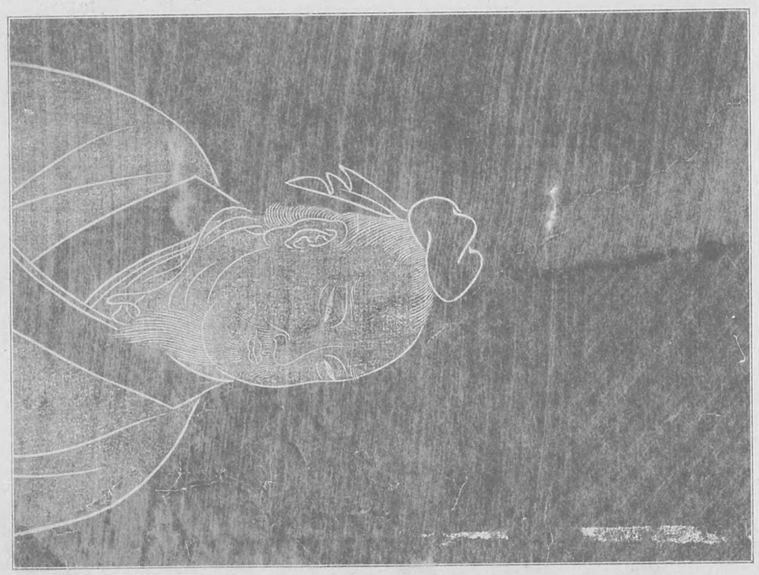
（周）武王（賢君）

を補導せるを以て殷道復興の盛を致し武丁を號して高宗と稱するに至れり、故に曰く、若し巨川を濟らば汝を用ひて舟を作り、若し歲大に旱せば汝を用ひて霖雨を作らんと。殷祚六百餘年間其賢相良弼として宸衷を啓沃せしものを求むれば、上にありては乃ち伊尹あり、下に於ては乃ち傅說あるを見る。



歷代君臣圖像

（殷）伊尹（賢相）



歷代君臣圖像

（殷）傅說（名臣）

●周　公（周）

日本神武紀元前四五〇年頃
西暦紀元前一一一〇年頃

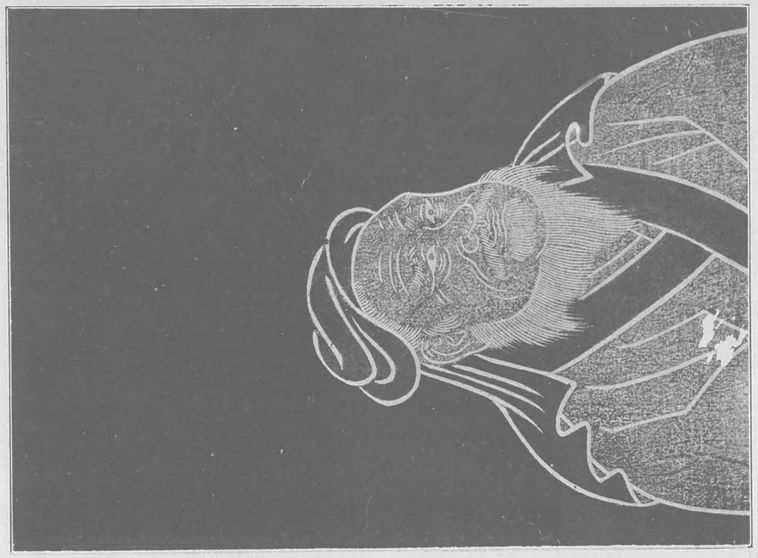
周公姓は姫名は旦、文王の子にして武王の弟なり。周公武王を佐けて周業を創始し、武王崩じ成王十三歲にして位を繼ぐに及び冢宰に任じて政を攝し、一沐に三たび髮を握り、一飯に三たび哺を吐こして以て賢士を禮せり、是れ攝政の始めなりといふ。武王の弟管叔蔡叔紂の子武庚（殷の後たるもの）と謀りて亂を作し、公の幼主に利あらざるを流言す、

●孔　子（周）

周靈王二一年（日本紀元二一〇年
（綏靖天皇二一年）西暦紀元前五五一年

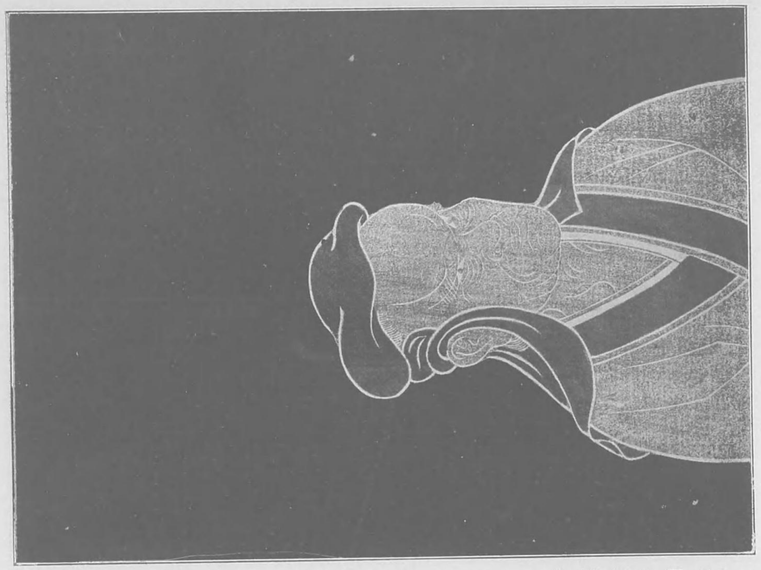
孔子名は丘、字は仲尼、其先は宋人なり、父を叔梁紇といひ、黄帝の遠裔なり、母顔氏尼丘山の神に祈りて姙み、孔子を魯の昌平鄕の陬邑に生む。丘幼にして遊戲するに、常に俎豆を陳ね禮容を設けたり長ずるに及んで容貌魁偉、身長九尺六寸、腰の大さ一圍あり。二十歲にして魯の昭公に仕へて委吏となり、又司職吏となる、皆好績あり。魯國亂れ昭公齊に奔るに及び、齊に適き又魯に反る。後魯の定公に仕

（賢相）周公旦（周）



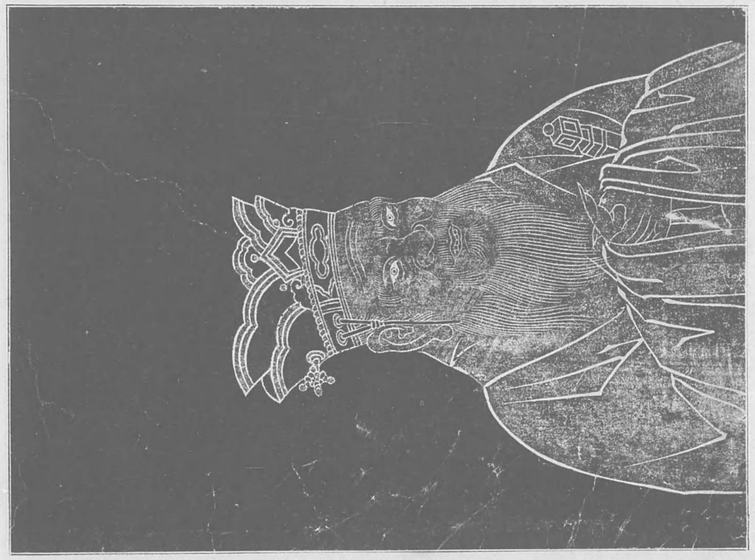
歷代君臣圖像

（名臣）太公望（周）



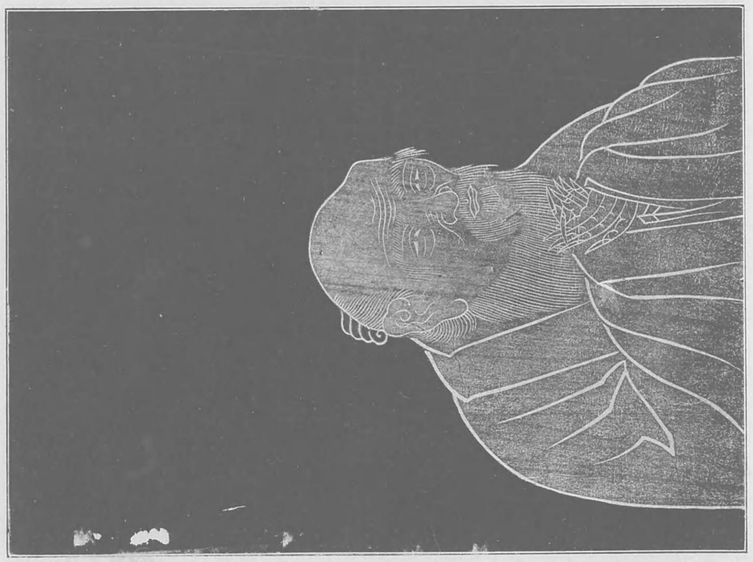
歷代君臣圖像

（聖人）孔子（周）



歷代君臣圖像

（大學者）老子（周）



歷代君臣圖像

周公（周）

日本神武紀元前四五〇年頃
西暦紀元前一一一〇年頃

周公姓は姫、名は旦、文王の子にして武王の弟なり。周公武王を佑けて周業を創始し、武王崩じ成王十三歳にして位を繼ぐに及び、冢宰に任じて政を攝し、一沐に三たび髪を握り、一飯に三たび哺を吐いて以て賢士を禮せり、是れ攝政の始めなりといふ。武王の弟管叔蔡叔紂の子武庚殷の後たるもの）と謀りて亂を作し、公の幼主に利あらざるを流言す、公東征して之を平定せり。成王長じて公政を還し、召公と共に王を佑く、成王の六年公禮を制し樂を作る、七年武王の遺志を繼て洛邑を營み、之を東都と稱して諸侯朝會の地となせり、交趾の南に越裳氏なるものあり、來りて白雉を獻じ、中國當に聖人あるべきを言ふ、公之を王の德に歸して宗廟に薦む、又指南車を作りて先導をなし、遠人を服することを示せり。公の子伯禽魯に封せられ將に行かんとするや、之を戒めて曰く、愼んで國を以て人に驕ることなかれと、公の聖德は萬世の崇仰する所にして、魯は君子の國として八百七十三の祚を踐せり。

孔子（周）

周靈王二一年（日本紀元一一〇年
（綏靖天皇三一年）西暦紀元前五五一年

孔子名は丘、字は仲尼、其先は宋人なり、父を叔梁乞といひ、黄帝の遠裔なり、母顔氏尼丘山の神に祈りて姙み、孔子を魯の昌平鄉の陬邑に生む。丘幼にして遊戲するに、常に俎豆を陳ね禮容を設けたり長ずるに及んで容貌魁偉、身長九尺六寸、腰の大さ一圍あり。二十歳にして魯の昭公に仕へて委吏となり、又司職吏となる、皆好績あり。魯國亂れ昭公齊に奔るに及び、齊に適き又魯に反る。後魯の定公に仕へて中都の宰となり、司空より大司寇に進む、定公を相けて齊公と夾谷に會し、齊をして侵す所の魯地を歸して以て謝せしむ。尋で相の事を攝行して國政に參與し、姦臣少正卯を誅し、三月にして治績著しく顯はる。定公女樂を受くるに當り、諫爭して容れられざるを以て魯を去り陳蔡の間に窘窮し、歎じて曰く吾道非かと、弟子子貢曰く夫子の道至大天下能く容るゝなしと、顔回曰く容れられざる何ぞ病まん、然る後君子たるを見ると、諸侯王終に丘を用ふる能はず、丘亦念を仕途に絶ち、書傳禮記を叙し、詩を刪り樂を正し、易を喜びて彖象繫辭說卦文言を序す、又魯の史記により春秋を作る。弟子三千人、六藝に通ずるもの七十二人あり。哀公の十六年四月八日卒す、壽七十三（或曰七十）謚して大成至聖文宣王といふ。

太公望（周）

日本神武紀元前四六〇年頃
西暦紀元前一二〇〇年頃

太公望姓は姜、名を呂尙といひ、東海上の人にして、神農の苗裔四嶽の伯夷（孤竹の伯夷と別人なり）の後なり。伯夷禹の治水に參畫して功あり、依て姜姓を賜ふといふ。呂尙殷紂王の虐政に際して、韜晦世を避け、渭陽に漁釣して究困年老ひたり。周文王の西伯たりしとき、將に田獵せんとし、太史をして之をトせしむ、曰く龍にあらず、彪にあらず、熊にあらず、羆にあらず、虎にあらず、得る所は霸王の補なりと。西伯齊戒三日にして渭陽に獵す、呂尙の茅に坐して釣するを見て、與に語りて大に悅び、相伴ふて歸り、立てゝ師となす、且曰く吾先君太公子望むこと久しと、故に號して太公望といふ。西伯卒し子發立つ、之を武王といふ。時に紂王暴虐益々甚しく、諸侯皆紂の伐つべきをいふ。呂尙終に武王を佐け、西伯の木主を載せて、以て紂を伐つ、伯夷叔齊馬を叩いて之を諫む。左右之を殺さんとす、呂尙其義を高しとして扶けて去らしむ、武王紂を伐ち殷を滅し、天子となるに及び、動勞によりて齊に封せられ、營丘に都せり、壽九十にして卒す。曾て兵書六十編を著はし、之を六韜と名づく、其用兵の道と王佐の才と共に百世の瞻仰する所なり。

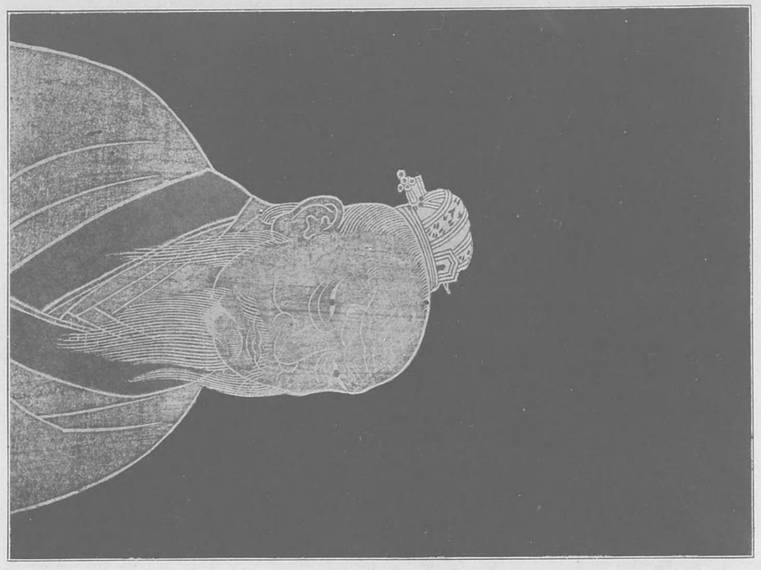
老子（周）

周景王二三年（日本紀元一三九年
（安寧天皇二七年）西暦紀元前五二二年

老子姓は李、名は耳、字を伯陽といふ、周の定王三年九月楚國の苦縣に生る。生れて異相あり、長じて周の守藏の吏となる、孔子就て禮を問ふ、老子之れに告げて曰く、良賈は深く藏して虛なるが如く、君子は盛德にして容貌愚なるが如し、子の驕氣と多慾と態色と淫志とを去れと。孔子歸りて弟子に謂て曰く、鳥吾其飛ぶを知る、魚は吾其游くを知る、獸は吾其走るを知る、飛ぶもの游ぐもの走るもの皆以て網し綸し矰すべし、龍に至りては吾其風雲に乘じて天に上るを知ること能はず、今老子を見るに猶龍の如きかと。老子周の衰ふるをみて將に隱れんとし、青牛の車に駕して函谷關を過ぐ、關の守吏強いて書を著はさんことを乞ふ、老子乃ち道德五千餘言を著はして去る。其學無爲自化を以て本とし、言々自ら玄妙の理を含む、後莊周ありて亦老子の學をなせり、周の景王二十三年老子卒す、壽八十四歳なり。唐に至り太上玄元皇帝の號を贈る。

なを致したし戰發に王を邦に秦秦壯氏遇帝高
り。るさの器局邦都す。後隙隙もむ力見時相夢祖
しめ局を人とし自ら屢忍帝を位に殺以楚自立り王たり王子起る羽羽羽

成せ。良多病にして陣頭に立つ能はず將を斫り城を拔くの功なしと雖籌謀の偉勳開國第一に居る。高祖曰く籌を帷幄の中に運らし勝を千里の外に決するは子房の功なりと、功臣を封ずるに當りて自ら齊の三萬戸を擇ばしむ。良曰く臣初め陛下と留に遇ふ。是れ天臣を以て陛下に授く留に封ずる足れりと。廼ち留侯となす。良功成り名遂げて自ら韜晦し漢の惠帝六年薨ず。史家良を以て魁梧の偉丈夫となすも、其容貌却て婦人女子の如し。是れ往々偉人の風貌に於て見る所の一種奇異の對照なりとす。

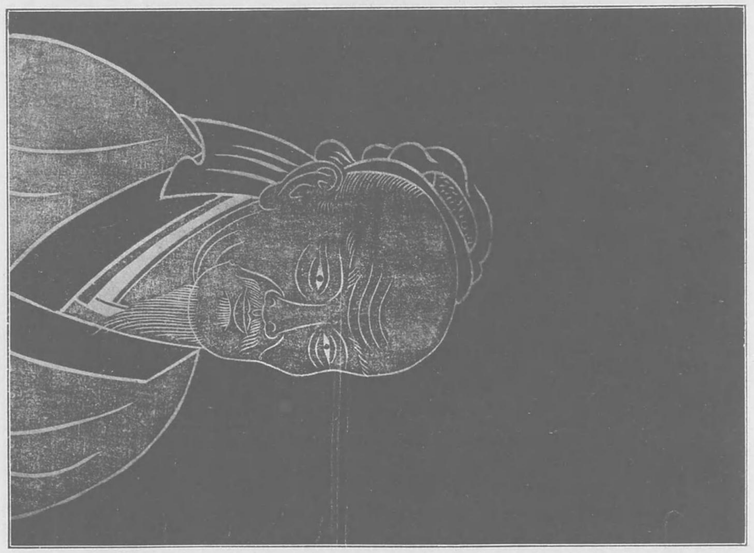


歴代君臣圖像

（漢）高祖（明君）

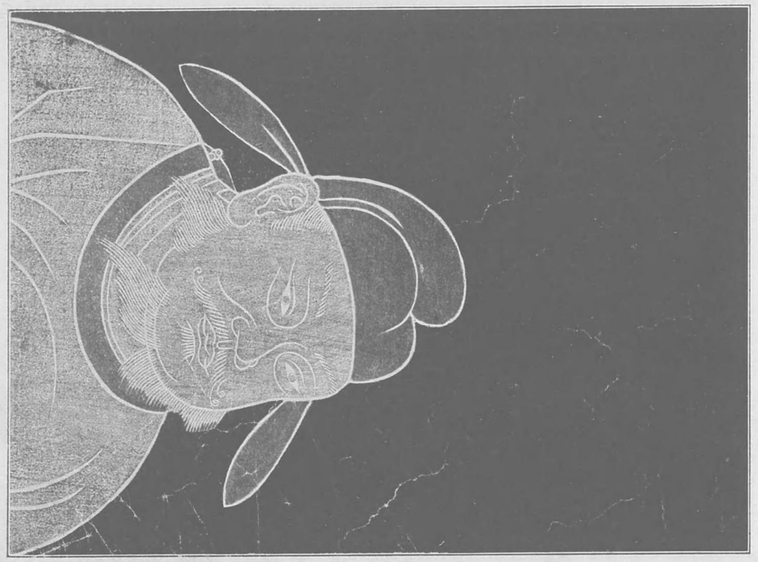
歴代君臣圖像

（漢）張子房（名臣）



歴代君臣圖像

（周）三閭大夫（屈原）賢人



歴代君臣圖像

（楚）項羽（豪傑）

を漢王に封ず。是より漢楚相確執し屢々戰鬪を交ゆ。漢王は蕭何張良韓信の諸豪を用ふ。羽は勇武を恃んで范增の智を用ゆる能はず。垓下に敗れ逃れて烏江に走る。烏江の亭長舟を艤して羽を待つ。羽笑て曰く、天我を亡す、我何の面目か復た江東の父兄を見んやと。自ら刎ねて死せり。時に漢の高祖の五年なり。詩人咏ふて曰く、「江東子弟多豪俊、捲土重來未可知」と。以て羽が垢を含み耻を包んで再擧を計らざりしを惜めり。英雄の末路傷むべしと雖、乾坤一擲事敗れて從容死に就く、羽亦千古の快男兒といふべし。

●東方朔（漢）

漢武帝建元元年（日本紀元五二一年）
（開化天皇一八年）西暦紀元前一四〇年

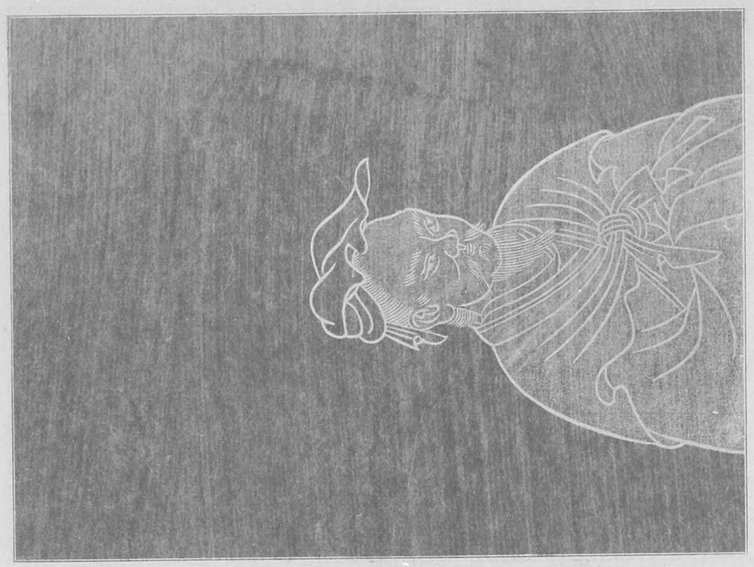
東方朔字は曼倩、平原縣厭次邑の人也、前漢の武帝豪邁不群頻に人才を登用し、其位を與ふゝ敢て次序を間はず、只其才の適する所に從ふを以て、四方の士爭ふて言議し、自ら衒鬻するもの千を以て數ふるに至る。朔亦上書して曰く、臣少ふして父母を失ひ、長じて兄嫂に養はる、年十三にして書を學び、三冬の文史用ふるに足れり、十五にして擊劍を學

●楊子雲（漢）

漢王莽天鳳五年（日本紀元六七八年
（垂仁天皇四七年）西暦紀元一八年

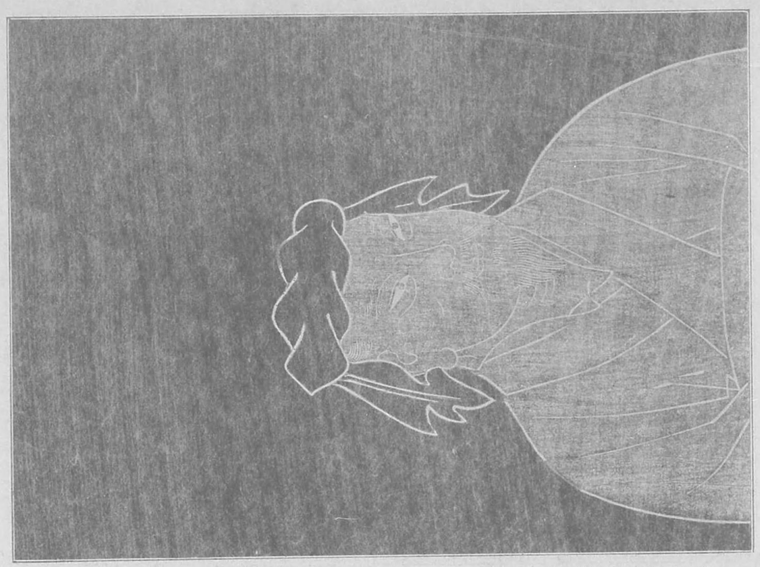
楊雄字は子雲、成都の人なり、農桑の家に生れて、少ふして學を好む、而も章句の間に屑々たらず、博覽にして萬卷の書を讀破し、見ざる所なし。口吃して劇談すること能はざれば、淵默思を潛め、平靜にして無爲なり、耿介脫俗にして嗜慾少なく、其居嶋山の南、田一廛宅一區あるのみにして、家產常に乏し

（漢）　董仲舒　（學者）



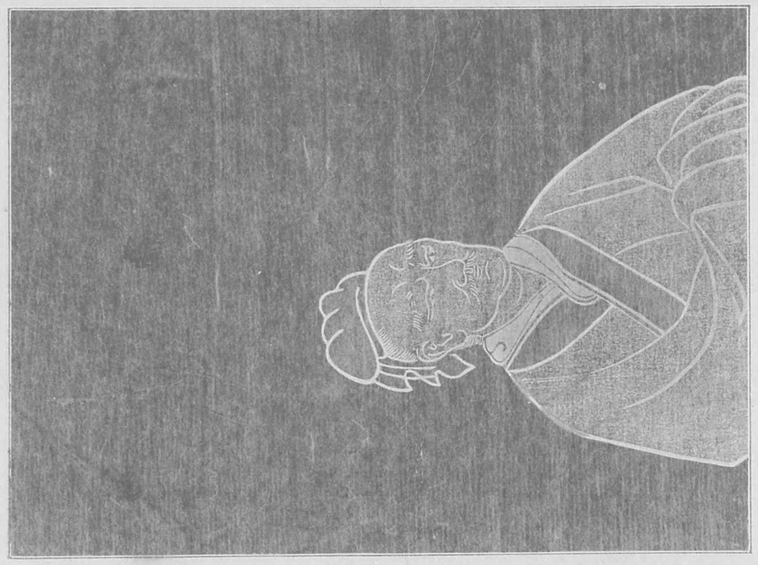
歴代君臣圖像

（漢）　東方朔　（詩人）



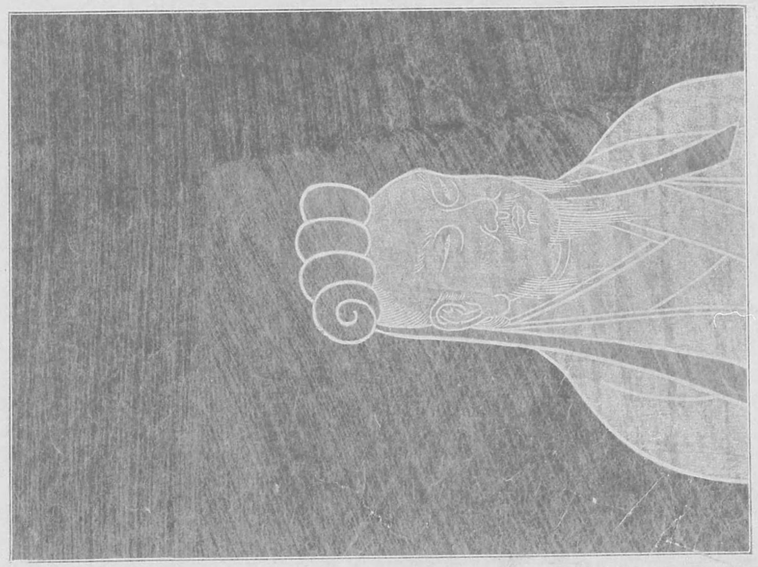
歴代君臣圖像

（漢）　司馬遷　（史家、史記の著者）



歴代君臣圖像

（漢）　楊子雲　（學者）



歴代君臣圖像

東方朔（漢）

漢武帝建元元年は日本紀元五二一年（開化天皇一八年）西暦紀元前一四〇年

東方朔字は曼倩、平原縣厭次邑の人也、前漢の武帝豪邁不群頻に人才を登用し、其位を與ふる敢て次序を間はず、只其才の適する所に從ふを以て、四方の士爭ふて言議し、自ら衒鬻するもの千を以て數ふるに至る。朔亦上書して曰く、臣少ふして父母を失ひ、長じて兄嫂に養はる、年十三にして書を學び、三冬の文史用ふるに足れり、十五にして擊劍を學び、十六にして詩書を學び、二十二萬言を誦す、十九にして孫吳の兵法を學び、戰陣の具、鉦鼓の教、亦二十二萬言を誦す、又常に子路が言に服す、今年二十二、長け九尺二寸、目は珠を懸るが如く、齒は貝を編めるが如く、勇は孟賁の如く、捷は慶忌の如く、廉は鮑叔の如く、信は尾生の如し、此の如くんば以て天子の大臣たるべしと、文辭不遜高く自ら稱揚せり。武帝之を偉なりとして登用し、親幸せり。枚皐郭舍人の徒と帝の左右にありて詼諧を事とす、大中大夫給事中に歷任す、時に正諫の補益する所ありき。後世朔を目して滑稽の雄となす、

董仲舒（漢）

漢武帝建元元年は日本紀元五二一年（開化天皇一八年）西暦紀元前一四〇年

董仲舒は廣川の人にして、漢の醇儒なり、幼より春秋を好み、帷を垂れて講學し、三年園圃を窺はず、終に其蘊奥を究むといふ。前漢の景帝の時に博士となり、武帝の時に賢良に擧げられ、對策十餘萬言を上つる、中に曰く、强勉學問すれば則ち聞見博くして智益々明なり、强勉道を行へば則ち德日に起りて大に功ありと、又人君心を正ふして以て朝廷を正すべきを說き、大學を興して天下の士を養はんことを述べ、郡守の撰良と、儒道の統一を論せり。武帝其說を好みして江都の相となす、公孫弘之を嫉み、帝に上言して出でゝ膠西王の相たらしむ、后疾を以て官を辭し、歸りて學を講じ書を著はし、又生業の何物たるを知らざるが如し、其學淵源あり、聖道を闡明して岐路に入らざるを以て要とす、漢五世の間、春秋に明かなるもの、獨り董仲舒を推す、其行亦自ら常經あり、禮にあらずんは行はず、學者咸く之を尊奉せり。

司馬遷（漢）

漢武帝元封元年は日本紀元五五一年（開化天皇四八年）西暦紀元前一一〇年

司馬遷字は子長、司馬談の子なり、其祖先は周の太史たり、父談は漢の武帝建元元封の間に仕へて太史令となる、遷河陽縣の龍門に生れ、河山の陽に於て耕作牧畜の事に從ふ、十歲能く古文を誦讀し、二十歲にして遠遊の途に上り、山川を跋涉して古聖賢の遺跡を尋ね、齊魯の間に講學して、孔聖の流風遺音を繹ね、歷遊して歸るや、仕へて郎中となり、命を帶びて西方及南方の異族に使して還る、天子泰山の神を祭りて封禪の禮を行ふに當り、父談行幸に扈從するを得ざるを憤り、卒するに臨み遷に囑するに遺志を繼て史を修せん事を以てす、遷父に繼て太史令となる。李陵を論ずるに坐して罪を得て幽囚せられ、憤を發して史記を作る。軒轅氏に起りて漢の天漢に終り、上下三千年の事蹟を包羅し、之を十二本紀、十表、八書、三十世家、七十列傳に分ち、凡て一百三十篇を著述す。是に至りて先考の遺志を繼紹して之を大成せしめたり、后世史を作るもの皆範を此書に取るといふ。

楊子雲（漢）

漢王莽天鳳五年は日本紀元六七八年（垂仁天皇四七年）西暦紀元一一八年

楊雄字は子雲、成都の人なり、農桑の家に生れて、少ふして學を好む、而も章句の間に屑々たらず、博覽にして萬卷の書を讀破し、見ざる所なし。口吃して劇談すること能はざれば、淵默思を潛め、平靜にして無爲なり、耿介脫俗にして嗜慾少なく、其居嶓山の南、田一廛宅一區あるのみにして、家產常に乏しきも、酒杯を手にして其貧に安んせり。漢の成帝の朝に召されて甘泉河東校獵長楊の四賦を奏上す。后王莽漢祚を奪ふて自立するに及び、大夫に任せられ、文を作りて盛んに莽の德を頌して之を伊周に比す、識者之を毀る。劉莽の事に連係して捕へられんとするや、雄偶々書を天祿閣上に校す、使者至る時雄閣上より投下す。王莽命じて其罪を問ふことなからしむ、天鳳五年雄卒す、壽七十一なり。雄の著書數種あり、大玄經は周易に準じて作爲せるもの、法言は論語に準じて記述せしものなり、其他楊子雲集、訓纂等あり。

●太祖（曹操）（魏）

東漢獻帝の建安一三年は日本紀元八六六年（神功皇后八年西暦二〇八年）

曹操字は孟德、小字を阿瞞といひ、沛國の人夏侯高嵩の子なり、自ら漢の相國曹參の後裔なりと稱し、姓を冑して曹氏といへり。東漢の末葉天下漸く亂れ、群雄並び起る、操亦兵を提げて起ち、青州黄巾の賊を討伐せし以來、袁術を討ち、呂布を殺し、袁紹を滅し、劉表を破り、終に丞相となりて、天子を挾んで天下に號令するに至れり。建安十三年操劉備を逐ふて江陵を下り、大江に臨んで吳を討ち、備、吳主權と同盟して大に曹を破る。是れ史上に有名なる赤壁の戰にして、三國鼎立の形勢茲に胚胎せるなり。趙歐北赤壁の詩に曰く、「依然形勝扼荆襄、赤壁山前古壘長、烏鵲南飛無魏地、大江東去有周郎、千秋人物三分國、一片山河百戰場、今日經過已陳迹、月明漁父唱滄浪、英雄角逐の光景想見すべきなり、後操銅雀臺を築きて豪華を極め、終に魏王となりて出入天子の車服を用ゐるに至れり、操詐謀に長じ猜忌冷酷人に忍ぶと雖、茅を行伍の間に拔き、人を用ゐる親疎を問はず、已れに奉する薄くして賞を與ふるを吝まず、故に群英其門に集まり、衆才其用を爲すを樂しめり、獻帝を遷して候に封じ、自ら周の文王に比せしを以て、史家或は王莽董卓一流の看をなすも、其人物事業共に同日の談にあらざるなり。

●照烈（劉備）（蜀）

蜀漢昭烈帝章武元年は日本紀元八八一年（神功皇后二一年）西暦紀元二二一年

劉備字は玄德、大志ありて語言少なく、喜怒色に形はさず、東漢獻帝の時、天下擾亂、群雄蜂起す、備亦其徒關羽張飛等と共に起る、曹操獻帝を許に遷すに及び、備董承と謀りて操を誅せんとす、操一日從容として備に謂て曰く、今天下の英雄は使君と操とのみ、備義兵を起して、操を討て克たず、冀州に匿れ后再戰して破れ、荆州に走りて劉表に寄る、謀士徐庶諸葛孔明を備に薦む、備草廬を三顧して亮を引いて帷幄の師となし、喜んで曰く吾孔明を得たるは魚の水を得たるが如しと、操の爲に追究せらるゝに及び、盟を吳主孫權と締して、大に操を赤壁に破る后、備自ら漢中王と稱して魏吳と對峙し、三國交々兵を交へて一勝一敗あり、魏東漢を滅すに及んで、備帝位に即き、照烈皇帝と稱す、蜀の成都に都し、大赦して章武と改元す、諸葛亮丞相として之を佐く、子劉禪帝位を繼ぎ、西晉の司馬昭の爲めに滅せらる、時に炎興元年なり。備寛仁にして衆を愛し、又義を重んじ、人を知りて能く任せり、關張と兄弟の義を結び、亮に師事せり、志漢業の復興にありしも、終に其志業を達するに及ばずして沒す、諸葛亮遺志を奉じて、屢々師を中原に出せるも、其功を終へずして亦逝く、漢祚終に繼かずして晉業新に起れり。

●光武（漢）

東漢光武帝中元二年は日本紀元七一七年（垂仁天皇八六年西暦五七年）

光武帝姓は劉、名は秀字を文叔といふ、漢の景帝六世の孫なり、人となり、恢廓大度にして、雄才英略あり、高祖劉邦に匹似すと稱せらる。西漢の末葉王莽紂逆を恣にし、漢の寶祚を奪ふて自立するや、劉秀乃ち兄縯及劉玄と共に兵を起し、大に莽の軍を昆陽に破る。時に大雷風に會し、屋瓦皆飛び暴雨亂射、走るもの相踏み、伏屍丘をなす、莽が軍を驅る處虎豹震恐して潰川に溺死するもの万を以て數ふ、海內の豪傑之を聞いて響應す、終に莽を誅して漢業を復興せり。劉玄先つ帝位に即けるも、赤眉を討伐して敗死するに及び、劉秀終に帝位に即き、洛陽に都せり、赤眉を降し、隗囂を征し、公孫述を討ち、匈奴を憮し、統一の業方に成れり、夙に意を文治に傾け、大學を興し、古典を稽へ禮樂を修せり、誠を推して人を用ゐるを以て、鄧禹馮異馬援吳漢等雄才の士其麾下に集り、共に擾亂反正の偉業を成し、而して皆其終を全ふせるは功臣を憮するの厚きによるなり。又帝王の尊に至りて故舊を忘れず、嚴子陵を澤中に尋ね、之を聘する三たびして諫議大夫の官を授く、子陵受けず富春山に隱る、光武の大度子陵の高風、共に千古に冠絶するといふべし。中元二年崩ず、壽六十二なり。

●嚴子陵（漢）

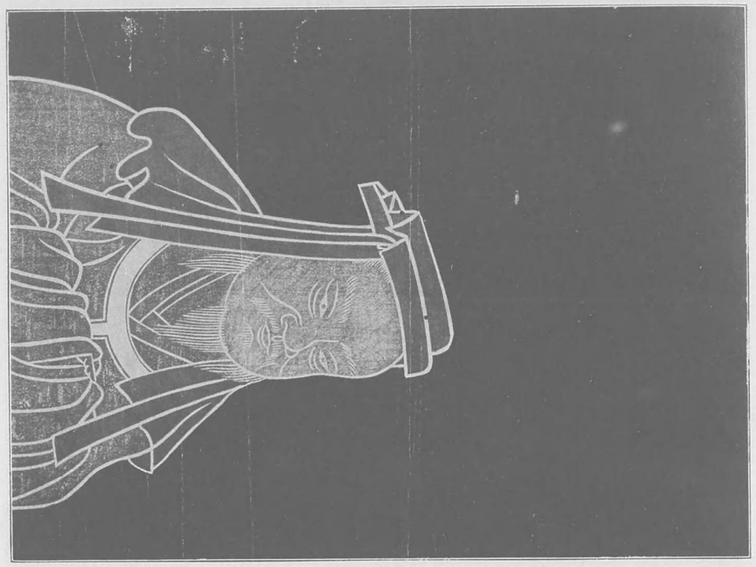
東漢光武帝建武元年は日本紀元六八五年（垂仁天皇五四年）西暦紀元二五年

嚴子陵名は光、會稽縣餘姚の人なり、少時東漢の光武帝劉秀と同學の交あり、光武草莽より起りて王莽を誅し、擾亂反正の功を終へて帝位に即くに及び、子陵姓名を變じて隱遁し、帝に見ゆることを欲せず、光武乃ち物色して、其羊裘を被て齊國の澤に釣するを知り、聘することを三たびにして之を致す。子陵到りて光武と榻を同ふして臥し、足を以て帝の腹に加ふ、太史奏して曰く客星帝坐を犯すこと甚だ急なりと、帝笑て曰く朕故人嚴子陵と臥するのみと、尋て諫議大夫を授くれ共受けず、飄然袖を拂ふて去り、富春山に耕して其身を終る。漢時清節の士の輩出せるは、子陵實に其先をなせるなり。后世隱操の士、亦子陵の高風清節を仰崇すること泰山北斗の如しといふ。

（魏）太祖（曹）

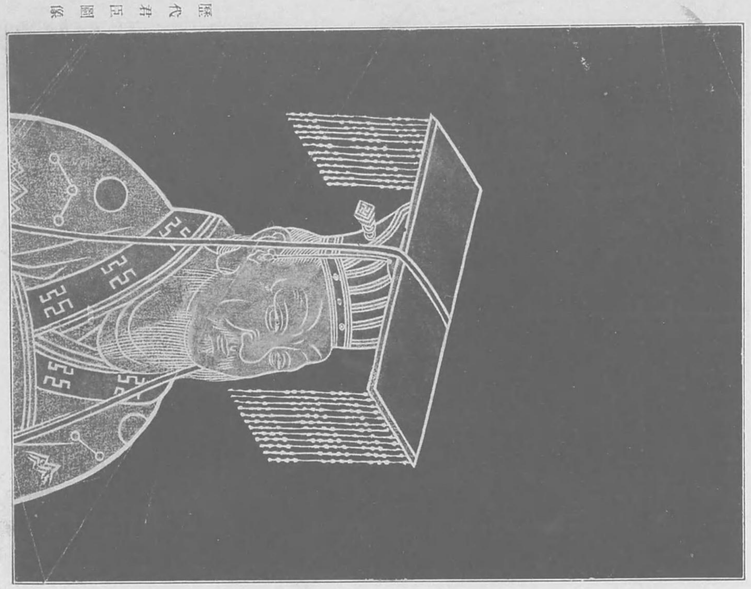
（漢）嚴子陵（高）

破る后備自ら漢中王と稱して魏吳と對峙し、三國交々兵を交へて一勝一敗あり、魏東漢を滅すに及んで備帝位に即き、照烈皇帝と稱す、蜀の成都に都し、大赦して章武と改元す、諸葛亮丞相として之を佐く、子劉禪帝位を繼ぎ、西晉の司馬昭の爲めに滅せらる、時に炎興元年なり、備寛仁にして衆を愛し、又義を重んじ、人を知りて能く任せり、關張と兄弟の義を結び、亮に師事せり、志漢業の復興にありしも、終に其志業を達するに及ばずして沒す、諸葛亮遺志を奉じて、屢々師を中原に出せるも、其功を終へずして亦逝く、漢祚終に繼かずして晉業新に起れり。



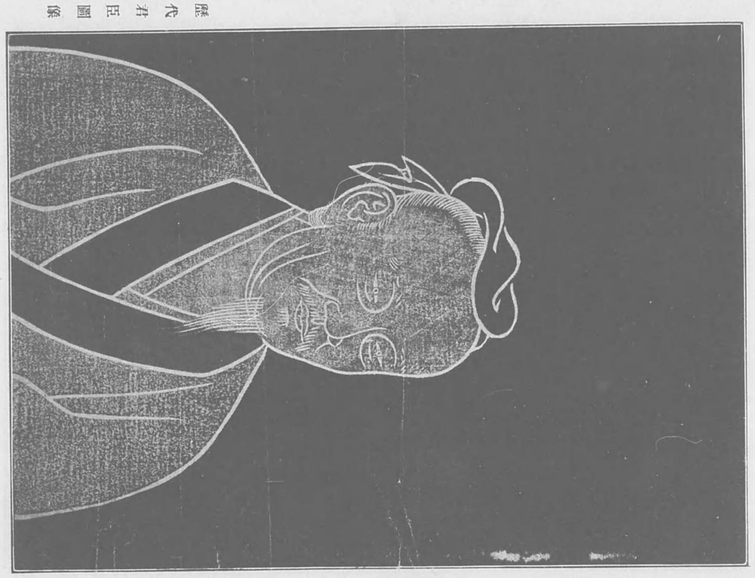
歷代君臣圖像

（魏）太祖（曹操）英雄



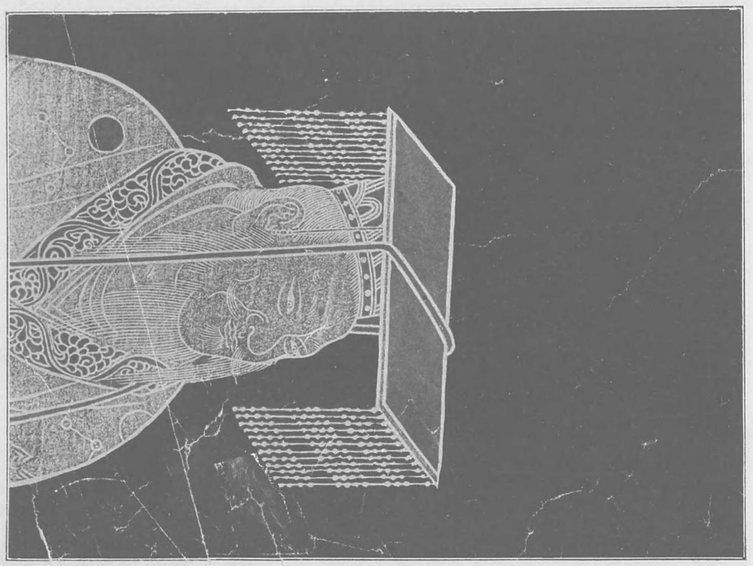
歷代君臣圖像

（蜀）照烈（劉備）明君



歷代君臣圖像

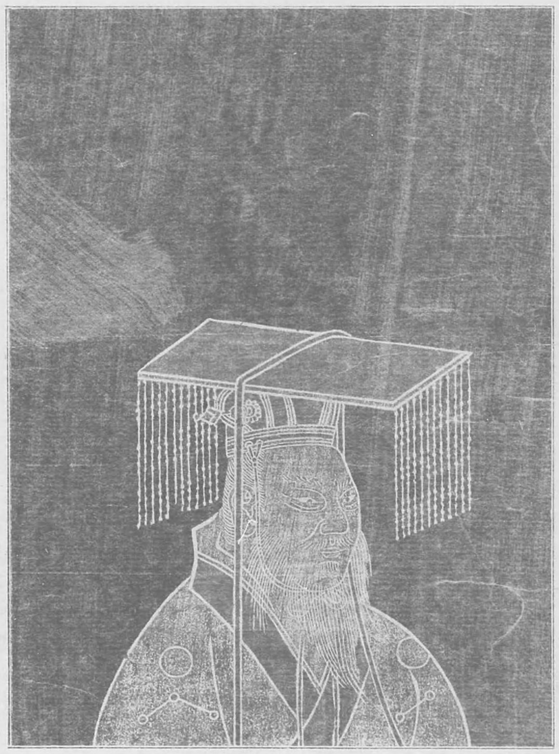
（漢）嚴子陵（高士）



歷代君臣圖像

（漢）光武（明君）

して敗死するに及び、劉秀終に帝位に即き、洛陽に都せり、赤眉を降し、隗囂を征し、公孫述を討ち、匈奴を撫し、統一の業方に成れり、夙に意を文治に傾け、大學を興し、古典を稽へ、禮樂を修せり、誠を推して人を用るを以て、鄧禹、馮異、馬援、吳漢等、雄才の士其麾下に集り、共に撥亂反正の偉業を成し、而して皆其終を全ふせるは功臣を撫するの厚きによるなり、又帝王の尊に至りて故舊を忘れず、嚴子陵を澤中に尋ね、之を聘する三たびして諫議大夫の官を授く、子陵受けず富春山に隱る、光武の大度子陵の高風、共に千古に冠絶するといふべし、中元二年崩ず、壽六十二なり。



歷代君臣圖像

（呉）太祖（孫權）（明君）

歷代君臣圖像

（魏）司馬仲達（謀臣）

歷代君臣圖像

（蜀）諸葛孔明（名臣大軍帥）

歷代君臣圖像

（呉）杜預（名臣）

天下二年佐に耕し三顧に頭を下げ命を受け三分の策を立て天下の形勢を得ざるに乗じ荆襄の地を攻め取り孫氏を滅ぼし魏を破り蜀を平らげ漢室を興さんとして五丈原に陣を張り病に臥して遂に没す

諸葛亮（蜀）

諸葛亮字孔明琅琊陽都の人高臥して時人これを管仲に比す劉備三顧して出でて以て賓師の礼を尽す曹操中原を平らげ劉琮降を請ひ劉備荆州に奔る孫権江東に拠り劉備と共に曹操を破り荆州を取り蜀を平らげ漢中を攻め取り帝を称し魏と鼎立す建安十三年赤壁の戰に曹操を破り建安二十四年漢中を攻め

（蜀）　諸葛亮墓

（魏）　司馬仲達墓

●諸葛亮（蜀）

（蜀漢後主の建興十二年は西暦二三四年）

諸葛亮字は孔明、初め南陽の隆中に居りて管仲・樂毅に比せられしも、劉備に見えて三顧に報ゆるに天下の策を立てゝ以て劉氏を漢室中興の大業に導くを以て己が任とし、遂に劉備の信任を得て、孫吳と和して赤壁の戰を勝利に導き、荆州を得て益州を平定し、漢中を攻めて魏の夏侯淵を斬り、漢中王に推して帝位を勸進し、蜀漢の基を定めて、後主劉禪を輔佐して、魏の曹丕・曹叡と相抗し、五丈原に陣して、魏の司馬仲達と相對し、病を發して、陣中に歿す。

●杜預（晉）

（晉武帝泰始元年は日本の應神天皇二六年）

杜預字は元凱、京兆杜陵の人にして、晉の司馬宣王の女婿なり。博く經史に通じ、又籌略に明かなり、王の人秦州刺史となり、武庫と稱し、武帝泰始元年、秦州の事を奏上するや、預張華と共に機宜に合せり、羊祜討吳の計を贊す、羊祜の遺志を奉じ、荆州刺史として、軍を進めて、吳の邊境を侵すや、預の軍、武昌を降し、大舉して、江陵に出でゝ、寄兵を提げて、江を渡り、石頭城に入る、吳主孫皓降を乞ふ、預功績を立つ、常に言ふ、德は經綸し、業は創造し、一代に高かり、預常に言ふ、又思を、後代に、或は、爲す、能はず、面縛降を、昭耀せり。

●孫權（吳大祖）

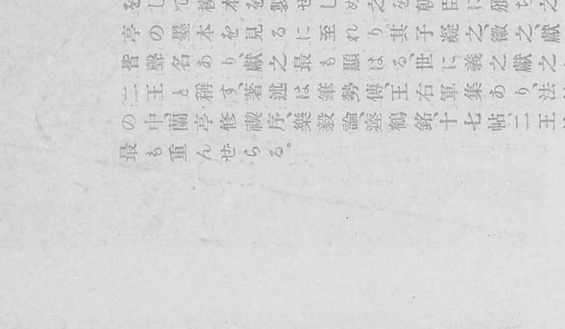
（蜀漢後主の建興十二年は西暦二三四年）

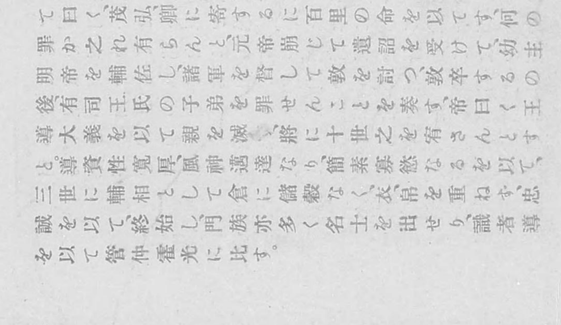
孫權字は仲謀、孫堅の第二子にして、世に、吳大祖と、稱せらる。

●司馬仲達（魏）

（蜀漢後主の建興十四年は西暦二三五年）

司馬懿字は仲達、雄才略英斷、三國鼎立、魏の諸葛孔明と、相抗し、蜀漢の、挺進を、阻止し、孔明、病を、發して、陣中に、歿す、孔明、軍を、退け、懿、追撃し、孔明、軍を、收め、懿、軍を、退け、懿、孔明、陣を、見て、歎じ、懿、孔明、軍を、拒守し、懿、孔明、軍を、攻め、懿、孔明、軍を、敗り、懿、孔明、軍を、破る、懿、孔明、軍を、敗り、懿、孔明、軍を、破る、懿、孔明、軍を、敗り、懿、孔明、軍を、破る





例子酒し太ねり人温慌懼亦懼矢笑て兵衛を移せ孝水山笑然戯
な芝を行酒元ぬ安と既罷ゐ時孝武帝帝武自執戈へのざみ
り卒を事山を戯十年笑て兵前見桓溫客去ゐて容と悲を撥を
して女妓妓石卒衛を携す年六八人ね安石辞容容之を日を敬
て北方桑生と又人を知る の電鎮とな せし 如明 兄 の
太傅を廻り、文靖と諡す。

きは其 一

孔るとと又びに曾す、侃貧性聰敏を以て大王寇淮氏髮を、蔵り范逵侃の家に帝の二年日本紀元九年
明に四雄略明に中原に用善く民、路遺を拾はるこ 士 勤 勞 忠 節 服 人 ふ 嘗 に 分 陰 日 月 を 惜 む べ き 聖 人 な る も 寸 陰 を 惜 む 者 は 大 禹 聖 人 な り 、 廣 州 に 在 り て 朝 野 の 推 薦 を 以 て 名 を 知 ら る 。 初 辨 め せ る 時 酒 食 の 料 な り 、 侃 少 い 今 嚴 明 に 中 原 に 用 意 を な せ り 。 運 ざ こ 蒔 ざ

● 謝安（東晉）

（晉孝武帝太元十年日本紀西暦三八五年）

謝安字は石屋夏に生る。少時人に識られず、嘗て東山に遊び、海に臨んで風波を望み、命じて櫂を進めしむ。安の意色閑暇、而して風波益々急なり、左右の人、安の色を見て、安の意の未だ還るを欲せざるを知り、乃ち之を強いて還る。安、後に桓溫の司馬となり、溫の安を愛重すること、子弟の如し。溫、嘗て安を以て、桓彝の子、桓伊に比す。

● 陶侃（東晉）

（晉成帝咸和九年日本紀元九年西暦三四四年）

陶侃字は士行、と いふ東晉元帝の二年、侃少 ふし て孤貧なり、之を 養 の 母 に 孝 を 盡 す。 侃 の 家 に 帝 の 時 酒 食 の 料 な

● 王導（東晉）

（晉元帝建武元年日本紀元元年西暦三一七年）

王導字は茂弘、琅琊臨沂の人なり、年十四の時、道士に相の器なりと、これを奇とし、威望漸く重し。時に元帝の時の人なり、年十四の時、

窮に守氣將相の器なりと、晉の朝廷、導を見て、此兒容貌

の志あらんとす。導、之に王と、之を觀破し、州

諸軍を都督し、導、邵邪、琅琊、廣州、揚州、

厚かふ、導を見て、時に、導、

導を、王、導、

導、

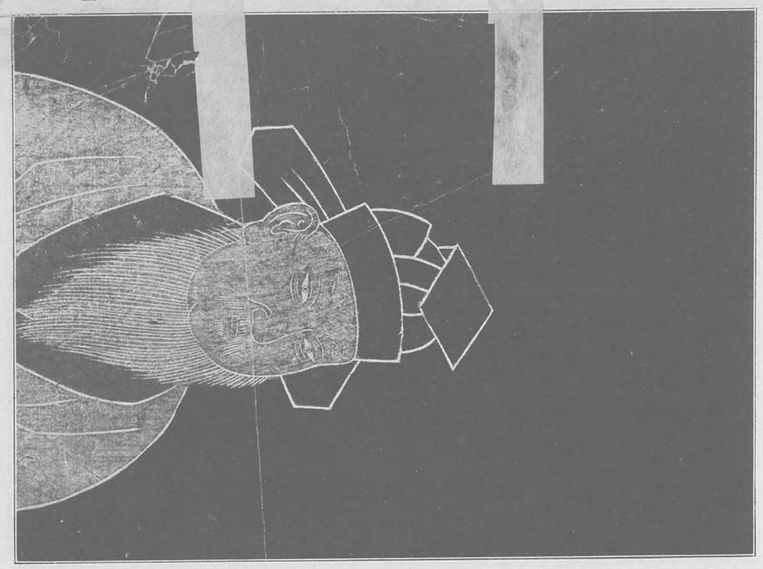
導、

碁罷んで徐に語て曰く小兒輩已に賊を破るのみと、既にして客去るや歡喜屐齒の折るゝを覺へざりしといふ。桓溫曾て新亭にありて大に兵衛を陳ね安石を引見し、坐に於て之を害せんとす、執戈の人惶懼して前まず、安石從容坐に就き談笑自若たり、溫亦笑て兵衛を撤し、笑語日を移せり、孝武帝の太元十年安石卒す、年六十八なり、安石山水に放浪し、酒を載せ妓を携ふ、詩人咏ふて曰く、一笑翩然載酒行、東山女妓又蒼生と、又人を知るの明あり、兄の子玄を擧げて北方秦の重鎭となせし如きは其一例なり、卒して太傅を贈り、文靖と謚す。

して位を遜り、慨然として餘寇未だ除かず山陵未だ返さゞるを以て憤となせり、成帝の咸和九年卒す、侃資性聰敏にして行恭勤事を處する緻密なり、曾て曰く大禹は聖人なるも寸陰を惜めり、衆人當に分陰を惜むべしと、廣州にありし時、朝暮甓を運びて、以て他時力を中原に用ひるの用意をなせり、又雄略に富み、精嚴にして善く斷せり、軍にあること四十一歲、號令嚴明人服し、民歸し、路遺を拾はざるに至れりといふ。其忠節勤勞を以て人之を諸葛孔明に比せり。

歷代君臣圖像

東晉（王羲之）書道の泰斗（）



歷代君臣圖像

東晉（謝安）大政治家（）

歷代君臣圖像

東晉（王導）名臣（）

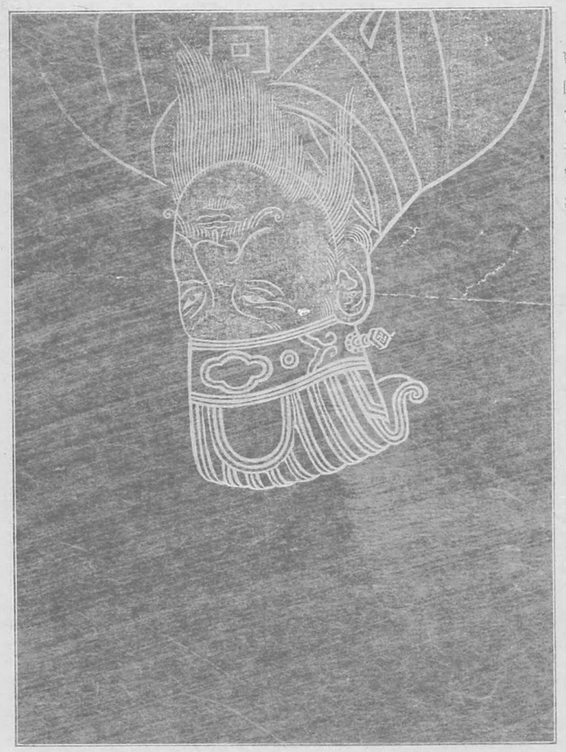
歷代君臣圖像

東晉（陶侃）名臣（）

●陶淵明（東晉）

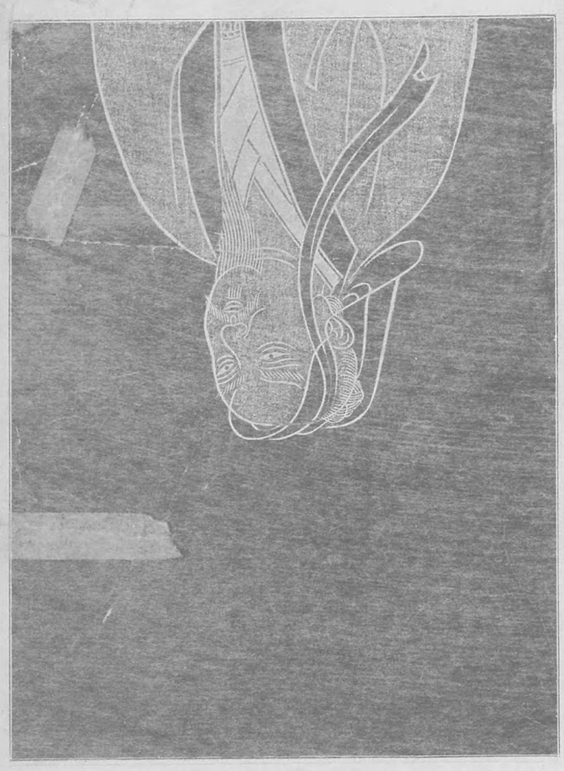
（宋文帝元嘉四年は日本紀元二〇八七年）

陶淵明は、名は潛、字は淵明、尋陽柴桑の人、晉の大將軍陶侃の曾孫なり。（晉書に、淵明、博學にして詞賦に長せり、宋に仕へて彭澤縣令たり、月俸五斗を食む、一日郵吏に見はるるを屑とせず、嘆じて曰く、吾何ぞ五斗米の爲めに腰を折りて、鄉里小人に向ふべけんや、即日官を去り、後復た起ちて江州の祭酒に、再辭して任ぜず、時人之を高尚視せり、淵明は、性、酒を好み、詩文を作るに、自然を主とし、人工を加へず、其志を高尚にし、博學にして詞賦に長せり）



陶淵明肖像

（梁）武帝（蕭衍）（名君）

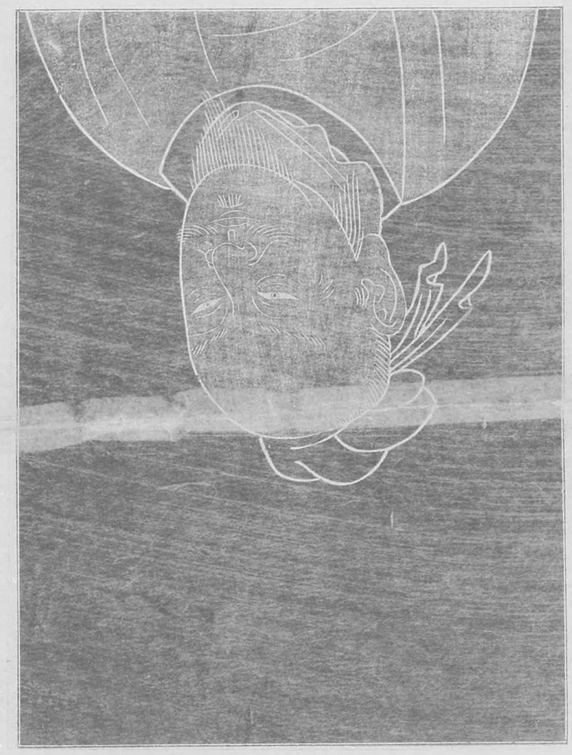


陶淵明肖像

●武帝（蕭衍）（梁）

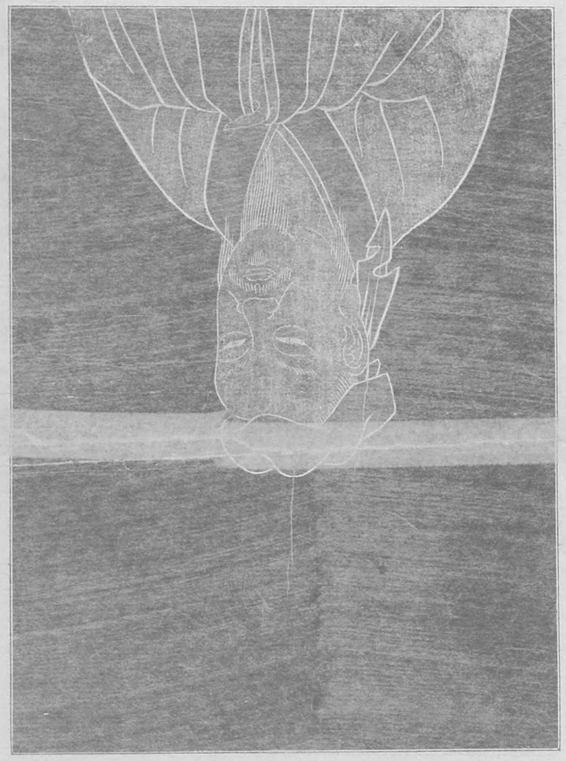
（梁武帝天監三年は日本紀元五一二〇九年）

梁の武帝は、蕭衍字叔達と呼ぶ、梁の亂れ終んとする時、兵を引いて建康に入り、廢立の事を行ひ、后禪を受け、即位して帝位に、蕭統を立て、子の蕭綱を、國の乃ち昭明太子なり、是れ、天資英邁、文を知り、詩を生ず、衍初め南齊に仕へて、雍陽を鎮す、齊の亂れ、武備を修し、曉勇を集む、孕んで、之を呑み、夢に、花を生じ、衍字を、叔達と、呼ぶ、母張氏、



梁武帝肖像

（宋）謝靈運（名詩）



梁武帝肖像

●陶淵明（東晉）

宋文帝元嘉四年は日本紀元一〇八七年（允恭天皇一六年）西暦四二七年

陶淵明字は元亮は晉の大將軍陶侃の曾孫なり。（晉にありては淵明といひ、宋にありては潛と稱せり）少時より其志を高尚にし、博學にして詞賦に長せり。初め職を州の祭酒に奉じ、一旦辭去し、後再起して彭澤縣令たり、月俸日に五斗を食む在任八十日にして郡の督郵到る、淵明束帶之に見ゆるを屑とせず、嘆じて曰く、吾何ぞ五斗米の爲めに腰を折りて、鄉里の小兒を見んやと、即日知縣の印を解いて去る、歸去來の辭は此時に賦せるものなり。南宋晉を滅するに及び、劉裕屢々召せども終に仕へず清貧に安んじ、詩酒の間に優遊して其身を終れり。宋の文帝元嘉四年卒す、靖節徵士と諡す、淵明其宅邊に五柳あるを以て自ら五柳先生と號す。又菊を愛し、常に籬邊に就て之を把觀す、「採菊東籬下、悠然見南山」の句あり、其風神蕭散、思度曠遠にして、詞賦亦其人の如く、高風清節百代の欽仰する所あり。

●武帝（蕭衍）（梁）

梁武帝太清三年は日本紀元一〇九二年（欽明天皇一〇年）西暦五四九年

梁の武帝姓は蕭諱は衍字を叔達といふ、母張氏菖蒲の花を生ずるを見て之を呑み孕めるありて衍を生む、衍初め南齊に仕へて襄陽を鎮す、齊の亂れんとするを知りて密に武備を修し、驍勇を集む、終に兵を引いて建康に入り、廢立の事を行ひ、后禪を受けて帝位に即き、國を梁と號し、子の蕭統を立て、太子となす、是れ乃ち昭明太子なり。衍天資英邁にして多能なり、文學を興し、勤儉を勵め、仁惠を以て治道の要とせしかば、國家無事士民業を樂しみ、二百年間此盛なしと稱せらる。惜いかな後年佛法に惑溺し、身殺生戒を持し、生類の繪を衣服に用ひるを禁じ、牛羊の牲に代ふるに麪餅を以てし、終に身を寺院に捨つるに至る。后其臣侯景の制する處となりて、飲膳も亦裁損せらるゝに至り、憂憤疾をなして崩ず、時に太清三年なり、在位四八年壽八十六。

●謝　玄（東晉）

晉孝武帝太元十三年は日本紀元一四〇八年（仁德天皇七六年）西暦三八八年

謝玄字は幼度、謝安の姪なり、少ふして穎異非凡、長じて器局あり、謝安尤も玄を器重せり、時に晉の朝廷王業競はず、江左に偏安して邊境事多し、前秦の符堅勢強大にして數々侵掠を試む。依て詔して文武の良將を求む、謝安乃ち玄を薦めて北方を鎭禦せしむ。符堅大擧して入寇し、淝水に屯するや、兵百万と號し、猛威當るべからず、朝野震駭出る所を知らず、玄乃ち精銳を率ゐて、河を渡りて之を擊つ、堅の軍大敗し、死者無算、淝水爲めに流を止むといふ。捷書安に達するの時、安圍碁正に酣に、毫も聲色を變せず、詩人の「花下殘棊兒破敵」といもの能く此間の光景を描き、以て安の曠懷と玄の雄畧とを見るに足る後。疾によりて職を解き、曾稽內史の官に任せり、孝武帝の大元十三年死す、謝安の死に後るゝこと三年なり。

●謝靈運（宋）

宋文帝元嘉元年は日本紀元一〇八四年（允恭天皇一三年）西暦四二四年

謝靈運小字は客兒陳郡陽夏の人にして、謝玄の孫なり、文學を好みて博く群書に涉獵し、文章江左第一と稱せらる、晉の遺臣として宋に仕へ永嘉の太守となる。祖父玄前秦の符堅を擊破せしの功を以て、康樂縣公に封せられしが、靈運其封爵を襲ひしを以て、世人稱して謝康樂といへり。靈運山澤の遊を好み、從者數百人木を伐り徑を開きて、百姓の驚擾を惹起せしかば、臨海の太守王琇會稽の太守孟顗等其異志あるを訴ふるに至り、靈運闕に至りて自ら陳じ、臨川の內史に移さる、而も遊牧自若更むる所なかりしかば、有司之を收へんとす。靈運兵を興して逃れ、詩を作りて曰く韓亡子房奮、秦帝魯連恥、と、自ら晉臣たるの故を以て、異朝に仕へざるの意を寓するなり。既にして追討して擒せられ、帝其才を愛して死を宥して廣州に徙す、或人其異圖あるを訴ふるに至り、終に棄市せらる。時に宋文帝（南北朝）の元嘉年中にあり、族第謝惠連亦文章高麗奇才あり、靈運と並び稱せらる。

●高　祖（李淵）（唐）

唐高祖武德元年は日本紀元一二七八年（推古天皇二六年）西暦六〇八年

唐高祖姓は李、名は淵、字は叔德、隴西成紀縣の人にして、顓頊の苗裔なり。李淵狀貌奇異、大略あり、隋に仕へて大原に留守たり、寛簡衆を御し、人多く之に附けり。突厥邊に寇するに及び、淵之を擊て利あらず、淵が次子世民勇略人に過ぐ、隋室の亂るゝを見て陰に天下を安んずるの志あり。機を得て之を淵に說く、淵歎じて曰く、今日家を破り身を滅すも汝に由る、家を化し國となすも亦汝に由ると。終に兵を引て諸郡を拔き、長安を圍みて之に克つ、恭帝を立てゝ自ら丞相となり、唐王の爵に進む。尋で隋帝の禪を受けて帝位に即き、國を唐と號し、僭偽を征服し海内を統一して、唐三百年の基を開けり。兵を起せしより僅に七年のみ。太子建成酒色に荒み、齊王元吉と謀りて秦王世民を殺さんとするや、世民乃ち兵を伏せて建成元吉を殺す。終に世民を立てゝ太子となし、軍國の事を委す。尋で自ら太上皇帝となり、位を太子に傳ふ。貞觀九年に崩ず。

●昭明太子（梁）

梁武帝中大通三年は日本紀元一〇九一年（武烈天皇二五年）西暦五三一年

明太子子姓は蕭名は統、字は德施、小字を維摩といふ。梁武帝蕭衍の長子なり。武帝位に即き國を梁と號するに及び、蕭統立て皇太子となる。太子生れて聰明非凡なり。三歲にして孝經論語を讀み、五歲にして五經を受け諷誦に通せり。長じて自ら元服を加へ、朝政に參與するに及び、裁制明決、巧妄跡を潛む。獄を平かにし慈を垂れ、民皆其德に悅服す。中大通三年卒す。東宮にあること三十年なり。武帝初年の治平は太子の文德與りて多きに居れり。太子風貌端麗にして擧止高雅、加ふるに資性仁孝の心に富む。又文藻に長じ、書籍を好み、書を集むること三萬餘卷に至れりといふ。其文其德我朝聖德太子と匹似するものあり。惜いかな天此英才に年を假さず、遂に其大成を見るに及ばざりしこと、其著文選三十卷なり、世に重んせらる。

●李　靖（唐）

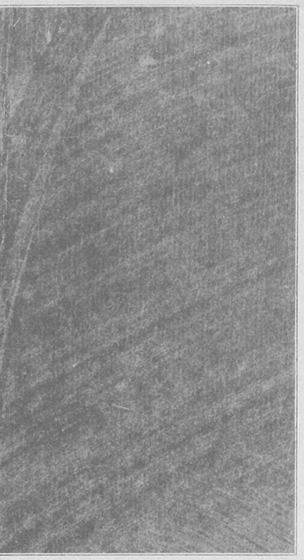
唐太宗貞觀元年は日本紀元一二八七年（推古天皇三五年）西暦六〇七年

李靖字は藥師、唐の功臣なり。風貌魁奇にして大志あり、章句の徒たることを恥ぢ、功名を以て封侯を取らんことを期せり。其勇韓擒虎靖と兵法を論じ、歎じて曰く、孫吳の流亞なりと。太宗世民不世出の姿を以て崛起し、唐業を創始するに當り、靖之れに仕へ、命を奉じて梁を討ちて其主蕭銑を降し、又定襄道の行軍總管として、諸軍を統べて突厥を陰山に襲ふて之を擒にせる如き、攻伐の功頗る多く、盛名遙に古名將の上に出でたり。靖將畧に加ふるに、王佐の才を以てし、出でゝは將たり、入りては相たり。貞觀の治に寄與する所、至大なるものあり。功によりて衛國公に封ぜらる。帝の信任最深く、盛名の下能く他の構陷を免れて其身を保てり。貞觀十七年功臣の像を凌烟閣に畫くに當りて、靖も亦其選に入る。兵法あり世に傳へらる。

●文　帝（楊堅）（隋）

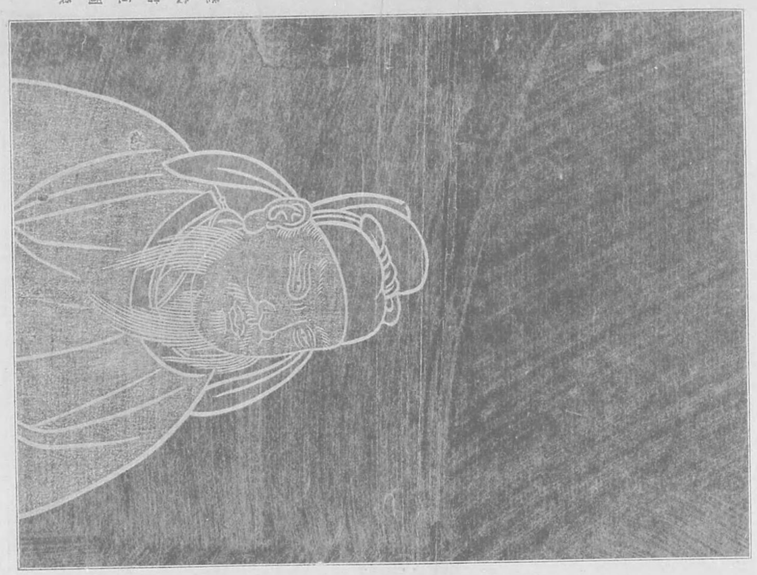
隋文帝仁壽四年は日本紀元一二六四年（推古天皇二二年）西暦六〇四年

隋の文帝姓は楊、名は堅、東漢の大尉楊震の後なりといふ。父を楊忠といひ、魏及周に仕へて功あり、隋公に封ぜらる。堅の生るゝや紫氣ありて庭に滿つ、長ずるに及んで、相貌奇異、人或は其の反相あるを言ふ。堅之を聞いて深く自ら韜晦せり。後墨進して隋公を襲爵し、其女固の宣帝の后となるや、官上柱國大司馬となる。宣帝崩じ靜帝立つに及び、元勇たるを以て自ら大丞相となり、相國隋王に進みて、政柄を握り、諸王諸臣を滅し、次で靜帝を弑し、周祚を移して隋の文帝と稱し、長安に都せり。後又梁主琮を廢して之を弑し、晉王廣を元帥とし、諸將道を分ちて陳を伐ち、後主叔寶を虜にし、終に南北を合一して天下を統平せり。開皇二十年太子勇を廢す、晉王廣立て納子となる。仁壽四年帝病に臥し、太子の爲に弑せらる。在位二十三年なり。帝治道に勵精し、賦を減じ荒に備へ、刑を省き樂を定むる等、功績の記すべきもの多し。恨むらくは詐力を以て天下を得たるが爲に、猜忌深く苛察に過ぎ、功臣故舊を戕賊し、嫡を廢して愛を立て、終に禍亂を釀成せしことを。



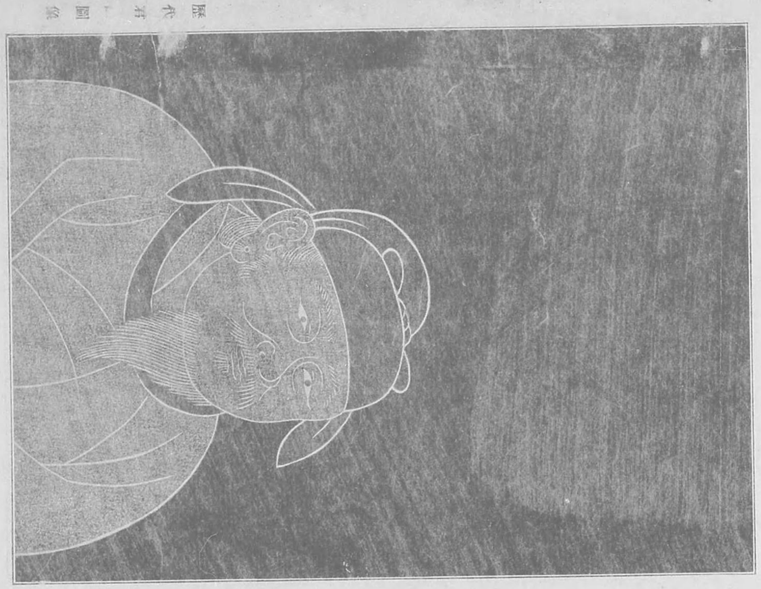
（唐）高祖（李淵）

（梁）昭明太子（統）



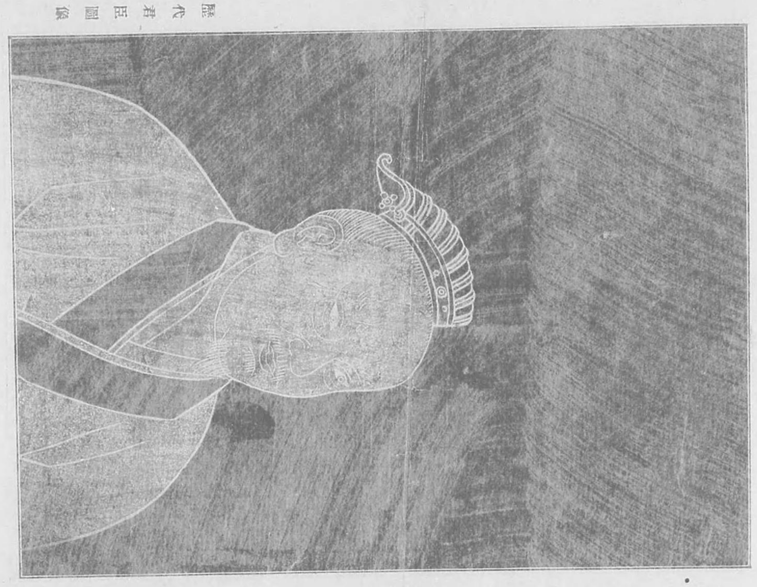
歷代君臣圖像

（唐）高祖（季調）明君



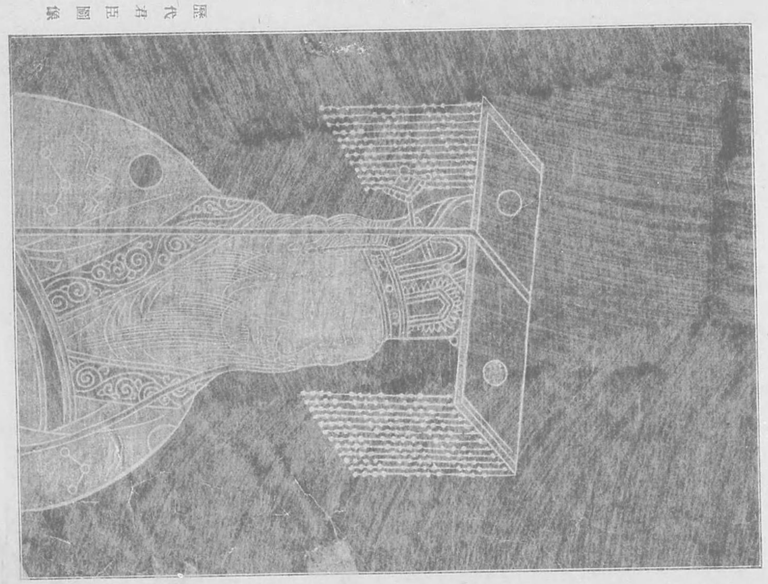
歷代君臣圖像

（唐）李靖（名勣）



歷代君臣圖像

（梁）昭明太子（文選の著者）



歷代君臣圖像

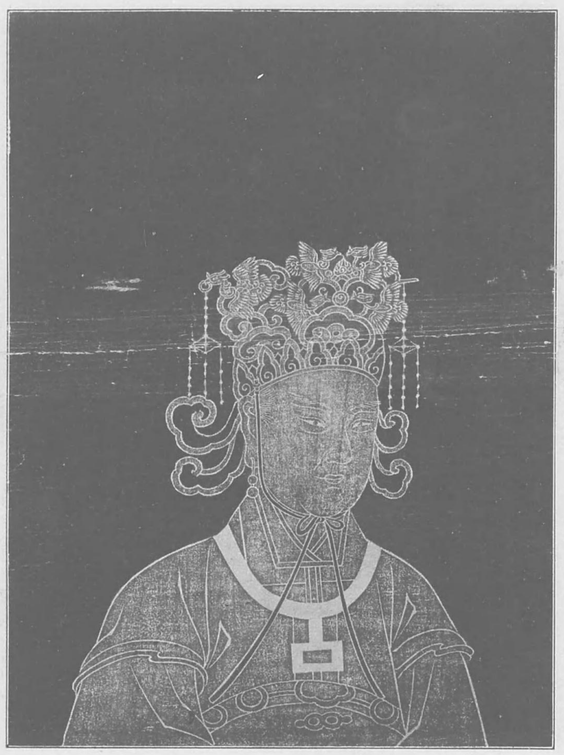
（隋）文帝（楊堅）（名君）

に襲ひて之を擒にせる如き、攻伐の功頗る多く、盛名遙に古名將の上に出でたり、靖將畧に加ふるに、王佐の才を以てし、出でゝは將たり、入りては相たり、貞觀の治に寄與する所、至大なるものあり、功によりて衛國公に封せらる、帝の信任最深く、盛名の下能く他の構陷を免れて其身を保てり、貞觀十七年功臣の像を凌烟閣に畫くに當りて、靖も亦其選に入る、兵法あり世に傳へらる。

秦始皇帝の死するや、胡亥立て二世皇帝となり、趙高を用ひて政を專にし、遂に秦を滅ぼす、漢高祖の天下を得るや、呂后の專政あり、漢室の衰微、之を王莽に奪はるゝに至る、後漢の末、宦官の專權、之を廢して之を弑し、晉王廣を元帥とし諸將道を分ちて陳を伐ち、後主叔寶を虜にし、終に南北を合一して天下を統平せり、開皇二十年太子勇を廢す、晉王廣立て納子となる、仁壽四年帝病に臥し、太子の爲に弑せらる、在位二十三年なり、帝治道に勵精し、賦を減じ荒に備へ刑を省き樂を定むる等、功績の記すべきもの多し、恨むらくは詐力を以て天下を得たるが爲に、猜忌深く苛察に過ぎ、功臣故舊を戮し、嫡を廢して愛を立て、終に禍亂を釀成せしことを。

（唐）太宗（季世民）（英雄）

歷代君臣圖像



（唐）則天武后（女傑）

歷代君臣圖像

（唐）杜如晦（名臣）

歷代君臣圖像

（唐）房玄齡（名臣）

歷代君臣圖像

等館に隔て書を隔み字を喜ぶ。謂は克明、杜如晦は斷を好む。流風一外人擧のせ好む。而人なり。柴宗の人と稱世弘時南交機し

杜如晦（唐）

（隋太宗明貞觀四年皇紀二千二百六十四年西紀六三〇年）

杜如晦は、京兆杜陵の人なり。父杜ぶ。柴宗に仕へ、隋の末、大興令となり、天下の亂るるを見て、秦王に謂ひて曰く、天下の人、王に歸するは、猶ほ水の下に就くが如しと。王、之を太宗に薦め、秦王府の文學館に入れ、房玄齡と共に、謀を帷幕に參ず。王、即位するに及び、如晦、中書侍郎に進み、玄齡と共に、相と爲り、天下の人、之を稱して、房杜と稱す。如晦、性、剛斷、玄齡、性、謀を好む。如晦、玄齡に、謀を出だすに、如晦、之を斷じ、如晦、玄齡に、謀を出だすに、玄齡、之を斷じ、兩人、相、和して、以て、天下を治めしに、如晦、玄齡、相、和して、以て、天下を治めしに、如晦、玄齡、相、和して、以て、天下を治めしに、如晦、玄齡

世季（唐）太宗

則天武后（女）（唐）

杜如晦（唐）

唐太宗貞觀四年（日本紀元一九〇年　舒明天皇二年）西暦六三〇年

杜如晦字は克明、杜陵の人なり。人となり英爽にして書を喜び風流を好む、而も内に大節を抱いて機に臨みて善く斷せり。太宗未だ秦王たりし時、弘文館を開いて文學の士を集む。杜如晦、房玄齢、虞世南等總べて十八人學士たり。之を十八學士と稱す。時に臣僚多く外に出でゝ州官となる。如晦亦出づ。時玄齢王に謂へらく如晦は王佐の才なり。天王四方を經營せんとせば如晦にあらざれば不可なりと。王依て高祖に奏して之を留めて參軍となし、常に帷幄の機密に參與せしむ。裁決流るゝが如し。太宗帝位に即くに及んで、朝政に參與し、普く賢能を擧げて、適才を適處に置き、凡そ臺閣制度典章文物の創始は毎に房玄齢と討定す。玄齢善く謀り如晦善く斷じ、二人を同ふして宏謨を輔佐す。故に唐代賢相を稱するもの、必ず先づ房杜を推す。貞觀四年如晦卒す。太宗慟哭手づから虞世南に詔して碑文を勒せしむ。語りて如晦の事に及ぶ毎に、必ず流涕せりといふ。以て君臣遭遇の厚きをみるべきなり。

房玄齢（唐）

唐太宗貞觀二二年（日本紀元一三〇八年　孝德天皇大化四年）西暦六四八年

房玄齢字は喬幼、唐朝の元勳なり。幼にして警敏、十八歳にして進士に擧げらる。高孝基玄齢を見て歎じて曰く、僕人を閲すること多し。未だ此郎の如きものを見ず。異日當に國器たるべしと。玄齢夙に王佐の道を學び、太宗に從て其帷幄に參し、股肱の臣たり。唐天下を統一するに及び、玄齢を以て社稷功臣第一となす。初め太宗秦王として功天下を蓋ひ、身之れが爲めに屢々危地に陷りたりしも玄齢如晦其間に處して善く謀り善く斷じ、終に無事天位を踐むに至れり。太宗侍臣に問ふに創業守成孰れか難きを以てするや、玄齢創業の難きを以て對ふ。蓋し自ら太宗を佐けて天下を定め、百死を出で一生を得、艱難具さに嘗むるを以てなり。玄齢相位に居ること十五年、貞觀二二年、七十一にして薨す。太宗悲痛自ら勝へず。謚して文昭といふ。玄齢能に矜らず、美は乃ち人に推讓せり。開國の元勳として將た治世の賢相として、勤勞三十二年間、惠澤民に加はり皇基依て以て建立せしも、之を其主に歸して又己れの功を言はず。太宗之を後漢の鄧禹に比せり。王者の起る必ず碩輔ありとは、玄齢の如き是なり。

太宗（季世民）（唐）

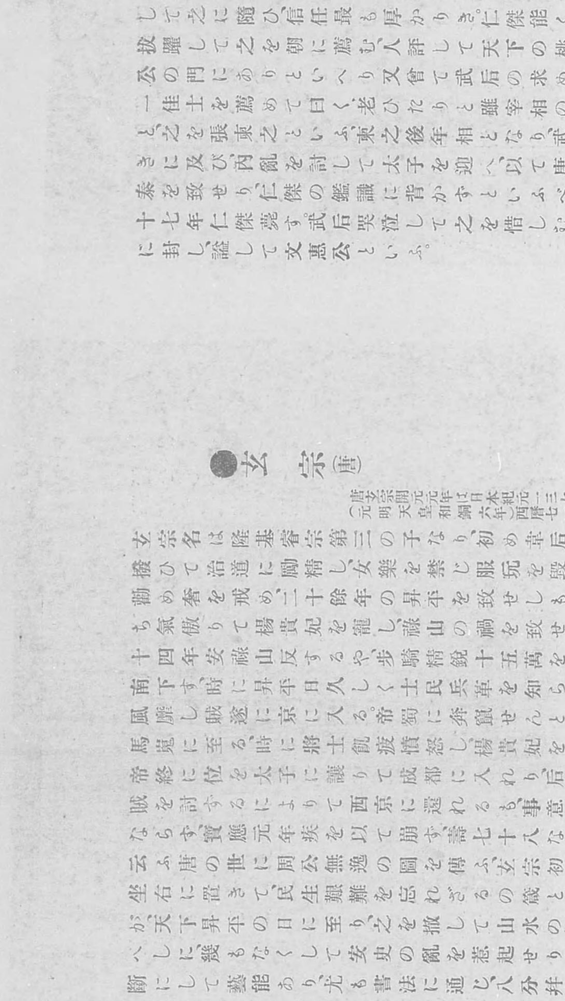
唐太宗貞觀元年（日本紀元一二八七年　推古天皇三五年）西暦六二七年

太宗名は世民、生れて龍鳳の姿あり。天性英邁絶倫にして、神謀雄略に富む。四歳の時相者あり曰く此兒異相あり、弱冠にして必ず能く濟世安民の功を擧げんと。因て世民と名づくとはいふ。年十八にして兵を起し、乃父を輔けて禍亂を戡定し、洪業を成遂せり。海内一に歸するに及びて、更に文德を興し儒宗を尊敬し、仁義を勸行し、直諫を容れ、刑罰を輕くし、賦を薄ふし民をして衣食餘りあらしむるを期せり。曾て曰く君は國に依り、國は民に依る。民を刻して君に奉ずるは、猶ほ肉を割き腹に充づるが如し。腹飽きて身斃れ、君富みて國滅ぶと。是に於て路落ちたるを拾はず、夜戸を鎖さず、堯舜の治と雖之に過ぎずと稱せらる。在位二十四年にして崩ず。太宗能く才を用ゐ、誠を人の心腹に置く。房玄齢、杜如晦、魏徵等の英才皆創業の功臣として其用をなし、君臣遭遇の深且厚を見るに足るものあり。常に爽々たる神采自ら群臣の畏懼する所たるを知り、溫顏を以て群臣に對し、能く其胸臆を吐露せしめたり。太宗又翰墨に工みなり、蘭亭の眞蹟を得て日夕愛玩し、崩ずるに臨み、遺詔により之を棺中に收めたりと傳へらる。

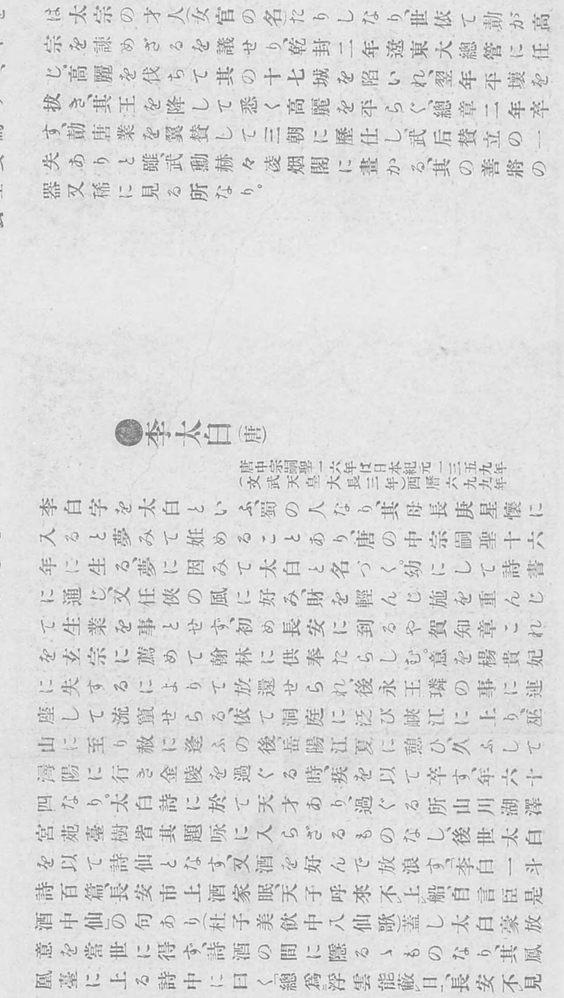
則天武后（唐）

唐中宗の神龍元年（日本紀元一三六五年　女武天皇慶雲二年）西暦七〇五年

則天武后名を曌といひ、荆州都督武士彠の子なり。生れて美容あり、太宗の時年十四にして選まれて才人となり、帝崩じ高宗位に即くに及び、又召されて後宮に入り、昭儀の官に進み、終に皇后となる。是より國政を參り聞き、威權赫々人主を凌げり。高宗崩じ中宗立つ、武后屢々廢立を行ひ、中宗の嗣聖七年自ら皇帝と稱して大權を總攬し、國を周と號す。武后初め僧懷義を寵し、后張易之及張昌宗を寵す、自ら人心の己れに服せざるを知り、且つ人の己れの内行を議せんことを恐れ、盛んに告密の門を開き、其爪牙にかゝりて殺戮せらるゝもの、擧げて數ふべからず。又大に唐の宗室を殺せり。然れ共性明敏果斷にして善く人を用ゐ、賢才も樂んで其用をなせり。魏元忠、婁師德、狄仁傑、姚元崇、宋璟等皆名相賢臣として朝に顯はる。武后疾篤きに及び、丞相張東之等太子を東宮に迎へ、易之昌宗斬り、武后を上陽宮に遷して内亂を鎮定せり。中宗の神龍元年殂す。年八十二なり。武后文史に渉獵し、翰墨に工なり、古書跡を得て練習把翫し、筆力益々進み、其行書如きは丈夫の氣ありと稱せらる。



（唐）狄仁傑名



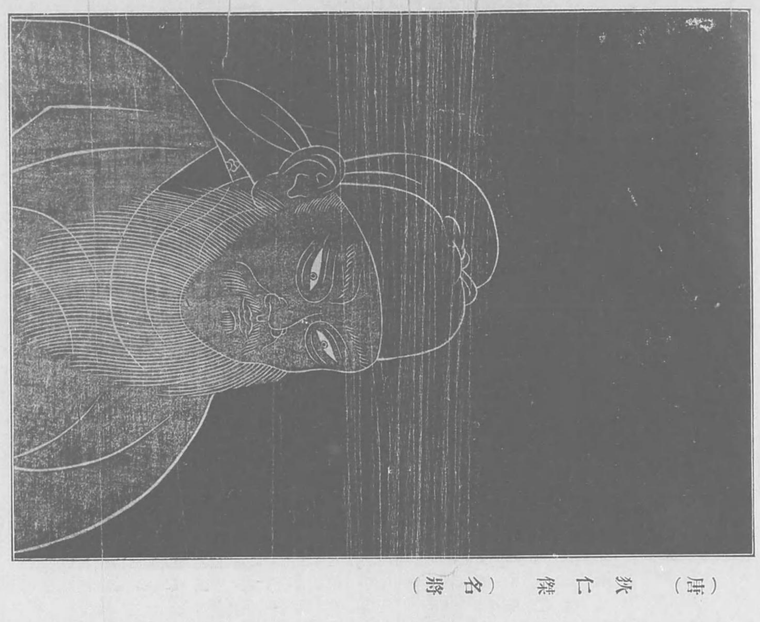
（唐）李勣名

●狄仁傑（唐）

（唐中宗文武天聖皇后）

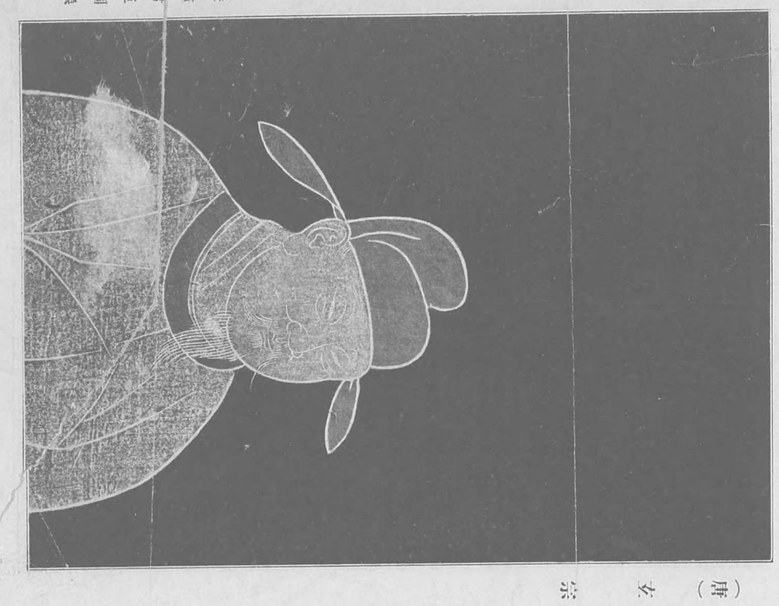
狄仁傑字は懷英、太原府に生る。唐の太宗に仕へて侍御史、百官を糾彈し、百官皆之を畏れ、百官の姑息を去り、百官の手を立て、百官の紀綱を正し、百官の風俗を改め、百官の冠帶を正し、百官の祭祀を正し、百官の婚姻を正し、百官の喪葬

帝終に位を太子に讓りて成都に入れり、后群臣の賊を討ずるによりて西京に還れるも、事意の如くならず、寶應元年疾を以て崩ず、壽七十八なり、傳へ云ふ唐の世に周公無逸の圖を傳ふ、玄宗初め之を坐右に置きて、民生艱難を忘れざるの箴となせしが、天下昇平の日に至り、之を撤して山水の圖に代へしに、幾もなくして安史の亂を惹起せりと。帝英斷にして藝能あり、尤も書法に通じ、八分幷に章草に工みなり、曾て遺書を採りて孝經を註し、自序を制し、八分を以て之を書せりと。



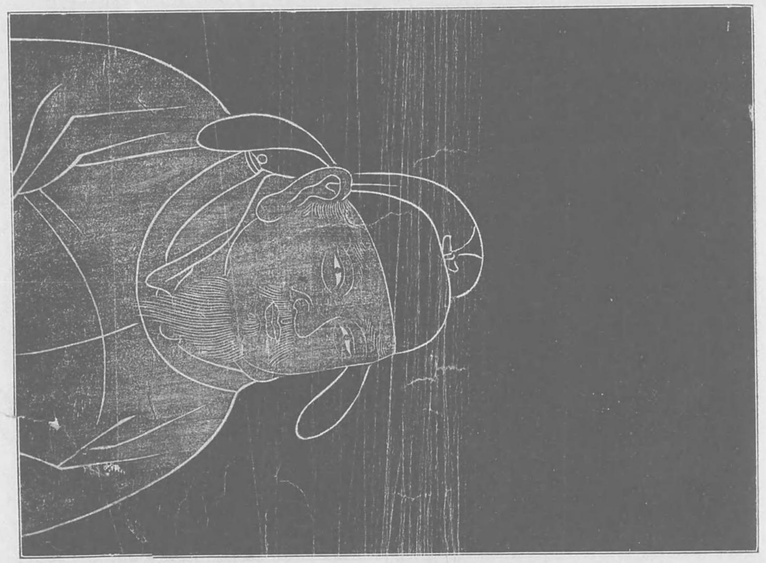
（唐）狄仁傑（名將）

歷代君臣圖像



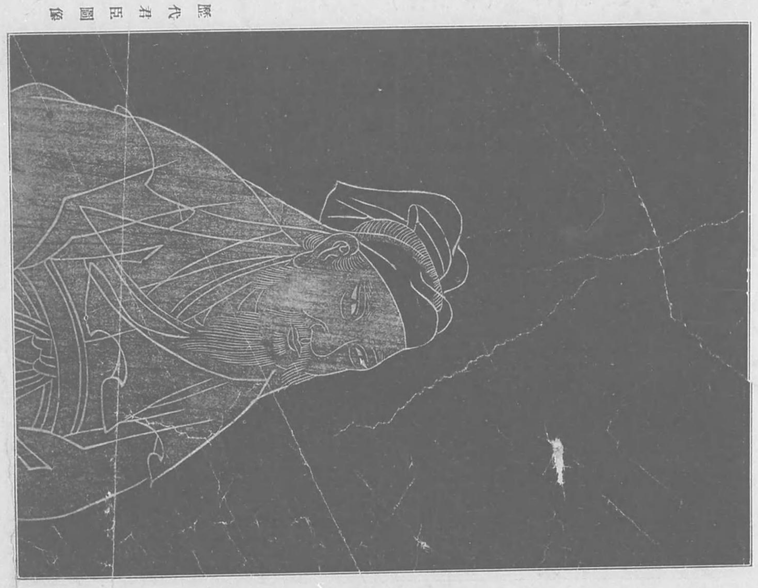
（唐）玄宗

歷代君臣圖像



（唐）李勣（名將）

歷代君臣圖像



（唐）李太白（大詩人）

歷代君臣圖像

灣陽に行き金陵を過ぐる時、疾を以て卒す、年六十四なり。太白詩に於て天才あり、過ぐる所山川湖澤宮苑臺樹皆其題咏に入らざるものなし、後世太白を以て詩仙となす、又酒を好んで放浪す、李白一斗詩百篇、長安市上酒家眠、天子呼來不上船、自言臣是酒中仙の句あり、杜子美飲中八仙歌蓋し太白豪放意を當世に得ず、詩酒の間に隱るゝものなり、其鳳凰臺に上る詩中に曰く、總爲浮雲能蔽日、長安不見使人愁、と、江湖の遠きにあるも、猶君を思ふの深きを見るべし、嘗て書法を張旭に受け、其眞筆唐李白三帖あり、著述に卿堂集及李翰林集あり。

（唐）郭子儀（忠臣）

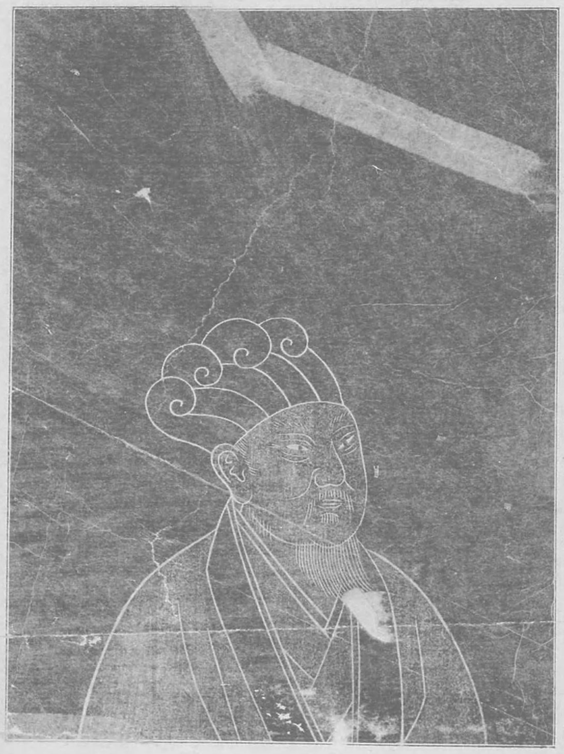
歷代君臣圖像

（唐）柳子厚（大文豪）

歷代君臣圖像

（唐）顏眞卿（忠臣）

歷代君臣圖像



（唐）韓退之（大文豪）

歷代君臣圖像

顏眞卿（唐）

（唐德宗興元元年歿年七十四）

顏眞卿字魯公、琅琊臨沂人、五世祖師古、隋秘書監、高祖之推、北齊黃門侍郎、祖父昭甫、太子洗馬、眞卿幼孤、母殷氏、親教書、眞卿精楷、開元十五年、進士、調校書郎、天寶初、爲平原太守、時安祿山反、眞卿與從父兄杲、收河北十七郡、共拒賊、賊將史思明、攻陷常山、執杲、眞卿、以兵少、不敢戰、乃間行、至行在所、上拜眞卿、爲御史大夫、時李光弼、郭子儀、皆以大將、眞卿、以文章、與光弼等、同時、進爲三公、眞卿、性剛直、不阿權貴、嘗與宰相、爭事、出爲外郡、大曆中、入爲刑部尚書、德宗時、盧杞、忌眞卿、使宣慰、眞卿、至、杞、使人、問、何以來、眞卿、曰、來、問、相公、杞、大怒、遣人、縊殺、眞卿、年七十四、

柳子厚（唐）

（唐德宗貞元元年歿年四十七）

柳宗元字子厚、河東人、高祖奉、北齊、中書侍郎、祖父鎮、太子詹事、父鎮、殿中侍御史、宗元、生、二歲、能文、年九歲、能、屬文、貞元九年、進士、調、藍田尉、擢、拾遺、入、爲、禮部員外郎、王叔文、與、宗元、善、叔文、用事、宗元、與、叔文、同、謀、叔文、敗、宗元、貶、永州、十年、召、還、復、出、爲、柳州、刺史、宗元、文、與、韓愈、齊、稱、愈、爲、文、宗、宗元、爲、文、宗、愈、爲、文、豪、宗元、爲、文、傑、愈、爲、文、豪、宗元、爲、文、傑、愈、爲、文、豪、宗元、爲、文、傑

●顔眞卿（唐）

唐德宗興元元年（日本紀元一四四四年　桓武天皇延暦三年）西暦七八四年

顔眞卿字は清臣、琊琊臨沂の人にして、顔師古（唐初の人）五世の從孫也、玄宗の天寶一四年安祿山反し精兵十五万を率ゐて南進し、進みて東京を陷る、時に昇平日久しく上下震駭爲さん所を知らず、眞卿平原の太守たり、兵を起して賊を討す、玄宗初め河北賊に從ふを聞き、歎じて曰く二十四郡曾て一人の義士にしてのみと、眞卿賊を討するに及んで深く其義を喜べり、眞卿歴官して太子の太師に至る、李希烈反する時、盧杞建議して曰く、眞卿は四方の信望する所、往いて諭さば、師を勞せずして平定せんと、是れ盧杞の眞卿を陷るゝ策たりしなり、眞卿使命を奉して李希烈の所に到る、希烈之を留めて歸さゞること殆二歳、眞卿屈せず、賊を罵りて終に縊殺せらる、時に興元元年也、魯郡公に封ぜらる、眞卿天性剛直にして大節あり、色を正ふして朝に立ち、姦人の忌む所となりて禍を買ふに至れり、而も危に臨んで命を受け、死して君命を辱かしめず、其忠烈凛として秋霜の如きを見る、眞卿博學にして詞藻に工なり、又書を張旭に學び楷草共に絶妙の域に達す、其筆蹟存するもの皆之を寶とす。

●柳子厚（唐）

唐德宗貞元九年（日本紀元一四五三年　桓武天皇延暦二二年）西暦七九三年

柳宗元字は子厚、河東の人なり、唐の德宗貞元九年博學宏詞科の進士に擧げらる、初め校書郎となり、監察御史に累遷し、禮部員外郎に拔擢せらる、順宗尚太子たりし時、佞臣王伾、王叔文等出入して歎娛し、異日將相を僥倖せんことを希ひ、密に黨を結びて死交をなせり、在朝の名士にして速進を求むもの八名之れに黨す、子厚亦其一人たり、順宗帝位を繼き、八閲月にして、位を憲宗に讓る、憲宗立て王伾王叔文の黨皆遠貶に遇ふ、子厚は永州の司馬に貶せらる、元和十年に至りて柳州の刺史に拜より世人柳柳州と稱せり、官に在ること十四年にして卒す、柳州の士民子厚を懷ふて廟を立てゝ之を祭る、子厚天資挺秀文章卓偉、眞に儒林の泰斗たり、當時文運隆昌、燦として繁星の天に輝くに似たり、而して子厚は韓退之と相對して、唐代文星の双璧たり、其沈痛勁健の長技に至りては、唐宋を通じて第一人と稱せらる、廟廊の偉器を以てして、終に大成を見ずして止みしは、一たび佞臣に黨せるもの其累をなせる歟、著述に龍城錄、河東先生集、柳河東外集等あり。

●郭子儀（唐）

唐德宗建中二年（日本紀元一四四一年　桓武天皇天應元年）西暦七八一年

郭子儀は唐朝の名臣なり、天寶の際安祿山叛し、賊兵東京を陷るに當り、子儀朔方の節度使たり、李公弼と共に賊將史思明と戰て之を破り、首として河北の數郡を恢復せり、至德二年祿山の子慶緒父を殺して自立するや、子儀廣平王俶に副として、大兵を率ゐて賊を討ち、大に之を破り、西京に入り尋て東京を復せり、代宗の廣德二年吐蕃入寇す、子儀又擊て之を却く、后回紇吐蕃相結んで入寇するや、子儀數騎と共に出でゝ回紇を說きて、之と結び、吐蕃を擊て之を破れり、子儀身を以て天下の安危を繫ぐこと三十年、主の倚信を得て位人臣を極め、德高く才も亦全しと稱せらる、代宗常に大臣と呼んで名をいはず、號を尙父と賜ひ、汾陽王に封ぜらる、家門亦繁榮し、八子七婿皆貴顯に至る、建中二年卒す年八十三（或は八十五）謚して忠武といふ。

●韓退之（唐）

唐德宗貞元一八年（日本紀元一四六二年　桓武天皇延暦二一年）西暦八〇二年

韓愈字は退之、河南修武縣の人なり、生れて聰明絶倫、七歳にして五經を讀破し、長じて六經百家の學に通曉す、唐の德宗の時、諫議大夫陽城職にあること七年にして曾て一たびも諫めざるや、退之爭臣論を作りて之を譏る、貞元十八年に擧げられて國子博士となり、監察御史に遷り、后刑部侍郎の官に進む、元和十四年憲宗佛骨を迎へて京師に入れ、禁中に留むること三日にして諸寺に歷送するや、王公士民の禮拜喜捨するもの群をなす、退之乃ち佛骨表を上り、佛の治道に益なきを痛論し之を水火に投せんことを乞ふ、憲宗怒りて潮州の刺史に貶す、路、邊州に入りて山河凄凉なるを見、痛恨禁せず、「雲横秦嶺家何在、雪擁藍關馬不前」の句あり、后穆宗の世召還せられて吏部侍郎となり、尋て京兆尹となる、卒して昌黎伯に封せられ、文公と謚す、退之學古今を究め、文章粹然千古を凌鑠するに足る、六朝四六の體を排して古文の復興に努め、一世の學徒靡然として之れに歸し、孟軻以來中興の大儒と稱せらる、其著論語筆解、順宗實錄、昌黎先生文集等あり。

●太祖（宋）

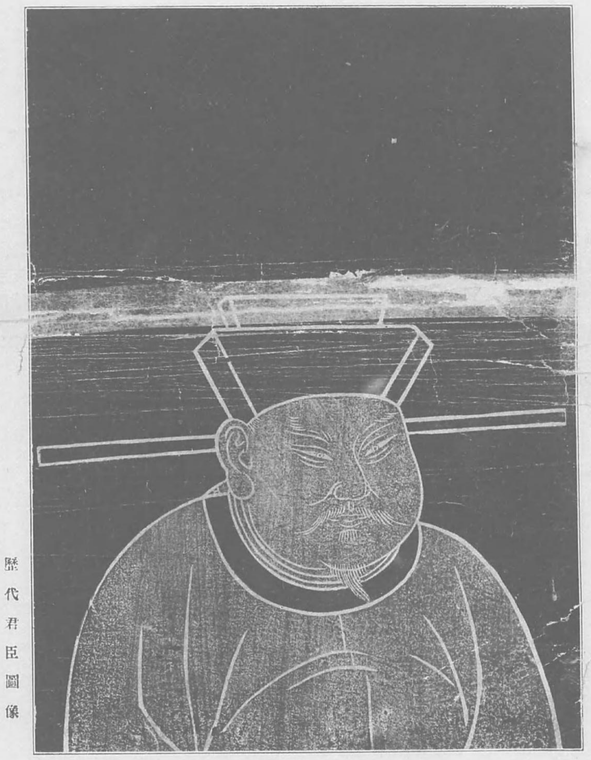
（宋仁宗天聖元年は日本後冷泉天皇寛仁元年に当る西紀一〇二六年）

宋太祖の姓は趙、諱を匡胤といふ、其先は涿郡の人にして、後漢の後裔なりと、唐末五代の間、黎民塗炭に陥り、天下分裂して、諸侯の兵革相尋ぐ、父弘殷は、雄偉にして、長じて後周の世宗に仕へ、殿前都指揮使に進み、恭帝の時、禁軍を率ゐて、北漢を攻め、軍中に推されて、天子となり、国を宋と号し、開封に都す、是時、天下の大勢、北は遼に、南は唐に、西は蜀に、各分れて、鼎立の形を成す、太祖、即位すること、十六年、崩ずるに、年五十、在位十六年、寿五十、廟号を太祖と、

●仁宗（宋）

（宋仁宗嘉祐八年は日本後冷泉天皇寛徳元年に当る西紀一〇四四年）

宋の仁宗名は禎、真宗の子なり、母は李氏、劉皇后之を宋の明君に、雖員帝明、范しめ、簾二す、上を



（宋）太祖（君臣圖）（豐君）

（宋）仁宗（君臣）

（宋）高太尉（名將）

（宋）周茂叔（學者）

程明道（宋）

（宋神宗元豐八年は日本歴紀一元一〇八五年）

程顥字は伯淳、少にして秀爽頴悟なり。十歳詩賦を作り、年十二三にして老成人の風あり。宋の周濂溪先生に受く。神宗の熙寧二年、賢良方正の官に舉げらるゝ。風采のあり。弟と共に二を經術を爲し、十數歳、弟頤と共に監察御史の官に舉げらる。神宗顥と問答し、賢才を推挽し、雅博にして親を推薦し、喜怒を深慮に出さず、夫に居り

●程明道（宋）

（宋神宗元豐八年は日本紀元一七四五年（白河天皇應德二年）西暦一〇八五年）

程顥字は伯淳、少にして秀爽穎悟なり。十歲詩賦を作爲し、十二三にして老成人の風あり。弟頤と共に經術を濂溪先生（周茂叔）に受く。宋の神宗の熙寧二年に監察御史の官に擧げらる。神宗顥と問對し、喜で曰く、眞に御史の體を得たりと。賢才を推薦すること十數、弟頤亦其首に居り、推挽敢て親を避けざりき。後新法と意合はずして去る。顥博學深造、大に古聖の道を闡明し、百世其惠に依るもの深し。坐すの時泥塑人に似たるも、之に接するに及んで一團の和氣あり、渾然として天成なりしといふ。元豐八年五月卒す、壽五十四歲なり。文彥博墓論を採り、其墓に表して明道先生といへり。弟頤之が序を作る。中に曰く、一四〇〇年の後孟子より算す）に生れ、不傳の學を遣經に得、異端を辯じ邪說を息め、聖人の道をして亦世に明かならしむ、孟子の後一人のみと。謚して純公といひ、文潞公に封せられ、孔子の廟庭に從祀せらる。

●程伊川（宋）

（宋徽宗の大觀元年は日本紀元一七六七年（鳥羽天皇嘉承二年）西暦一一〇七年）

程頤字は正叔は程顥の弟なり。少ふして高識あり、兄顥と共に業を周濂溪に受く。力學古を好み、業成りて斯文を以て己れが任となし、年五十にして仕進を樂まず、貧賤に安んじて晏如たり。宋の哲宗の時召されて侍講となる。眉山の人蘇軾亦經筵にあり、當時洛黨川黨朔黨等の黨派あり。頤、洛黨の領袖たり、軾は川黨を率ゐて、互に相軋轢せり。後頤と軾と皆罷めらる。頤禮にあらずんば行はず、威儀嚴正、狎るべからず。清貧節を守り、聖世の逸民を以て自ら居れり。識者歎じて曰く、眞儒なりと。孟軻沒後孔子の傳、泯亡繼がず、二程出でゝ易傳を著はし、大學中庸の二書を表章す。儒の中興と稱せらる。朱子之れが章句或問を作り、聖道漸く普照すといふ。兄顥の死するや、文彥博其墓に表し、頤之れが序を作る。人に語りて曰く、吾れの道を知らんと欲せば此序を觀て可なりと。徽宗の大觀元年九月卒す。嘉國公に封せられ、正公と謚し、孔子の廟庭に從祀せらる、世呼んで伊川先生と號す。

●蘇東坡（宋）

（宋神宗元豐二年は日本紀元一七三九年（白河天皇承暦三年）西暦一〇七九年）

蘇軾字を子瞻といひ、東坡居士と號す。眉山郡の人蘇洵の長子なり。弱冠にして經史に淹通し、文章雄渾光芒百丈、一瀉千里の勢あり。歐陽修曾て進士を考試す。軾の文を見て驚いて曰く、老父當に一頭地を此人に避くべしと。宋神宗の天豐二年新法を攻擊するによりて黃州に謫せらる。前後赤壁賦は此時に於て成る所なり。哲宗の時召還され、翰林學士となり、吏部尚書に轉じ侍讀を兼ね、程頤（伊川）と共に經筵にあり、軾諧謔を喜び、頤は禮法を以て自ら持し、二人性相合はず、黨を樹てゝ相攻むるに至る。軾後又英州に流竄せらる。是より廢朝に入りしも終に其志を充たす能はず。軾志氣超邁器識宏恢、議論侃諤挺然大節群臣其右に出るものなし。而して之を以て却て禍を取り、聰明享福人間少、僥倖得名世上多」といつて自ら嘲れり。其嘻笑怒罵皆文をなし、咳唾亦悉く珠をなす。眞に文の聖なるものなり。著作に東坡集、東坡續集あり。又翰墨に工にして尤も世の貴重する所なり。父老泉弟頴濱共に能文を以て大名あり、世人之を稱して三蘇といふ。

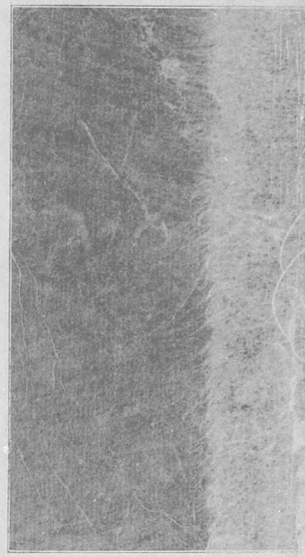
●司馬溫公（宋）

（宋哲宗元祐元年は日本紀元一七四六年（堀河天皇應德三年）西暦一〇八六年）

司馬光字は君實、生れて聰明なり。七歲にして春秋を講じ、十五歲にして音曆天文書數皆通ぜざなしといふ。宋仁宗の寶元の初め、進士に第し、官を累ねて端明殿の學士となる。此時王安石朝に立て新法を布く、光上疏して其不可をいひ、自ら乞ふて出でゝ西京の留臺に判たり。後官を退いて洛に居ること十五年、神宗崩御の時入闕するや、衛士望見して爭ふて馬首を擁し、呼んで曰く、公洛に歸ることなく、留りて天子を相け百姓を活せと。哲宗の元祐元年召されて左僕射となり、斷々として安石等立つる所の新法を廢す。相となりてより八閱月にして卒す。京師の民之を聞いて市を罷めて哀を表し四方葬に會するもの親戚を哭するが如し。太師溫國公を贈り、文正と謚す。溫公天資粹美、忠孝誠實にして、學を好んで淸苦に甘んぜり。居室蕭然圖書室に滿つ。嘗て曰く、我人に過ぐるものなし。但平生爲す所、人に對して言ふべからざるものあらずと。新法を憂ふること終始一日の如く、終に之を廢して素懷を達す、以て其君に盡すの厚くして民を懷ふの深きを見るべし。眞に宋朝の名臣にして又百代君子の龜鑑たり。其著資治通鑑世に重んぜらる。

蘇東坡（宋）

司馬溫公（宋）



周靈王七年は日本紀元前六四七年

●管　仲（周）

管仲字は夷吾、潁上の人なり。少時鮑叔牙と友たり。鮑叔、仲の賢を知りて、之を齊の桓公に薦む。桓公の小伯たりしとき、管仲公子糾に仕へて小伯を殺とせり。而も桓公怨を忘れて之を用ひ、委するに政治を以てす。仲、齊に相として、貨を通じ財を積み、富國强兵の實を擧げ終に齊國をして諸侯に霸たらしめたり。仲、富王室に擬せしも、齊人侈れりとなさず、其功を德とするによるなり。仲初め貧困にして鮑叔と共に賈をなし、自ら多く配當せしも、鮑叔以て意となさざりき。嘗て事を謀りて究困し、又幸て二戰して二走せり。然も鮑叔若以て愚を易へざりき。終に桓公に薦めて之を任用せしめ、已れ之に下れり。天下管仲の賢を多とせずして、鮑叔の能く人を知るを多とせりといふ。仲の病むや、桓公疾に就て易牙、開方、豎刁の相とすべきや否を問ふ、仲答之を斥く、周の襄王七年管仲卒す。後桓公仲の言を用ゐずして三子を近け、三子の專權を見るに及べり。仲著はす所管子あり。治道の要を說く。論卑しと雖行ひ易く、以て政治家の卓見を見るべし。

漢孝惠帝二年は日本紀元前一九六年（西暦紀元前一九八年）

●蕭　何（漢）

蕭何は沛縣の人なり、秦に仕へて刀筆の吏となる。秦の末路沛人劉邦兵を起すに當り、何、曹參と共に沛の子弟三千人を收めて劉邦に屬す。秦滅びて項羽自ら西楚の霸王と稱し、約に背き劉邦を漢王に封ず。漢王怒りて羽を攻めんとするや、何之を諫め、先つ漢中に王とし、民を養ひ賢を招き、徐ろに天下を圖るべきを說く。劉邦國に就き、何宰相となる。韓信初め項羽に仕へて用ひられず、去りて劉邦に歸す。何、信の能を知り、之を劉邦に薦めて大將軍となし、終に諸將を部署して中原に出づ。何留りて租を收め軍糧を供給す。又宗廟を立て縣邑を設け關中の戶口を計りて轉漕兵を調する等、施設宜しきに合ひ、懸軍をして欠乏を告げざらしめたり。劉邦項羽を滅し天下を統一するに及び、大に功臣を封ず。劉邦曰く、國家を鎭し、百姓を撫し、饋餉を給し、根道を絕たざるは、吾蕭何に如かずと。乃ち何を酇侯となし、食邑最も多く、且つ劉敬殿に上り、入朝するに趨らざるの殊遇を賜ふ。惠帝の二年七月歿す。

漢昭帝始元六年は日本紀元前八八年（漢宣帝天皇三年）西暦紀元前八〇年

●蘇　武（漢）

蘇武字を子卿といふ、京兆の人なり。漢の武帝に仕へて中郎將の官に任ず。天漢元年匈奴に使す。單于之を降さんと欲し、武を囚へ大窖中に置き飲食絶せず。武、雪と旃毛とを嚙んで之を咽み、數日死せざりしかば、匈奴以て神となし、更に北海無人の地に移して羝を牧せしむ。武、此處にありて、野鼠を掘り草實を去りて食し、繞に命を繫げり。而も起臥必ず漢の節を持して放たず。此時武の友李陵匈奴に降りて官爵を得、武に降を勸むれど武從はず。後昭帝匈奴と和睦し、漢の使者匈奴に至り、武、終に漢に歸ることを得たり。時に始元六年なり。武、幾地に留まること十九年、壯者の時出でゝ白髮にして歸り、丁に其節を全ふせり、功を以て典屬國に拜せらる。後宣帝の時功臣十一の像を麒麟閣に畫くや、蘇武亦其一人たり。

漢成帝建始元年は日本紀元前二五年（漢宣帝天皇三年）西暦紀元前一七年

●鄭　玄（漢）

鄭玄字を康成といふ、高密の人にして後漢の大儒なり。時に費融の人馬融字は季長あり、博覽宏識にして一世の景仰を受け、從學するもの千餘人、鄭玄亦從て業を受く。勤苦二星霜を閱し經書に精通せり。漢の靈帝建章年中黨錮の災を遁けて鄉里に隱棲するに及び、學徒の從遊するもの數百千人を以て數ふるに至る、詩書易禮論語孝經等の疏百餘万言を著はせり、北海の相孔融、玄を見て深く之を敬す。書に黃巾の賊數万人立に途に遇ふや、皆拜して過ぎ、相約して縣界を侵さず、其德望以て見るべきなり、袁紹冀州に仲として應聘自得、論議を好み、賓客を會し、謔ふて異端を設け、百家互に論難す。玄之れと辨對するに至りて、皆其宏識に嘆服せりといふ。

漢和帝永元四年は日本紀元九二年（漢章帝天皇二年）西暦紀元一二年

●班　固（漢）

班固字は孟堅、扶風安陵の人なり。東漢の儒者彪の子にして超の兄なり。九歲にして能く文を屬し、長ずるに及て博覽に淹通す。彪が撰する處の前史詳かならざるを以て、別に漢書を成さんと欲す。明帝之を使び後書郎に拜して前史の修撰を續がしむ。章勅二十餘年建初年中に至りて完成す。建初四年章帝諸儒を白虎觀に會し五經の同異を議し固をして白虎通を作らしむ。和帝の永元の初め大將軍竇憲に從て匈奴を討ち、固漢の威德を石に刻す、憲殺さるゝ時固、連座して獄中に死す。年六十一。

晉武帝泰始元年は日本紀元前二六五年（魏元帝景元五年）西暦紀元二六五年

●羊　祜（晉）

羊祜字は叔子、泰山南城の人なり、晉武帝に仕て征東將軍となり、南城公に封ぜらる。武帝吳を滅ずるの志あり、祜をして荆州の軍事を管し吳を窺はしむ。吳將陸抗之れと對陣し、兩者の間使命常に相通ぜり。抗曾て祜に酒を遺りしことあり。祜之を飲んで疑はず、抗の疾むや祜、之れに遺るに藥を以てす。抗又疑はずして之を服せり、兩將相敵として相知るの深き此の如きものあり、吳人も亦祜の德化に服し羊公と稱して名を呼ばざるに至る。後抗卒し、祜始めて吳を討たんことを陳奏す。朝臣賈充等之を不可とし、杜預張華其議を贊す。祜疾を勉めて入朝し、帝に面奏して曰く吳を取るは必ずしも臣の行を要せず、但吳を平ぐるの後憂患を勞すべきのみと、祜卒す。時に咸寧四年なり。

（周）管仲（名臣）　（漢）蕭何（名臣）　（漢）蘇武（忠臣）

(周) 管仲 (名臣)　(漢) 蕭何 (名臣)　(漢) 張良 (忠臣)

(漢) 鄭玄 (學者)　(漢) 班固 (學者)　(晉) 羊祜

拜して前史の他撰を續がしむ。羊勤二十餘年建初年中に至りて完成し、建初四年章帝諸儒を白虎觀に會し五經の同異を議し固をして白虎通を作らしむ。和帝の永元の初め、大將軍竇憲に從て匈奴を討ち、固、漢の威德を石に刻す、憲殺るゝ時固、連座して獄中に死す。年六十一。

●羊　祜（晉）

（晉武帝泰始元年甲辰　紀元二五五年
（蜀後主景耀六年己酉　紀元二五八年）

羊祜字は叔子、泰山南城の人なり、晉武帝に仕て征東將軍となり、南城公に封せらる。武帝吳を滅するの志あり、祜をして荆州の軍事を督し吳を窺はしむ。吳將陸抗之れと對陣し、兩者の間使命常に相通せり。抗曾て祜に酒を遺りしことあり。祜之を飲んで疑はず、抗の疾むや祜、之れに遺るに藥を以てす。抗又疑はずして之を服せり、兩將相敵として相知るの深き此の如きものあり、吳人も亦祜の德化に服し羊公と稱して名を呼ばざるに至る。後抗卒し、祜始めて吳を討たんことを匯奏す。朝臣賈充等之を不可とし、杜預張華其議を贊す。祜の疾を勉めて入朝し、帝に面奏して曰く吳を取るは必ずしも臣の行を要せず、但吳を平くるの後聖慮を勞すべきのみと、祜卒す。時に咸寧四年なり。

(漢) 賈誼 (學者政治家)

賈誼は洛陽の人なり、年十八にして能く詩書を誦し文を屬せりと云ふ、河南の守吳公、誼の秀才あるを聞いて、召して門下に居らしめたり、前漢の文帝賢明にして文治に鋭意し、年少の誼を召して博士となす、時に年二十餘歲なり、帝の諮詢にして諸老先生の對ふる能はざる所、誼悉くこれに對へて其旨趣を盡せり、後九卿となりしも、天性秀才に特に優れ、敏達にして梁王の太傅に拜し、國人を傳ふ、一百年前三國夫人時、海の長ずる所、人に抗して、人傅に入り、(日本紀元一二八九年)

(唐) 馬周 (名臣)

馬周は茂陵の人なり、貧困にして文を屬せりと云ふ、河南の守吳公、誼の秀才あるを聞いて、召して門下に居らしめたり、前漢の文帝賢明にして文治に鋭意し、年少の誼を召して博士となす、時に年二十餘歲なり、帝の諮詢にして諸老先生の對ふる能はざる所、誼悉くこれに對へて其旨趣を盡せり、後九卿となりしも、天性秀才に特に優れ、敏達にして梁王の太傅に拜し、國人を傳ふ、一百年前三國夫人時、海の長ずる所、人に抗して、人傅に入り、(日本紀元一二八九年)

(唐) 魏徵 (名臣)

(南宋) 朱熹 (學者)

(周) 山東省鄒縣孟子廟正殿內孟子像

（臣外）徽　鐔　（唐）

（臣外）周　馬　（唐）

（宗治政者學）誼　賈　（漢）

●賈　誼（漢）

（漢文帝元年　日本紀元前一七九年）

賈誼は洛陽の人なり、年十八にして能く詩書を誦し文を屬せりといふ、河南の吳公、誼の秀才あるを聞いて、召して門下に居らしめたり、前漢の文帝賢明にして文治に銳意し、誼を召して博士となす、時に年纔に二十餘歲なり、凡そ帝の諮詢にして諸老先生の對ふる能はざる所、年少の誼悉く之れに對へて其旨帝意に合ふ、帝深く之を悅び、一歲の中超遷して大中大夫の官に至る、誼正朔を改め禮樂を起さんことを建言す、偶々梟鳥の賈誼の太傅に左遷せらるゝを憐み、徽遷して梁王の太傅に拜す、誼上れる治安策は識者國体に通達せるを稱せり、後九齡となりしも、天性秀才に好を嗜まず、二十三歲にして卒す、其上れる治安策は識者國体に通達せるを稱せり、後九齡となりしも、天性秀才に好を嗜まず、二十三歲にして卒す、其鵩鳥賦は誼長沙に居ること三年、鵩「不祥鳥」なりて飛んで舍に入る時、誼の長沙に作れるものなり、又新書あり。

●馬　周（唐）

（唐太宗貞觀一八年　日本紀元六四二　三〇四年）

馬周字は賓王、茌平の人なり、唐の名臣と稱せらる、周、少ふして微賤なり、太宗天縱其貴相あるを說く、關に入りて新豐の逆旅に舍し、酒一斗八升を命じ、悠然獨酌す、我之を異とす、中郎將常何の客に客寓して向の爲めに三十條事を論ず、太宗周を召して與に語りて大に悅ぶ、直觀十八年中書侍郎と御史を授く、貞觀十八年中書侍郎なり、後中書令に遷る、周、事を論ずる要を舉げ煩を去り、文理共に至り、聽者をして倦むを忘れしむ、帝曾て「綿瓜沖雪、必慶羽翼、股肱之寄、其在忠力」の四句を飛白を以て書し、周に賜ふ、君臣寄托の懽を見るべし、周薨する時年四十八なり。

●魏　徵（唐）

（唐太宗貞觀一七年　日本紀元六四二　三〇三年）

魏徵字は元成、下曲陽の人なり、唐太宗に仕へて良弼と稱せらる、初め太宗の兄建成に仕へ、屢々太宗を除かんことを勸む、建成殺さるゝの後、太宗徵を召して之を責む、徵屈せず、太宗寵して諫議太夫となす、上疏する所凡そ二百餘条、旨奏剴切帝の心にあらざるものなし、徵、王珪、房玄齡、杜如晦、と共に朝政に參與し、識見卓拔治道に裨補する所多し、太宗即位の初め、群臣と徵化を語り曰く、大亂の後夫れ治め難きかと、徵曰く五帝三王民を易へずして化す、湯武皆大亂の後に乘じ身太平を致す、行ふ所知同にあるのみと、貞觀四年天下豐作百姓太平を謳歌するや、帝悅んで曰く魏我に勸めて仁義を行はしむ、今既に效ありと、貞觀十七年魏徵卒す、帝歎じて曰く朕一鏡を亡へりと、自ら碑文を製して石に書せり、後宏君集太子に反を勸めて誅せらるゝや、徵曾て君集を薦めたるの故を以て、帝其の阿黨を疑ひて、立つる所の碑を碎せしも、後帝高麗を親征して功を成さず、悔恨して曰く、魏徵若し在らば此の如くならず、命じて復其碑を立つ隋書は徵が勅を奉じて撰せし所なり。

●孟　子（周）

（周顯王三六年　日本紀元前三七二年）

孟子名は軻、字を子輿といふ、魯の孟孫氏の後たり鄒縣に生る幼にして慈母三遷の教を被むり、長じて學業を孔子の孫子思の門に受く、業成りて齊の宣王梁の惠王に游事す、是時齊楚燕趙韓魏の六國秦と對峙して、合從連衡に忙しく、攻伐を以て要となし、詐術を以て賢なりとす、商君吳起孫子田忌の徒、各其君の爲に兵を强ふし敵を弱むるの計を講ず、孟子此間に立ちて獨唐虞三代の道を擧げ功利を排して仁義を說けるを以て、時勢に迂遠なりとして終に用ひられず、是に於て退いて萬章の徒と詩書を序して孔子の意を述べ、楊墨の學說を排し、難疑答問して孟子七篇を作る、其浩然の一章說く所の如き、立言正大、正氣凜々、百世の下人を感ぜしめ、以て正しむ、仁義を明にし人心を正すの功、定に孔聖に亞ぐものあり、周の赧王二十六年正月十五日卒す、壽八十四、謚して鄒國亞聖公といふ。

●朱　熹（南宋）

（南宋孝宗淳熙四年　日本紀元一一七九年）

朱熹字は元晦（又仲晦）は遯翁又晦菴と號す、徽州婺源縣の人なり、南宋の高宗建炎四年九月生る、初め劉子羽に從ひ、後李侗に從ひて學ぶ、侗茅舍を山田に結び、世故を絕つこと四十餘年、貧に處して怡然として自得せり、世人延平先生と稱して之を推尊す、紹興十八年進士に登第して煥章閣の待制となり、後秘閣修撰に移る、熹天姿粹美にして、讀書窮究卵行を本となし、治く有道有識の士と交遊して、終に聖學の宗を得、先聖の秘蘊を發せり、孔孟以來二千有餘年間の第一人と稱せらる、後世の學者其恩に浴せざるものなく、吾朝德川氏の學說は實に其の學說を以て宗師とせり、著書頗る多く、四書集註、通鑑綱目、周易本義、詩經集傳、語錄、語類等あり、卒する時年七十一、太師を贈り、徽國公に封せられ、文公と謚し孔子の廟庭に從祀せらる。

●世祖（元）忽必烈

（元世祖至元三一年は日本紀元一九五四年（伏見天皇永仁二年）西暦一二九四年）

元世祖諱を忽必烈といふ、憲宗の弟なり、豪邁にして雄略あり、且つ母に仕へて至孝なり、憲宗三道より宗を攻むる時、世祖鄂州を圍みたりしが、憲宗陣中に崩じて、阿藍答兒等世祖の弟阿里不可を立てんとするを聞き、鄂州より北還して帝位に即き、中統と建元す、至元元年都を燕京に定め、同八年國號を建てゝ、大元と稱せり（宋度宗の咸淳七年）時に宋にありては賈似道權を專らにし、小群廷に滿ちて國勢益々衰弱を來せるを以て、世祖終に大擧して宋を攻む、似道等潰奔し、元兵恭帝を執へて北方に送れり、文天祥張世傑等の忠臣尋で凋殘し宋祚滅せり、時に至元一六年なり、世祖宋を滅せるの餘威を以て兵を日本に加へたりしも、偶、暴風大に起り、元の戰艦皆覆沒し、生還するもの纔に三人のみ、又安南を討ち爪哇を征して威武を振へり、かく外征に寧日なかりしを以て、財用足らずして聚斂の臣を用ひ、且つ王族の叛亂ありしと雖、一面官制を定め文學を興し、佛教を尊び士を禮する等、元祚の基を堅ふするものありき、至元三一年崩ず、在位三十五年なり。

●文天祥（南京）

（元世祖至元一九年は日本紀元一九四二年（宇多天皇弘安五年）西暦紀元一二八二年）

文天祥字は宋瑞、南宋の寶祐四年進士に及第して其第一位を占む、是時元の國勢隆々強盛を致し、德祐元年其將伯顏大軍を率ひて、南侵するや、所在風を臨んで降り、宋の都督賈似道揚州に潰奔せり、天祥因て勤王の兵を募り、張世傑等と謀りて元兵を拒ぐ和を議するに當りて軍前に使し、議論屈せず能く身を全ふして還り、帝の再興を謀り屢々元兵と力戰せり、幾くもなくして元將張弘範の爲に執へられ、腦子を呑んで自殺せんとせしも果さず、固く死せんことを請へども、弘範許さず、客禮を以て之を待つ、厓山已に破れ、帝と太后と皆死し、宋祚滅するに及び、弘範切に元に仕へんことを勸む、天祥從はず燕京に送らる、途にして痛恨禁せず、食はざる八日に及ぶも死せず、燕に留まること三年勵操益々堅し、曾々天祥兵を起すといふものあり、帝（元の世祖）終に有司に詔して燕京の柴市に於て之を斬らしむ、俄に詔ありて之を止めしめたるも、天祥已に死せり、天祥刑に臨み從容として吏卒に謂て曰く我事畢矣と、南向再拜して死す、年四十七、時に世祖の至元十九なり、張某なるもの天祥の骸骨を負ふて吉州に歸葬するの日、林某亦天祥の母夫人の柩を舁きて至る、人以て忠孝の感ずる所となす

●鄭成功（明）

（清聖祖康熙元年は日本紀元二三三二年（後西院天皇寛文二年）西暦一六六二年）

鄭成功は父を芝龍といふ、母は日本九州平戸の人なり、芝龍平戸に到り、在留中生む所なり、長じて峻爽にして氣節あり、此時韃靼の太清帝威力强大屢々明軍を破り、弘光元年終に南京を攻落して福帝を擒にす、唐王尋で即位して福建に都せしも、幾くもなくして福建も陷落し、桂王立て福州に都せり、成功國難の日に逼るを見て、慨然として興復の志あり、儒服を孔廟の前に焚き、名を國姓爺と改め、義兵を起して福建の沿岸を略して厦門に據れり、桂王其戰功を嘉して延平郡王に封じ、招討大將軍となせり、成功勢に乘じて溫台二州を取り、長江に入りて、鎮江南京其他の諸路を下し、清兵の其鋒鏑に死するもの擧げて數ふべからず、終に北京に攻入せんとし、清帝親征の議を決せしが、偶々成功戎文れ、桂王は緬甸に入りて清將吳三桂の爲めに殺さる、成功は台灣に據りて魯王を奉せしも、幾もなくして魯王沒し、成功も亦卒せり、時に清の聖祖康熙元年なり、子錦舍乃父の志を繼ぎ、台灣に據りて明の正朔を奉じたり、孫奏舍に至りて終に清に降れり。

●陸象山（南京）

（南宋孝宗淳熙二年は日本紀元一八三五年（高倉天皇安元元年）西暦一一七五年）

陸象山名は九淵、象山は其號なり、金溪の人にして宋代の碩學なり、其兄庸齊、梭山、復齊皆當時の儒者たり、象山少時已に呑牛の氣あり、長じて豪爽雄邁其學德性を尊ぶを以て主となし、尋常章句の儒を排せり、同時に朱熹字は元晦あり、專ら問學を主として德行を後にし、修身の法必ず洒掃應對より進みて聖人の域に達すべきを說く、象山は小心翼々たる格物究理の學風を剖擊して、是れ區々文學の末に拘し其天資を戕賊するものとなし、二者の間相下らざりしかば、當時の學者呂東萊之を憂へて調停を計り、淳熙二年を以て兩者を鵝湖に會せり、然も此會に於ける兩者の筆論數日に及べるも、終に調和する能はざりき、兩子の學說ハ[illegible]るに拘らず、其私交の極めて親密なりしは、偶々以て兩積學の胸懷を見るべし、足るものあり、朱子曾て象山を招き、舟遊して歡樂を極め、又其書院白鹿洞に象山を聘して講說せしめ、之を敬聽せし如きは以て美談として傳ふべきなり、象山の學は謝上蔡に私淑して啓發する所ありしもの、謝氏は二程子に學べるものなり、明、王陽明出で、象山の學風を恢擴祖述せり。

（元）世祖忽必烈

（南宋）

の元正朔を奉じたり、孫奏合乃父の志を繼ぎ、台灣に至りて、終に清の聖祖康熙に降れり。

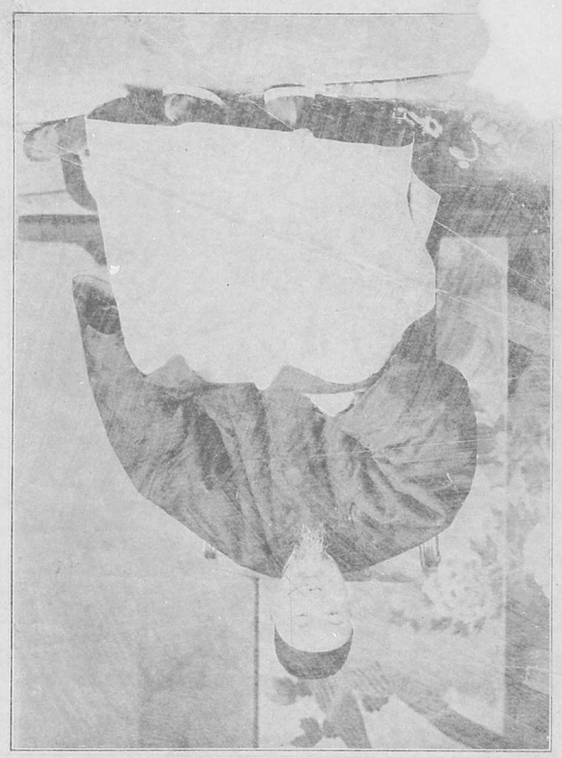
死せんとしれる、成功は台灣に據りて魯王を奉せしも、幾もなく、桂王は緬甸に入りて清帝親征の議を決せしが、偶々成功の遺路を下し、清兵の到鋒錦に入れり、清帝の擧げて數ふべからず、終に北京に攻入り、鐵江南京其他乘じて溫台二州を取り、長江に成功勢に

(清) 聖祖 (康熙) (吳雄)

(南宋) 陸象山 (學者)

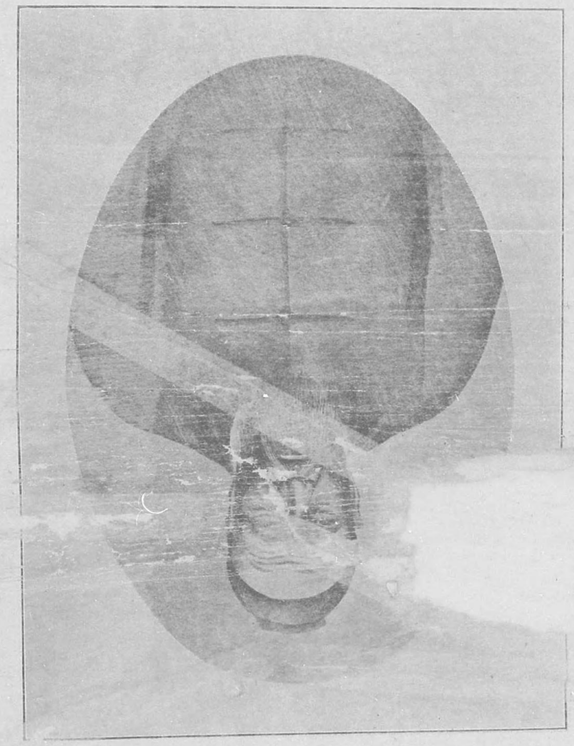
(明) 鄭成功 (忠臣)

然も此曾に於ける兩者の學問は、馮々以て兩者の學の一端を見るに足るものあり、朱子曾て象山を招き、舟遊して歡樂を極め、又其書院白鹿洞に象山を聘して講說せしめ、之を敬聽せし知るべきは、私淑して啓發する所ありしもの、謝上蔡に以て美談となして傳ふべきなり、象山の學は、謝氏は二程子に學べるものなり、明に王陽明出で、象山の學風を恢擴祖述せり。



(清) 李鴻章 (名臣)

(清) 高宗 (乾隆帝) (明君)



(清) 李鴻章 (名臣)

(清) 高宗 (乾隆帝) (明君)

●高宗 (清) (乾隆帝)

(清高宗 乾隆帝 天皇 元年 日本 西紀 一七三六年 清 乾隆元年 一七三六年)

清高宗諱を弘曆といひ、樂善堂と號す、雄才大略父世宗に過ぐ、世宗崩じて帝位に上り、乾隆と改元す、即位の初大に言路を洞開し、人才を擧用すること元に勝れ、貢士の試しを立て、勤勞治體に通せる者を取り、又先賢先哲の祠を設け、儒學を尊ぶ、文治の盛事を擧げ、武功の赫々たる、蒙古・回部・緬甸・廓爾喀・臺灣・金川・安南・緬甸・暹羅・琉球・蘭・英・露・土・伊・葡・西・佛・墨・瑞・普・墨・瑞・普・墨・瑞・普

高宗（清）（乾隆帝）

（清高宗乾隆帝 桃園町天皇 寶暦元年 西紀一七五一年）

清高宗諱を弘曆と、祖世宗の第四子にして、康熙の末年、皇父聖祖の意を承け、位を嗣ぎ、在位六十年、而して、清朝の盛は、高宗に至りて極まれり、高宗の文武兼備、聖祖に譲らず、康熙の遺臣を、悉く、用ひて、政を、治め、文学を、奬励し、四庫全書を、編集し、康熙字典を、刊行し、詩文集を、著はし、詩韻を、撰し、詩を、作り、書を、善くし、文を、作り、書を、著はし、武を、練り、以て、清朝の、盛を、極めたり、高宗の、治世、六十年間、内外、平定、したる、戰役、十全と、稱せらる、其、大小、戰役、三十、五、内、

明治四十一年六月二十八日印刷
明治四十一年七月二十八日發行

定價
甲種 總クロース三方小口金 最上極美製本 乙種 ヲ用掛圖説明 付 金九圓 正價 金貳圓
送料 內地 金貳拾八錢 內地 金五拾六錢
清韓 金六拾錢 清韓 金壹圓貳拾錢

著作權所有

著作者兼發行者　東京市麴町區上六番町三十番地　瀨川光行
印刷者　東京市京橋區日吉町十三番地　小川一眞
製版所　東京市京橋區日吉町十三番地　小川寫眞製版所
印刷者　東京市神田區中猿樂町四番地　藤澤外吉
印刷所　東京市神田區中猿樂町四番地　秀光社活版印刷所　電話本局一九二五番
製本人　東京市京橋區三十間堀二丁目一番地　前田福次郎
發行所　東京市麴町區上六番町三十番地　瀨川書房　電話番町一五八八振替貯金八六〇二
大賣捌所　東京市日本橋區吳服町十八番地　合資會社　北隆館書店　電話本局三〇七六振替貯金七五〇
大阪市南區心齋橋筋一丁目六十七番屋敷　松村文海堂　電話東八四振替貯金一四〇三

エト 3M — 100

大隈伯爵、福島中將、高田、伊東、其他諸博士序文
文學士、莊田安太郎先生編、清國、張春濤先生譯

第三版

地理風俗 世界寫眞帖

甲種	三方小口金製本極美	乙種	學校授業用掛圖帙入	丙種	板紙兩面張掛圖
正價	金九圓	正價	金拾貳圓	正價	金拾四圓
特價	金七圓	特價	金九圓五十錢	特價	金拾壹圓
送料	金三十錢	送料	金五十錢	送料	金六十錢

本書は弊書房が多年の苦心を以て帝國大學、高等師範學校、東京美術學校等の教授諸氏及陸海軍武官、外交官等にして世界各國を巡遊せる人々を歷訪して得たる材料に加るに倫敦、紐育の寫眞出版會社より直輸したるもの凡そ二萬餘點中より最も珍奇にして有益なりと思惟せるもの六百三十枚を選擇して之を寫眞版に縷刻せる者なり。說明は專門の博士諸氏に請ひ校閲を經たる者にて世界各國の皇城、離宮、皇帝、皇后、大統領、酋長、貴族、僧侶其他諸般の風俗、山陵、古墳、名勝、舊蹟、殿堂、城廓、都市、等地理上著名の寫眞は悉く之を網羅せり。蓋しヒマラヤ、アルプス、ナイル、スエズ等の港灣諸山河サラハ沙漠、ナイアガラ瀑布、揚子江等其景色の雄大なる、巴里、倫敦、伯林等文明國市街の繁盛にして其設備の整頓せる、其建築の宏壯なる眞に吾人をして喫驚せしむる者あり。又馬來、南洋諸島、南北印度、亞弗利加諸蠻族の怪異なる風俗に接しては全く夢想國に遊ぶの思ひあらん。加るに東洋に於ては萬里の長城を初め西湖、洞庭の勝、周漢、三國時代の遺趾、釋迦孔子に關する各種の舊蹟等觀じ去り讀み來れば無限の趣味を禁ずる能はざるべし。豈家庭教育の絕好資料にあらずや。且つ編者は本書を中小學の教材に供するの目的を以て餘りに專門に奔り珍奇に流るゝを避け專ら中等地理書に散見する著名の材料を選擇せるを以て各學校に於ける外國地理の教材としては本書に據るの外又好參考書なきを確信す。

第六版

日本之勝景

甲種	三方小口金大和製本	乙種	學校授業用掛圖帙入
正價	金八圓	正價	金九圓五拾錢
特價	金五圓	特價	金六圓五拾錢
送料	金貳拾錢	送料	金四拾四錢

本書は日本全國の社寺、宮殿、山陵、古墳、名所、舊跡、都府、港灣、高山、巨川、歷史的建造物等の寫眞を集め之に和英兩文の詳細なる說明を加へたるものにて、發刊以來版を重ぬること五回、其發售部數數萬部に及び上流の家庭に於ては到る所本書の供給を見ざるはなし。今回第六版を發刊するに當り大方の盛意に報ひん爲、特に正價八圓を減じて特價實費金五圓と爲し一千册を限り發賣す。

本書は中學校、師範學校、高等女學校、高等小學校に於ける地理、歷史の參考書として最も適當なるのみならず家庭の備品として頗る恰好のものなり。特に其寫眞の豐富にして且つ美麗なる、製本の優秀高雅なる接客室の裝飾として無比の珍品たるべし。

發行所　瀨川書房

本書は日本全國の神社寺院宮殿城郭住宅庭園橋梁道路河川港灣其他造物等の寫眞を集め之に和英兩文の詳細なる説明を加へたるものにて、發刊以來版を重ぬること五回、其發售部數數萬部に及び上流の家庭に於ては到る所本書の供給を見ざるはなし。今回第六版を發刊するに當り大方の盛意に報ひん爲、特に正價八圓を減じて特價實費金五圓と爲し一千册を限り發賣す。

本書は中學校、師範學校、高等女學校、高等小學校に於ける地理、歷史の參考書として最も適當なるのみならず家庭の備品として頗る恰好のものなり。特に其寫眞の豐富にして且つ美麗なる、製本の優秀高雅なる接客室の裝飾として無比の珍品たるべし。

發行所　瀨川書房

落